福　岡　市

鴻臚館跡 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集

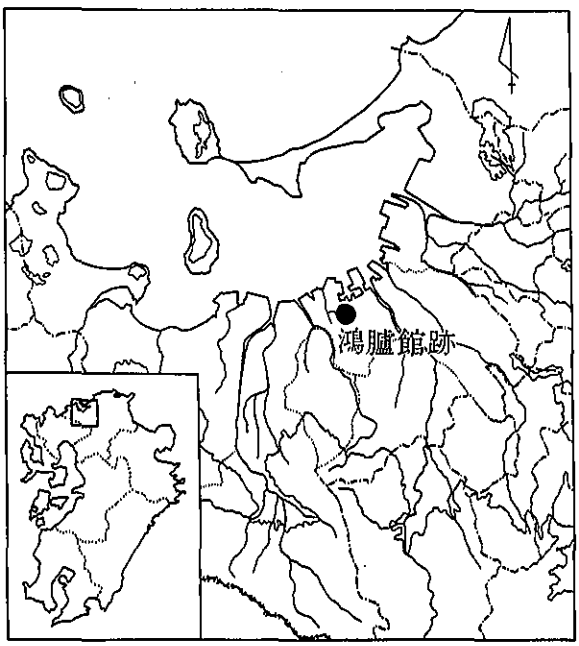
1992

福岡市教育委員会

福　岡　市

鴻臚館跡 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集



遺跡略号　KRE-3
遺跡調査番号　8747

1992

福岡市教育委員会

SK-02 青磁褐彩双耳壺

SK-02 青磁褐彩水注

SD-06 青磁毛彫皿

序

福岡市は、海に開かれた活力あるアジアの拠点都市をめざし、文化を活かした街づくりを進めています。1987年、その歴史的原点である古代の迎賓館「鴻臚館」が再発見されました。教育委員会では、鴻臚館の全容解明にむけて専門の先生方からなる「鴻臚館跡調査研究指導委員会」を設置し、委員会の御指導のもとに、発掘調査や関連資料の収集に鋭意努めているところであります。

本格調査では、現在までに大型の礎石建物、布掘り柵列、莫大な量の中国産陶磁器、イスラム陶器、ガラス容器、木簡等貴重な発見が相次ぎ、全容解明に大きく前進した成果を得ております。

鴻臚館から出土した主な遺物は福岡市博物館に、大型の礎石建物遺構の一部は、現地に覆屋を建て公開展示しております。あわせて御高覧頂きますようにお願いいたします。

先に、報告書の第１集として、前年度までの調査概要を刊行しましたが、本書はそれに続く第２集としまして鴻臚館再発見となった平和台野球場の本報告であります。本報告書が埋蔵文化財への御理解と御認識の一助となり、また、研究資料としても御利用頂ければ幸いであります。

最後になりましたが、常日頃より御理解、御協力頂いている大蔵省福岡財務支局、福岡市都市整備局、鴻臚館跡調査研究指導委員会、文化庁、福岡県教育庁の皆様に、深甚なる謝意を表します。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　言

1　本書は福岡市中央区城内に所在する鴻臚館跡の平和台野球場外野席スタンドの試掘調査（第３次調査）の報告書である。

2　本書で用いる方位は、国土地理院座標第２系による座標北である。磁北はこれより６°２′西偏する。

3　遺構の呼称は記号化し、建物→SB. 土坑→SK. 溝→SD. 堀→SG. その他→SX. とし，遺構番号は，遺跡でとうし番号をふっているので，遺構間における番号の重複はない。

4　本書で用いた中国産陶磁器の分類は、鴻臚館出土品の仮分類であり、従来の分類に従っていない。本遺跡出土の陶磁器類は莫大な量にのぼり、今後、充分な整理を経た上で整合性をとりたい。

5　本書に使用した実測図の作成は、山崎純男、吉武学、池崎譲二、埋蔵文化財課技師によるものであり、遺物実測は主に田中克子、吉武学、池崎による。

6　実測図の製図は、山崎、吉武、田中、川端、白木による。

7　本書で用いた写真は、山崎、吉武、大庭、康時による。

8　本書の執筆は山崎がこれにあたった。

9　本書の編集は山崎が行なった。

本 文 目 次

第１章　序説 …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．発掘調査の組織と構成 …… 2
第２章　調査の記録 …… 7
　１．第３次調査の概要 …… 7
　２．古代の遺構と遺物 …… 9
　　(1)　SK－01 …… 9
　　a　遺構 …… 9
　　b　出土遺物 …… 11
　　(2)　SK－02 …… 42
　　a　遺構 …… 42
　　b　出土遺物 …… 42
　　(3)　SK－03 …… 51
　　a　遺構 …… 51
　　b　出土遺物 …… 51
　　(4)　SK－04 …… 55
　　a　遺構 …… 55
　　b　出土遺物 …… 55
　　(5)　SK－05 …… 55
　　a　遺構 …… 55
　　b　出土遺物 …… 57
　　(6)　SK－05′ …… 61
　　a　遺構 …… 61
　　b　出土遺物 …… 61
　　(7)　SD－06 …… 63
　　a　遺構 …… 63
　　b　出土遺物 …… 65
　　(8)　SD－07 …… 69
　　a　遺構 …… 69
　　b　出土遺物 …… 69

(9) SD－08・10 …… 69
a 遺構 …… 69
b 出土遺物 …… 72
(10) SD－09 …… 78
a 遺構 …… 78
b 出土遺物 …… 80
(11) SB－11 …… 80
a 遺構 …… 80
b 出土遺物 …… 80
(12) SB－12 …… 81
(13) SB－15 …… 82
(14) SB－16 …… 83
第3章 おわりに …… 84

挿図目次

Fig. 1 遺跡の位置と周辺遺跡 …… 4
Fig. 2 遺跡の立地と調査区 …… 5
Fig. 3 第3～第7次調査区の関連 …… 6
Fig. 4 第3次調査区全体図 …… 8
Fig. 5 SK－01 実測図 …… 10
Fig. 6 SK－01 出土遺物実測図Ⅰ（青磁器） …… 12
Fig. 7 SK－01 出土遺物実測図Ⅱ（青磁器） …… 14
Fig. 8 SK－01 出土遺物実測図Ⅲ（青磁器・無釉陶器） …… 16
Fig. 9 SK－01 出土遺物実測図Ⅳ（白磁器） …… 19
Fig. 10 SK－01 出土遺物実測図Ⅴ（白磁器） …… 20
Fig. 11 SK－01 出土遺物実測図Ⅵ（白磁器） …… 23
Fig. 12 SK－01 出土遺物実測図Ⅶ（白磁器） …… 24
Fig. 13 SK－01 出土遺物実測図Ⅷ（高麗陶器） …… 28

Fig. 14　SK－01 出土遺物実測図Ⅸ（土師器）…… 30
Fig. 15　SK－01 出土遺物実測図Ⅹ（土師器）…… 31
Fig. 16　SK－01 出土遺物実測図Ⅺ（黒色土器）…… 35
Fig. 17　SK－01 出土遺物実測図Ⅻ（黒色土器）…… 36
Fig. 18　SK－01 出土遺物実測図ⅩⅢ …… 38
Fig. 19　SK－01 出土遺物実測図ⅩⅣ …… 39
Fig. 20　SK－02 実測図 …… 41
Fig. 21　SK－02 出土遺物実測図Ⅰ …… 43
Fig. 22　SK－02 出土遺物実測図Ⅱ …… 45
Fig. 23　SK－02 出土遺物実測図Ⅲ …… 48
Fig. 24　SK－03～05 実測図 …… 50
Fig. 25　SK－03 出土遺物実測図 …… 52
Fig. 26　SK－04・05出土遺物実測図 …… 56
Fig. 27　SK－05 出土遺物実測図 …… 59
Fig. 28　SK－05′出土遺物実測図 …… 61
Fig. 29　SD－06 実測図 …… 62
Fig. 30　SD－06 出土遺物実測図Ⅰ …… 64
Fig. 31　SD－06 出土遺物実測図Ⅱ …… 66
Fig. 32　SD－07 実測図 …… 68
Fig. 33　SD－08・10 実測図 …… 70
Fig. 34　SD－08 出土遺物実測図Ⅰ …… 73
Fig. 35　SD－08 出土遺物実測図Ⅱ …… 75
Fig. 36　SD－08 出土遺物実測図Ⅲ …… 76
Fig. 37　SD－09 土層断面実測図 …… 77
Fig. 38　SB－11 実測図 …… 79
Fig. 39　SB－11 出土遺物実測図 …… 81
Fig. 40　SB－15・16・土層断面実測図 …… 82

図版目次

ＰＬ．１　(1)第３次調査Ⅰ区全景
　　(2) SK－01・02（上空より）
ＰＬ．２　(1)Ⅰ区東側（上空より）
　　(2)Ⅱ区南端部（上空より）
ＰＬ．３　(1) SK－01 検出状況
　　(2) SK－01 遺物出土状況（上層）
ＰＬ．４　(1) SK－01 中央セクションベルト
　　(2) SK－01 中央断面土層と土坑の関係
ＰＬ．５　(1) SK－01 セクションベルト板片出土状況
　　(2) SK－01発掘完了後
ＰＬ．６　SK－01 出土青磁器Ⅰ（上は毛彫文様のある皿、下は花文碗）
ＰＬ．７　SK－01 出土青磁器Ⅱ（花文碗、横から（上）底部（下））
ＰＬ．８　SK－01 出土青磁碗器Ⅲ
ＰＬ．９　SK－01 出土白磁器Ⅰ
ＰＬ．10　SK－01 出土白磁器Ⅱ
ＰＬ．11　SK－01 出土白磁器と青磁器
ＰＬ．12　SK－01 出土白磁器と青磁器
ＰＬ．13　SK－01 出土白磁器と青磁器
ＰＬ．14　SK－01 出土白磁器
ＰＬ．15　陶磁器利用の円盤（上、身込部分　下、底部）
ＰＬ．16　第３次調査出土陶磁器（１、２、SK－01 出土白磁器　３、SD－08　出土白磁器
　　４、SD－08 出土須恵器　５、SD－08 出土新羅陶器）
ＰＬ．17　SK－01 出土無釉陶器（上、外面　下、内面）
ＰＬ．18　SK－01 出土高麗陶器（上、外面　下、内面）
ＰＬ．19　SK－01 出土土師器、黒色土器
ＰＬ．20　SK－01 出土土師器（皿、杯）
ＰＬ．21　SK－01 出土土師器、黒色土器
ＰＬ．22　(1)　SK－02（南から）
　　(2)　SK－02（西から）

ＰＬ．23 (1) SK－02　ガラス出土状況
(2) SK－02　完掘後
ＰＬ．24 SK－02 出土遺物（上、青磁合子蓋　下、青磁褐彩四耳壺）
ＰＬ．25 SK－02 出土遺物（上二段、青磁器碗、下、黒色土器）
ＰＬ．26 SK－02 出土遺物（上二段、青磁器碗、下左、青磁器蓋、下右、白磁器）
ＰＬ．27 SK－02 出土ガラス容器
ＰＬ．28 (1) SK－03～05検出状況
(2) SK－05 検出状況
ＰＬ．29 (1) SK－03 遺物出土状況
(2) SK－03 出土遺物（1、青磁器（草花文皿）２、褐釉陶器（灯蓋）３、青磁器）
ＰＬ．30 (1) SD－06（南から）
(2) SD－06（北から）
ＰＬ．31 (1) SD－06 硯出土状況
(2) SD－06 完掘状況
ＰＬ．32 (1) Ⅰ区礎石出土状況（原位置より移動）
(2) Ⅰ区　地業土層断面
ＰＬ．33 (1) SB－11（南から）
(2) SB－11（東から）
ＰＬ．34 (1) SB－11 完掘後
(2) SD－08 瓦出土状況
ＰＬ．35 (1) SB－15・16 検出状況
(2) SB－15 完掘状況
ＰＬ．36 (1) SB－15　SB－16 の切り合い関係
(2) SB－15 布掘り断面

第1章　序　説

1．調査に至る経過

1987年12月、福岡市都市整備局公園建設課によって平和台野球場外野席スタンドの改修工事が開始された。この工事はこの地が史跡福岡城跡内にも関わらず、無届けで行われたものであった。これを知った教育委員会埋蔵文化財課では急遽工事の中止を申し入れ、この地区が福岡城跡ばかりでなく古代の迎賓館である筑紫館・鴻臚館と推定される重要な地域であることを考慮し、関連部局及び文化庁記念物課との協議を経て、試掘調査を12月24日より実施した。

試掘調査開始時は、すでに一部のスタンドが除去されたり、また、すでに盛土部分まで除去され、地山である頁岩岩盤が露出している部分もあった。盛土中には古代～近世の遺物が多く含まれていたが、表面的には遺構の残存の有無は判断しかねた。試掘は重機によってスタンド部分の盛土部分を除去することから開始した。開始直後から古代の柱穴・土坑の輪郭があられ、我々が予想した以上に遺跡の残存状態が良好であることが判明した。また、古代の遺構と同一面、あるいは重複して江戸時代の遺構も残っていた。この試掘結果をもとに、福岡市・福岡市教育委員会は文化庁と協義を重ね、無届け工事を陳謝するとともに今後の対応策を検討した。その結果、当面の課題として、年度末も迫っているので、工事の完了は市民の待望するプロ野球オープン戦に間にあわせることとするが、遺跡については、全体的にその状況を把握し破壊することなく保存処置を講じ、工事は設計変更をしても遺跡部分にかかることのないようにするというものであった。よって教育委員会では試掘調査に引き続き内容把握のための調査を進めた。

この間、マスコミ各社の報道はすさまじく鴻臚館の歴史的重要性をあますことなく紹介し、また試掘内容把握のための調査で検出した遺構や出土遺物を公表した。これらマスコミ報道は、いやが上にも市民の鴻臚館に対する興味をそそることとなった。調査は1月20日、無事終了した。遺構面は砂で厚く覆い、その上に盛り土をして将来の調査にそなえて保存処置を講じた。市教育委員会は、調査結果を文化庁に報告すると共に、市幹部にも鴻臚館の重要性を説明した。

おりしも、福岡市は、市制百周年を一年後に控え、海に開かれた活力あるアジアの拠点都市をめざして新たな発展をとげようとし、アジア太平洋博覧館「よかトピア」の開催準備中であり、古代の迎賓館、筑紫館・鴻臚館の再発見は、まさに飛躍する福岡市の歴史的原点であった。これを受けた市は、筑紫館・鴻臚館跡の全容解明をめざし、教育委員会に県内外の一流の専門家からなる鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、担当職員2名を配置し、本格調査の充実をはかると共に、都市整備局に舞鶴公園基本構想委員会を設置し福岡城・鴻臚館を福岡市のセン

トラル・パークとして位置づけ都市計画を進めていくこととなった。

2．発掘調査の組織と構成

野球場外野スタンドの改修工事に伴う緊急の試掘調査であったが、遺跡発見後、教育委員会では遺跡の重要性を考え、以下の体制で調査を進めた。なお、調査中には諸先生方には現地に来ていただき多くの指導を受けることができた。

調査期間　1987年12月24日～1988年1月20日

調査主体　福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎、教育次長　尾花　剛、文化部長　川崎賢治、埋蔵文化財課長　柳田純孝、第一係長　折尾　学

調査庶務　埋蔵文化財課第一係　岸田　隆、松延好文

調査担当　山崎純男（埋蔵文化財課文化財主事、事前審査担当）

吉武　学（埋蔵文化財課第一係）

池崎譲二（博物館準備室）

調査協力　永井昌文（九州大学教授）西谷　正（九州大学教授）八木　充（山口大学教授）田村圓澄（九州歴史資料館館長）川添昭二（九州大学教授）渡辺正気（福岡県文化財保護審議会、専門委員）平野邦雄（東京女子大学教授）石松好雄、高倉洋彰、横田賢二郎、森田　勉（九州歴史資料館）後藤　直、柳沢一男、濱石哲也、田中壽夫（福岡市埋蔵文化財センター）二宮忠司、横山邦継、山口譲治、井澤洋一、山崎龍雄、松村道博、杉山富雄、小林義彦、下村　智、大庭康時、小畑弘己、米倉秀紀、常松幹雄、佐藤一郎、瀧本正志、荒牧宏行、吉富秀俊、加藤良彦（福岡市埋蔵文化財課）

鴻臚館跡調査研究指導委員会（任期2年）

委員長　平野邦雄（東京女子大学教授　古代史）

副委員長　横山浩一（九州大学名誉教授　考古学）

委　　員　田村圓澄（九州歴史資料館館長　古代史）

川添昭二（九州大学教授　中世史）

八木　充（山口大学教授　古代史）

笹山晴生（東京大学教授　古代史）

2．発掘調査の組織と構成

坪井清足（大阪文化財センター理事長　考古学）
渡辺正気（福岡県文化財保護審議会専門部会委員　考古学）
小田富士雄（福岡大学教授　考古学）
西谷　正（九州大学教授　考古学）
鈴木嘉吉（奈良国立文化財研究所所長　建築史）
沢村　仁（九州芸術工科大学教授　建築史）
中村　一（京都大学教授　造園学）
杉本正美（九州芸術工科大学教授　造園学）
渡辺定美（東京大学教授　都市工学）

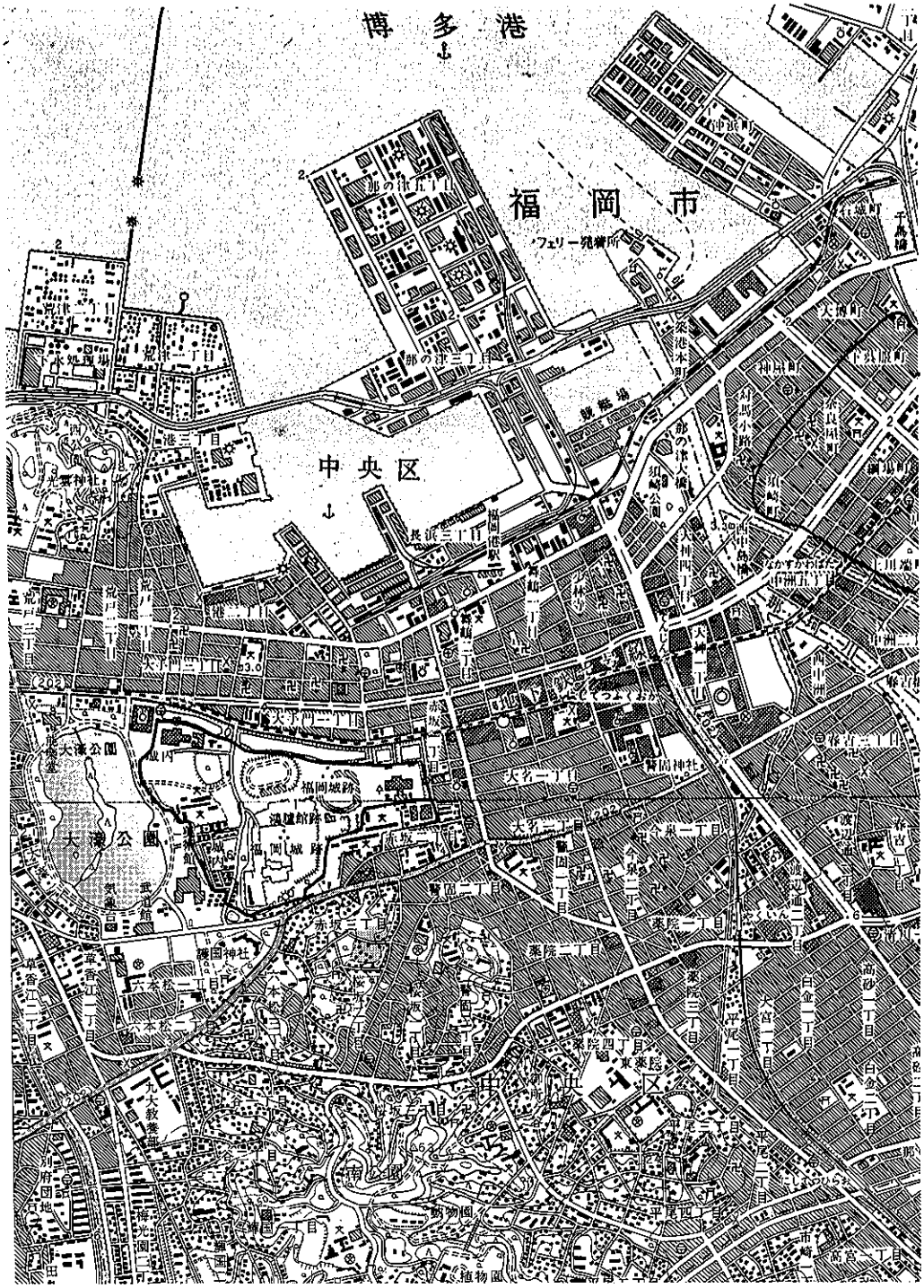


Fig. 1　遺跡の位置と周辺遺跡　1．鴻臚館跡　2．博多遺跡群

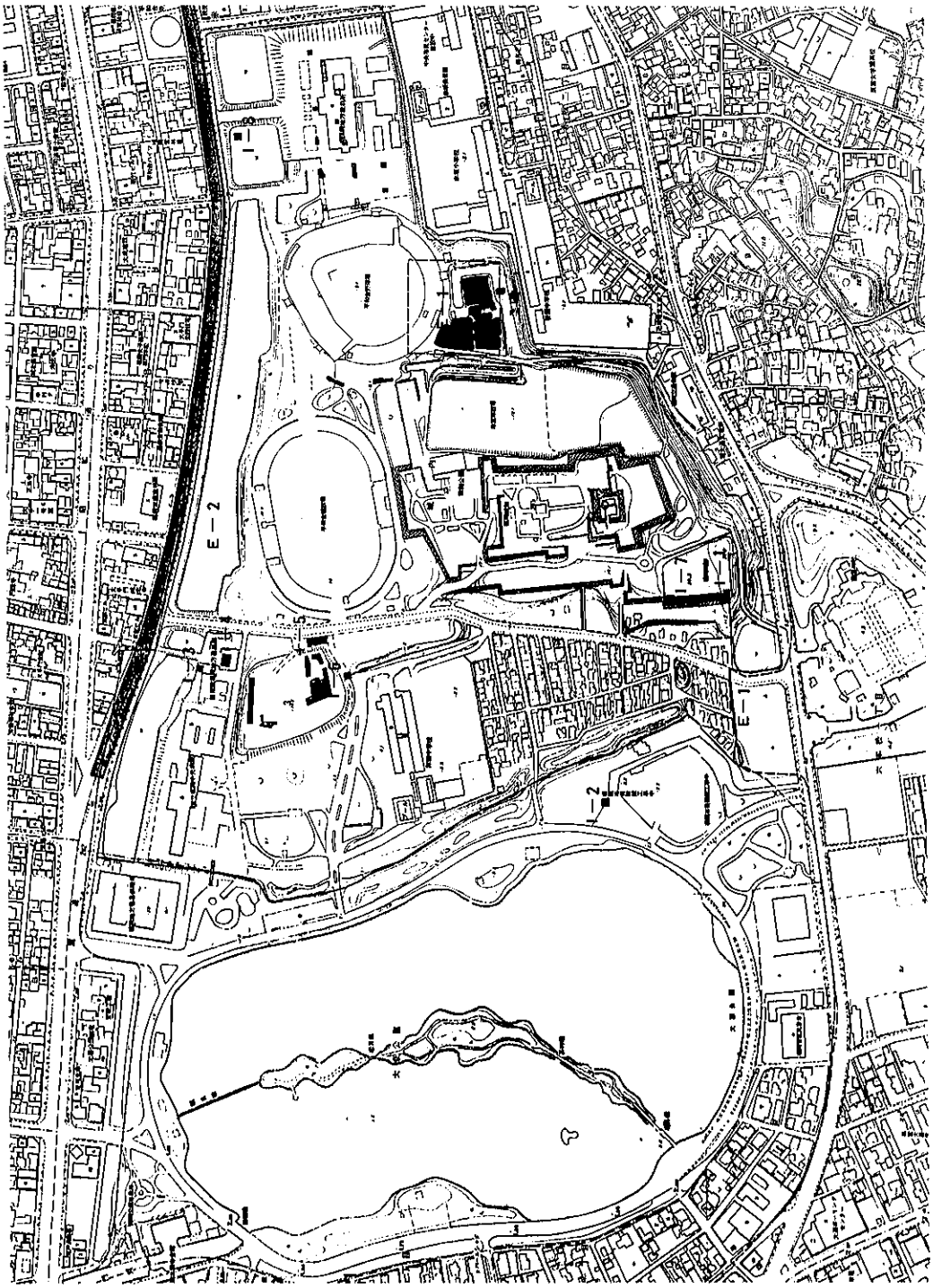


Fig. 2　遺跡の立地と調査区

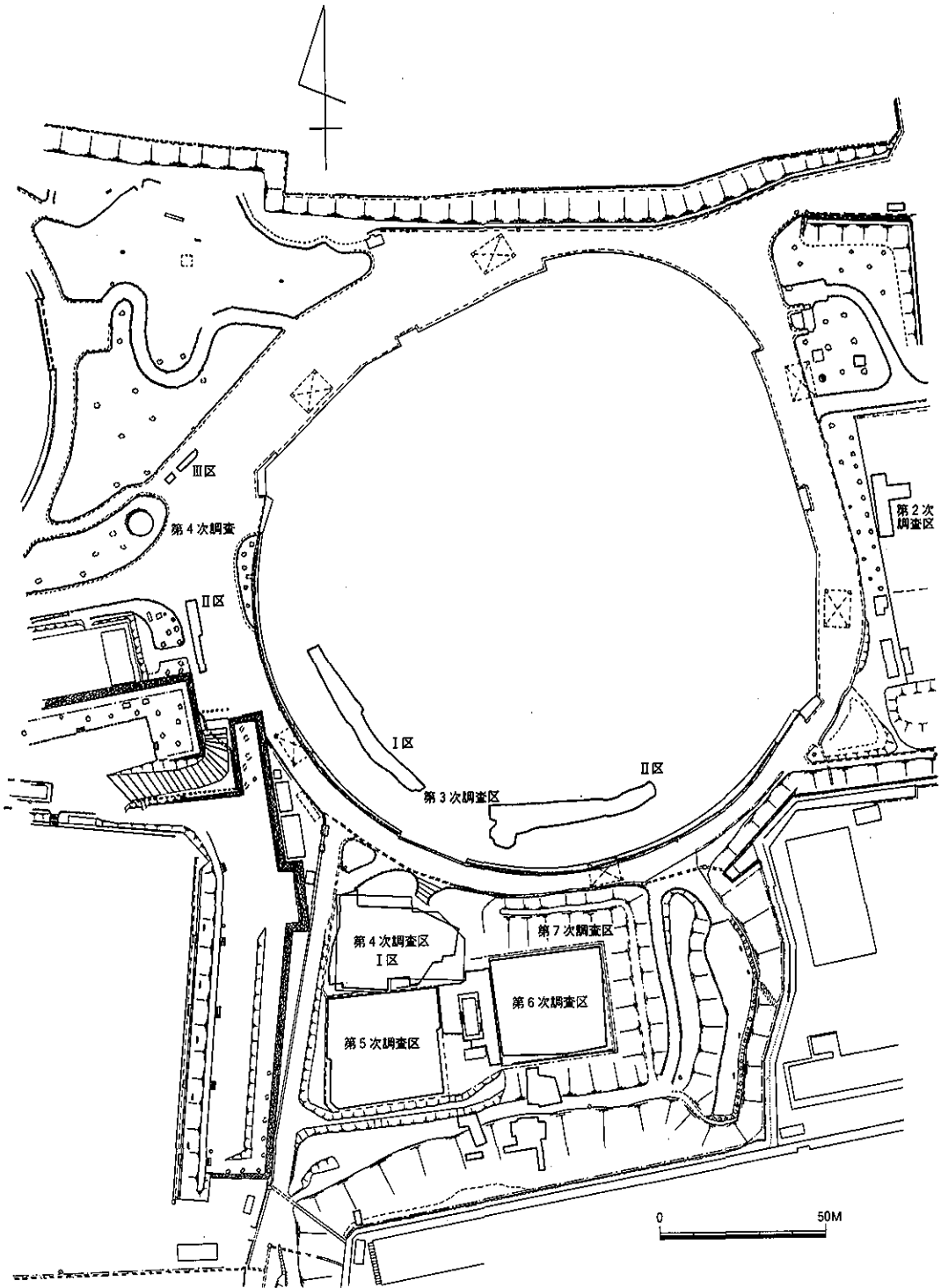


Fig. 3　第3～第7次調査区の関連

第２章　調査の記録

１．第３次調査の概要

第３次調査は、福岡市都市整備局が計画した平和台球場外野席スタンド改修工事に伴う緊急調査として、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が、昭和62（1987）年12月24日から、翌63年１月20日まで実施した。調査に至る経過は前述したとうりである。調査は改修工事にかかる時間的制約から改修工事によって破壊される可能性がある外野席スタンドの最もグランド側に近い部分を対象とした。調査は盛土の除去から開始した。スタンドの盛土にも古代から近世にかけての遺物が多量に含まれている。盛土を除去した直下にすぐ遺構が検出され、その遺構の保存状態は良好であった。

この地域は国指定史跡福岡城跡内であることはもちろんのこと、福岡城遺構と同一面や下層から検出される古代の遺構が迎賓館である筑紫館・鴻臚館の遺構である可能性が高いなどの重要性から、福岡市教育委員会は改修工事の設計変更を求め、検出した遺構については、調査終了後、川砂を用いて盛土保存し、将来の調査に備えることとした。

調査区はスコア・ボードを挟んで２区に分かれる。Ⅰ区、東側のレフト側スタンドで、発掘面積は約350㎡である。Ⅱ区、ライト側スタンドで、発掘面積は約300㎡である。

検出した遺構は９～11世紀を中心とする土坑、溝状遺構、掘立柱建物と江戸時代の礎石建物、道路、排水溝、明治～昭和にかけての陸軍歩兵第24連隊の施設などである。調査区あるいは、その中に設定したトレンチが幅３～４ｍと狭いために個々の遺構について全容が明らかになるものは少ない。遺構検出面はスコアボード両側とⅡ区の北端部が第三紀の岩盤であるのに対し、他の部分は自然の谷地形となり盛土による整地がおこなわれている。筑紫館・鴻臚館建設に先立って、あるいは施設の拡張に伴って大規模な造成工事が行われていることが明らかになった。

遺構と遺物について概観してみよう。土坑はすべてⅠ区で検出している。SK－01 はほぼ方形の平面プランをなす。岩盤に掘り込まれており、埋土の状態は自然堆積を示す。出土遺物は多量である。主な遺物として、毛彫りのある越州窯系青磁器、白磁器、黒色土器、土師器、奈良・平安時代の瓦類、木片、中国新時代の貨幣「大泉五十」、食料残滓である鳥・獣骨などがある。時期的には10世紀末が考えられる。SK－02 は長方形プランをなす。SK－01同様に岩盤に掘り込まれている。主な出土遺物は越州窯系青磁器、黒色土器、奈良時代の瓦類、イスラム産のガラス容器がある。時期は９世紀後半。SK－03～06は整地層中に切り込まれている。主な出土遺物は、奈良・平安時代の瓦類をはじめ、五代の越州窯系青磁器、白磁器、土師器、黒色土器がある。時期は10世紀～11世紀代である。溝状遺構はⅡ区で４条検出している。トレ

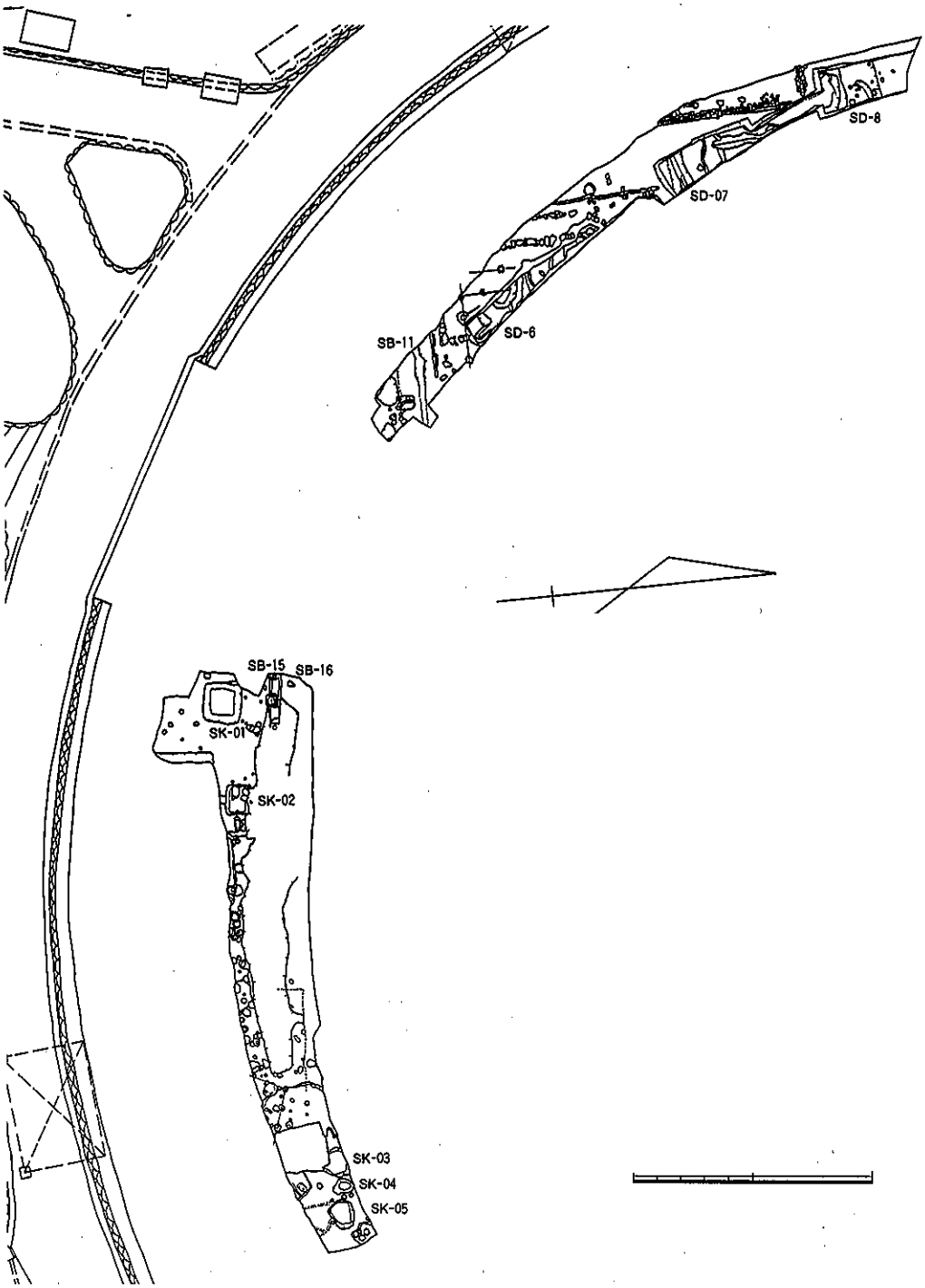


Fig. 4　第３次調査区全体図

ンチがせまいため相互の関係は明らかにできない。溝の方向は東西あるいはそれに直交する南北に限られている。埋土中からは奈良・平安時代の瓦類と若干の越州窯青磁器、白磁器、須恵器、土師器、新羅陶器などが出土している。建築遺構はスコアボードを挟んだⅠ、Ⅱ区に検出した。Ⅱ区では岩盤を削り出した基壇状の遺構があり、壇の斜面には多量の瓦が堆積していた。瓦類に混じり若干の青磁器、白磁器、イスラム陶器が出土している。Ⅰ区では布掘り掘立柱建物とそれを切る掘立柱建物各一棟を検出した。両者とも工事による攪乱のためその一部を確認したにとどまる。掘立柱建物についは直接時期を決定する遺物はないが、瓦葺き礎石建物よりは先行するものと思われる。

本調査では遺構的にも三時期の重複があることが注目される。

2．古代の遺構と遺物

第3次調査で検出した古代の遺構には、土坑（SK）、溝（SD）、建物（SB）等がある。しかし、いずれの遺構も調査区が狭まく、全形が判明したものは少ない。将来の本格調査によって訂正されるものもあると考えられるが、許とされたい。

出土遺物については、名遺構出土品について図化できるものについては収録につとめた。本節では資料の記述のみ行ない。数量的問題、分類等については、後論したい。

(1) **SK−01**（Fig. 5）

a．遺構

Ⅱ区の最も西側、バックスクリーンに約2m離れて検出した土坑である。第3紀の頁岩岩盤に掘り込まれている。検出面で東西径3.33m、南北径3.15mの隅丸方形プランをなす。底面では東西径2.25m、南北径2.00mのほぼ方形プランをなす。深さ0.75m。断面形は逆台形状をなす。

土層断面等からみると上部はかなりの削平を受けていると考えられる。土坑内の埋土は流れ込んだ状態、すなわち、レンズ状を示す自然堆積土層である。

土層堆積の層序を上より示すと、第1層　炭化物を少量含んだ黒褐色土層、厚さ14cm。第2層　黄褐色土（岩盤）の粒子を含んだ暗褐色土層、厚さ13cm。第3層　炭化物や木質材を多量に含んだ黒色土層、一部、板材も混入する。厚さ15cm。第4層　西側に片寄って存在する。黄褐色土と暗褐色土のブロック層である。厚さ10cm。第5層　暗褐色粘質土層、厚さ10cm。第6層　3層に似た暗褐色土層、中央部で粘質をおびる。厚さ5〜25cm。第7層　炭化物粒子を含んだ灰褐色粘質土層、厚さ20cm。第8層　西側の一部にみられる層で壁の崩落土である。第9層　炭化物粒子を含んだ灰褐色粘質土層で第7層よりやや明るい。厚さ7cm。第10層　西側の

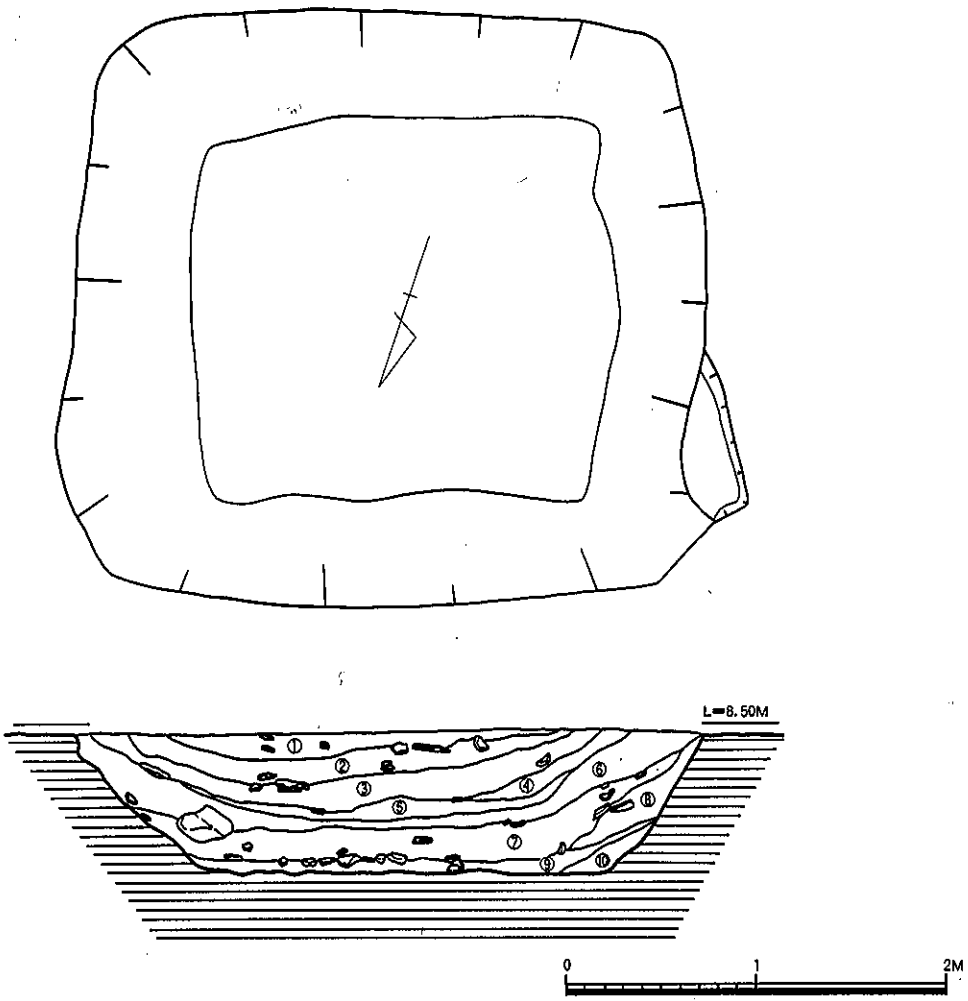


Fig. 5　SK−01 実測図

一部にみられる層で、壁の崩落土である。黄褐色土。埋土は主に西側から流れ込んだ状態を示している。

土坑内からは、奈良・平安時代の瓦をはじめ多量の越州窯系青磁器、白磁器、土師器、黒色土器、須恵器が出土。底面に接して「大泉五十」一枚も出土している。この他、食料残滓である獣骨等も出土している。

b．出土遺物

出土遺物には、青磁器、白磁器、緑釉陶器、無釉陶器等の中国産陶磁器、高麗陶器等の朝鮮半島産の陶器、須恵器、土師器、黒色土器などの国産の陶器、土器、瓦類（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦）、塼等の建物に付随する遺物、フイゴ羽口、ルツボ、スラッブ、鉄製品、砥石、磨石等の製鉄関連遺物、滑石製品、ガラス小玉、貨幣、木製品や、他に獣骨、魚骨、炭化種子等の食料残滓があり、量、質共に多彩である。

なお、本報告書では陶磁器を主体として報告し、瓦類や食料残滓の自然遺物は整理が終了次第、次報告書から収録していきたいと思う。

陶磁器の記述にあたっては、胎土、釉調、施釉法、目跡等から精製品（Ⅰ類）と粗製品（Ⅱ類）に大別し、高台の形状から、1、蛇ノ目高台　2、削り出しの輪高台　3、貼り付けの輪高台　4、平高台に小別し、さらに器形、技術的特徴等から、a、b、c…の細別を行う。なお、分類は各遺構別に行ない、次報告書において各分類の整合性をはかりたい。

青磁器（Fig. 6～8）

大部分が浙江省越州窯系の青磁器である。量的には白磁器より若干少ない。器形には碗、皿、蓋、水注、短頸壺、盤口壺がある。

碗（Fig. 6. 7）

Ⅰ－1a 類（Fig. 7－14, 17, 18）

3個体があり、いずれも底部破片である。底部の作りに若干の差異があるが一括する。全面施釉で、畳付の釉が削り取られる。畳付に目跡が残るが数は不明、釉はオリーブ色～明るいオリーブ色。3点とも割れ口がやや磨滅しており、他の破片の状態とは異なるので混入した可能性もある。

Ⅰ－1b 類（Fig. 7－13）

前者に比較し高台部分の幅がせまい。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。体部外面は丁寧なヘラ削り調整が加えられている。黄味の強いオリーブ色の釉を全面施釉する。畳付と見込に目跡が残る。数は復原すると10個である。

Ⅰ－2a 類（Fig. 6－1）

全面にオリーブ色の釉を施す。底部の輪高台は細く低い。高台内側に4個の大きな目跡があり、白色の目土が付着したままである。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部がやや肥厚し端部は尖り気味におさめる。内面なは太い片切彫りと毛彫りによる花文が全面に描かれる。中心部が六弁で外側は七弁に分割されている。器壁は薄く0.2～0.3cm。口径15cm、わずかにひずんでいる。器高6.1cm、鴻臚館出土の青磁器中では優品である。

Ⅰ－2b 類（Fig. 6－2. 3）

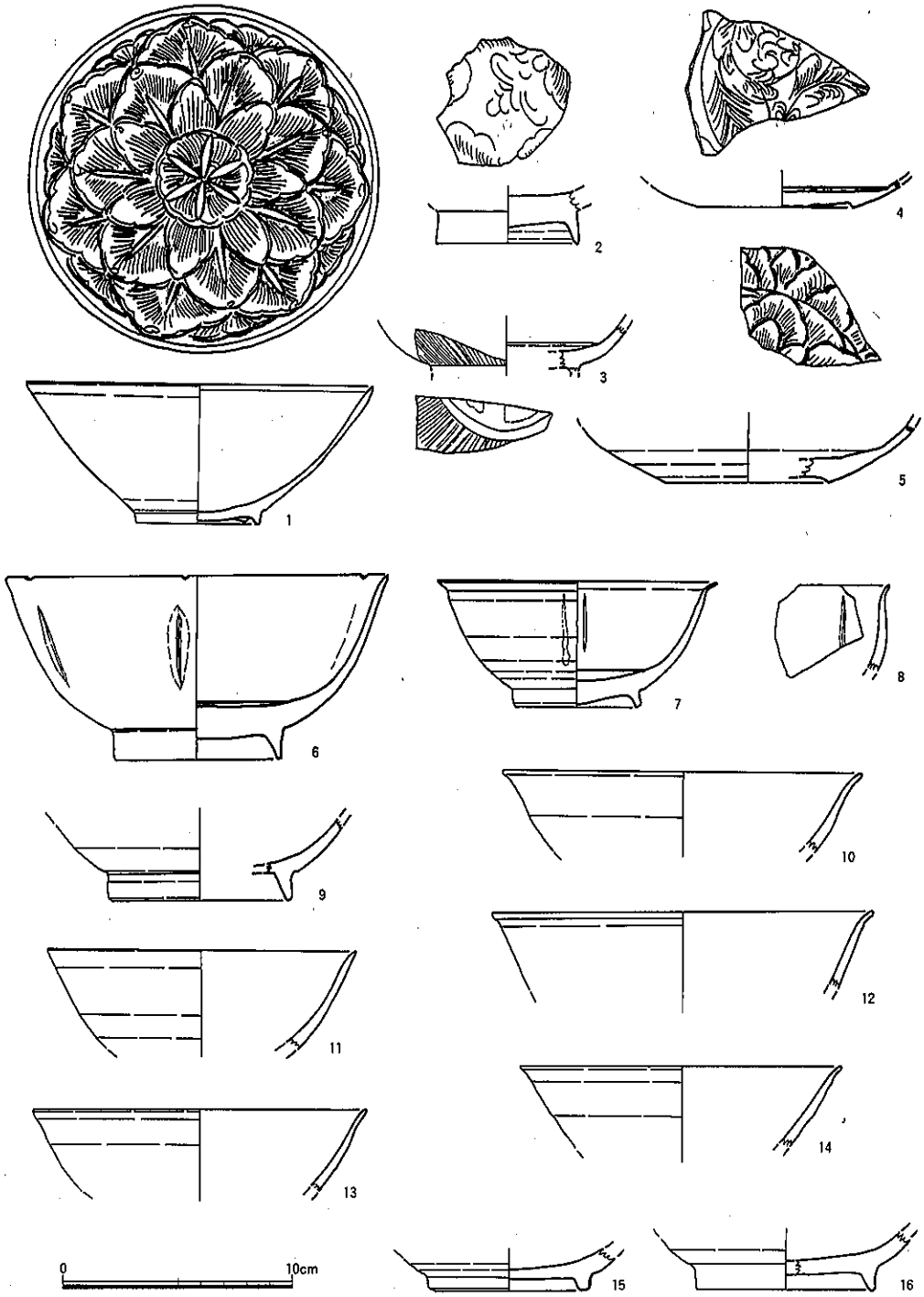


Fig. 6　SK−01 出土遺物実測図Ⅰ（青磁器）

高台は細く高い。高台内側に4個の目跡がある。内面ないしは外面に毛彫り文様をもつ。2は見込みに草花文、3は外面下半に花弁（？）を施文している。2はオリーブ色、3は深いオリーブ色の釉を全面に施している。

Ⅰ－2c 類（Fig. 6－6）

高台は細く高く，2b類と同様であるが、毛彫り文様がないことで区別した。高台内側に中心をややずれて3個（4個のうち2個がくっついたか）の目跡が残る。体部は底部からゆるやかにたちあがり、口縁部は直線的にのび、端部は丸くおさめる。口縁部は6ヶ所に輪花の刻みを入れ、その下方に外から押した画線を入れる。ややくすんだオリーブ色の釉を全面施釉する。口径16.5cm、器高8cm。

Ⅰ－2d 類（Fig. 6－7, 8）

高台はやや外方にひらく。高台内側に4個の目跡が残る。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は大きく外反し、端部は尖り気味に丸くおさめる。体部5ヶ所に外から押した画線を入れ体部を花形にしている。口縁部の輪花の刻みは現在しないが、画線に合せて施していたとみられる。見込に沈線一条をめぐらしている。全面にオリーブ色の釉を施した精良な小碗である。7は口径12cm、器高5.4cm。2個体がある。

Ⅰ－2e 類（Fig. 6－9）

高台は細く高いのは2b. 2c類と同様であるが、目跡が畳付につき、底部が薄い特徴がある。現在する目跡は2個であるが復原では8個になると考えられる。全面に淡いオリーブ色の釉が施される。底部径は8cm。

Ⅰ－2f 類（Fig. 6－16）

高台は4a類に比較し低くなる。畳付は平坦でなく丸味をもっている。目跡が畳付に残っているが、不明瞭で数は不明。全面にくすんだオリーブ色の釉を施す。体部は丸味をもってたちあがるが、口縁部を欠いているため全形は明らかにできない。

Ⅰ－2g 類（Fig. 6－15）

高台は2f類に比較し、さらに低くなる。全面に淡オリーブ色の釉を施すが、畳付部はヘラで削り取られる。畳付には目跡があり、復原では6個になる。底部径7cm。

Ⅰ－2h類（Fig. 7－8. Fig. 8－2）

大型の碗、高台は太目で断面方形をなす。畳付は外方にむかって斜に削られている。外底部の中央部分をヘラで丸く削る特徴がある。畳付と見込に目跡が残る。全面に淡いオリーブ色の釉を施し、畳付部分はヘラで削り取られている。体部はやや丸味をもってたちあがる。

Ⅰ－2i 類（Fig. 7－21）

高台は低く、外底部中央部分がヘラで削られている。全面にややくすんだオリーブ色の釉を

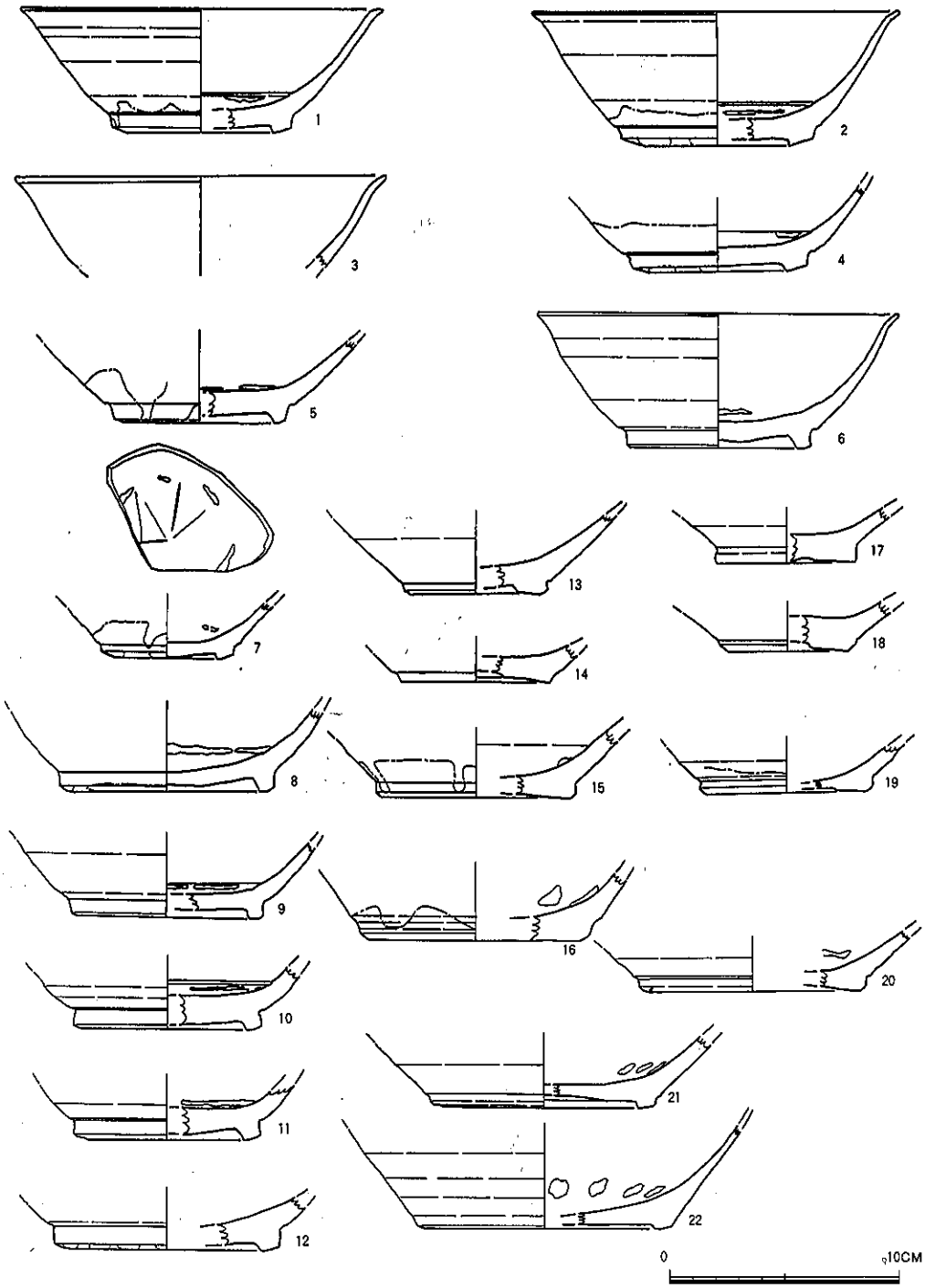


Fig. 7　SK−01 出土遺物実測図Ⅱ（青磁器）

施すが、畳付部分はヘラで削り取られている。見込と畳付に目跡が残る。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。

Ⅰ－2ｊ 類（Fig. 7－22）

高台は低く、高台から直接体部が外傾しながら直線的にたちあがる。全面にオリーブ色の釉を施し、畳付は後で削り取っている。見込と畳付に目跡が残る。復原では20個になる。大型品である。

Ⅰ－2ｋ 類（Fig. 7－9～12. Fig. 8－1）

高台は断面方形、底部形態は類似するが、目跡や調整、釉調に若干の差異があるが、一括した。9はくすんだオリーブ色の釉を全面施釉し、畳付は削り取る。見込と畳付に細長い紐状の目跡が残る。10は見込に沈線一条をめぐらす。高台内側は荒い不定方向のヘラ削りが加えられる。黄味の強いオリーブ色の釉を全面施釉する。見込と畳付に細長い紐状の目跡がある。見込には白土の目土も残っている。未使用か。11はくすんだオリーブ色の釉を全面施釉し、畳付部分は釉を削り取っている。見込と畳付には環状に連なった目跡がある。12は黄色の釉を全面施釉し、畳付の釉はヘラで削り取られる。見込、畳付部に斑状の目跡がある1はくすんだオリーブ色の釉を全面に施し、畳付の釉は後で取られている。見込、畳付に白土の目土が残っている。未使用か。

Ⅰ－2ℓ 類（Fig. 6－10～14）

口縁部破片を一括した。直口し、端部を丸くおさめるもの（11、13）口縁が外反するもの（10、12、14）の二種類がある。11は外面口縁直下に細い沈線一条をめぐらす。オリーブ色の釉を施す。10　12～14は黄味の強いオリーブ色の釉を施している。

Ⅱ－1ａ 類（Fig. 7－19）

高台は低い蛇の目高台状をなすので1類に分類した。淡オリーブ色の釉を体部外面下半から内面にかけて施し、底部は露胎のままである。胎土はやや褐色がかった灰白色、黒色の斑点が多量にいっている。底径7.5cm。

Ⅱ－2ａ 類（Fig. 7－1～6）

高台は低く、やや幅広である。畳付を外側上方に斜にヘラ削りする。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。内面と外面の体部下位まで、淡いオリーブ色の釉をかける。底部は露胎のままである。見込に沈線一条をめぐらす。見込と畳付に目跡9個が残る。胎土はわずかに砂粒を含むが精良、白灰色～淡褐色をなす。口径15.7～16.0cm、器高5.8cm、6個体以上がある。

Ⅱ－2ｂ 類（Fig. 7－1～6）

高台は断面台形、高台内側は粗いヘラ削り。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反

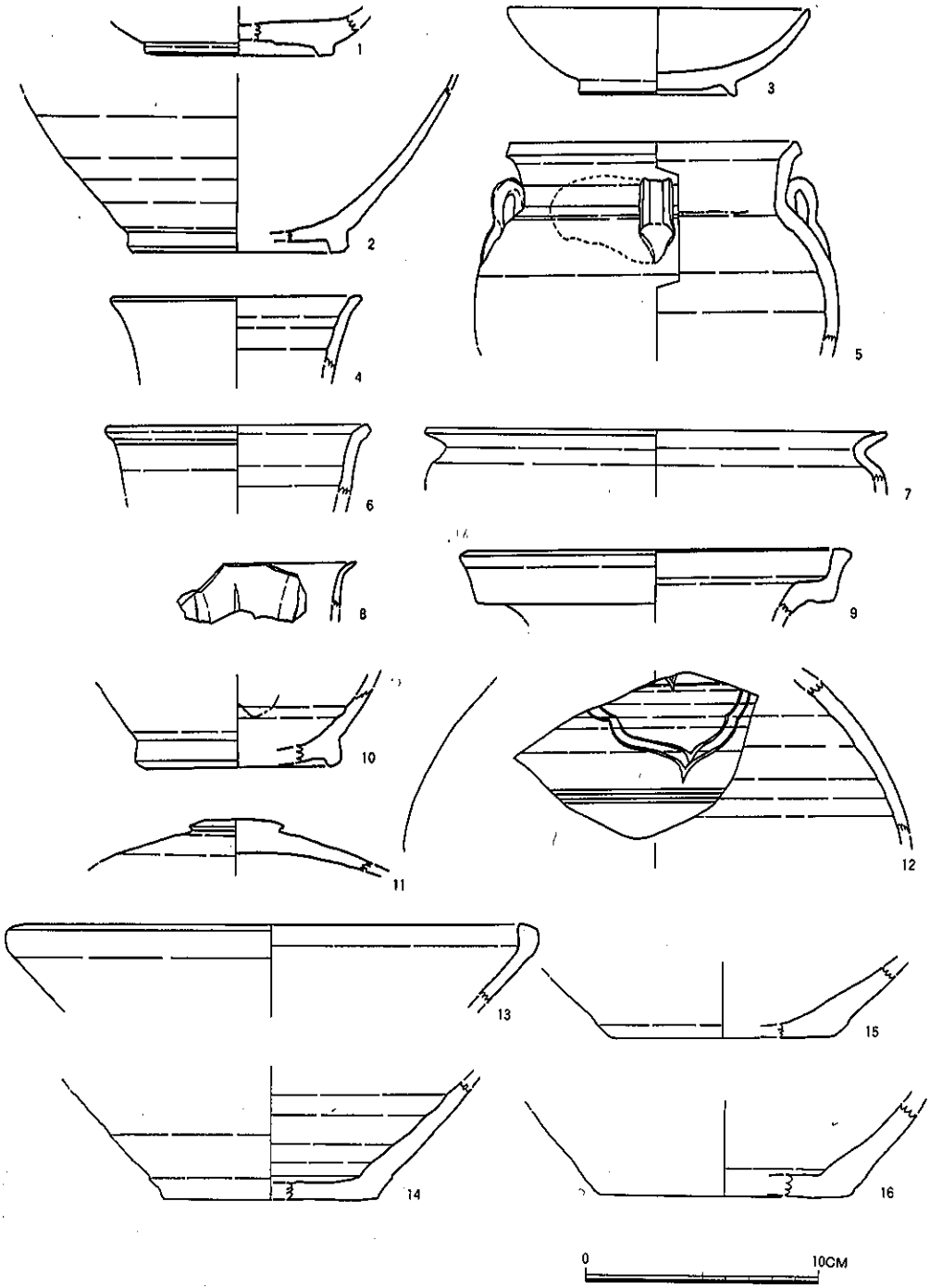


Fig. 8　SK−01 出土遺物実測図Ⅲ（青磁器・無細陶器）

する。全面施釉であるが、釉はすべてが剝離している。畳付は雑に釉を削り取っている。見込に沈線一条がめぐる。畳付と見込に目跡が残っている。焼成不良。胎土には少量の砂粒を含み、空隙がある。口径15.7cm、器高5.8cm、底部径8.0cm。

Ⅱ－2ｃ 類（Fig. 7－7）

小型の碗、高台は低く、畳付が斜に削られる。体部は外傾し直線的にのびる。見込にヘラ削りによって生じた細い沈線が花文状に残る。淡青灰色の釉を体部外面下半から内面にかけて施す。見込に白色の目跡、畳付に赤褐色に変化した目跡が残り、復原で５個になる。胎土は白灰色で精良である。底部径5.8cm。

Ⅱ－4ａ 類（Fig. 7－15）

ややあげ底をなす。外縁はヘラ削りによって面とりが施される。体部外面下半から内面にかけて黄味の強いオリーブ色の釉をかける。見込と畳付に目跡が残る。特に見込には白土の目土が残っている。未使用か。

Ⅱ－4ｂ 類（Fig. 7－16）

大型の碗，体部は底部から直接たちあがる。体部下位から内面にかけて灰白色～乳白色の釉がかけられ、底部は露胎のままである。見込と外底端部に目跡が残り、見込の目跡には白土の目土が残っていて未使用品と考えられる。胎土は灰色で砂粒を含む。

Ⅱ－4ｃ 類（Fig. 7－20）

あげ底をなし、底部端は外側に張り出し円盤状をなす。体部外面上半から内面にかけて黄味の強いオリーブ色の釉をかけ、体部外面下半から底部にかけては露胎のままである。見込に白土が残っている。未使用品か。胎土には黒色の砂粒を含む、底部径9.8cmを測る。

皿（Fig. 6－5，6，Fig. 8－3）

Ⅰ－2ａ 類（Fig. 8－3）

１個体がある。高台はバチ形をなすが、削り出しである。体部はゆるやかにたちあがり、端部は尖り気味に丸くおさめる。くすんだオリーブ色の釉を全面施釉する。高台内に４個の目跡が残る。口径12.8cm、器高3.7cm。

Ⅰ－4ａ 類（Fig. 6－5，6）

２個体がある。篠節底の皿、体部の大きく外傾し広がり、途中わずかに屈曲し立ちあがるが、いずれも口縁部を欠いている。５は内面に毛彫と片切彫による花文が描かれる。暗いオリーブ色の釉を全面施釉する。胎土は灰褐色で精良。６は見込にも毛彫によ草花文がある。全面にモスグリーンの釉を施す。胎土は精良。５、６共に底部に４個の目跡が残る。

水注（Fig. 8－4～6，10）

Ⅰ類（Fig. 8－10）

水注の底部である。高台は削り出しの輪高台。外面と内面下半にかけて、褐色かかった淡オリーブ色の釉を施す。胎土は焼成不良で淡褐色～赤褐をなすが精良。盤付に目跡が残る。底部径8.8cm。

Ⅱ類（Fig. 8－4～6）

3個体を図示した。4、6は口縁部、5は体部上半から口縁部にかけての破片である。いずれも頸部は直立し、口縁部は外反し肥厚する。4は胎土が褐色がかった灰白色、内外面に化粧掛を施し施釉するが、釉は剝離している。6は胎土に白色の砂粒を含み、内外面に黄褐色～青灰色の釉を施す。5は体部はあまり張らない。頸部から肩部にかけて縦耳がつく。胎土は灰色で、白色と黒色の砂粒を含み精良でない。外面から口縁部内面にかけて施釉され、下には白土の化粧掛がみられる。釉は剝離し色は明らかでないが、頸部から肩部にかけて斑状に褐彩が施されたようである。体部内面にはロクロ痕が残る。口径12.6cm。

短頸壺（Fig. 8－9）

肩部は張らず、口縁は頸部から大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。内外面にくすんだオリーブ色の釉を施す。胎土は精良でⅠ類の精製品である。復原口径19.6cm。

盤口壺（Fig. 8－9）

口縁部破片がある。二重口縁状をなし、口縁は直立し端部は肥厚する。やや褐色がかったオリーブ色の釉を内外面に施す。胎土は灰褐色、白色、黒色砂粒を多量に混入し粗雑である。復原口径16.8cm前後。Ⅱ類の粗製品に分類できる。

壺（Fig. 8－12）

胴部破片、全体器形は不明。外面に茶色がかったオリーブ色の釉を施す。外面上半部はヘラ描きによる花文がある。内面はロクロ痕が残る。胎土は淡黄褐色～灰色である。

蓋（Fig. 8－11）

天井部に低いつまみをもつ蓋であるが、口縁部を欠くために全形を知ることはできない。外面に施釉するが、剝落している。胎土は灰白色で、黒色砂粒を多量に混入し粗雑である。何の蓋になるか不明。Ⅱ類の粗製品である。

無釉陶器（Fig. 8－13～16）

無釉陶器は日常雑器として使用された鉢が主体である。4個体を図示した。13は口縁部破片、14～16は底部破片である。13は口縁部が屈曲して短く直立し、若干肥厚する。復原口径21.0cm。上記タイプとは別に、口縁部外面に粘土を貼り付け、幅広の帯状に肥厚させたタイプもあるが、小破片であるため図示していない。14～16は平底で体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁は両タイプのいずれかになると思われる。底部径は14が9.2cm、15が9.6cm、16が10.7cm。胎土は4個体共赤味をおびた淡褐色～灰白色、白色、黒色砂粒を多量に含む。Ⅱ類の胎土と同

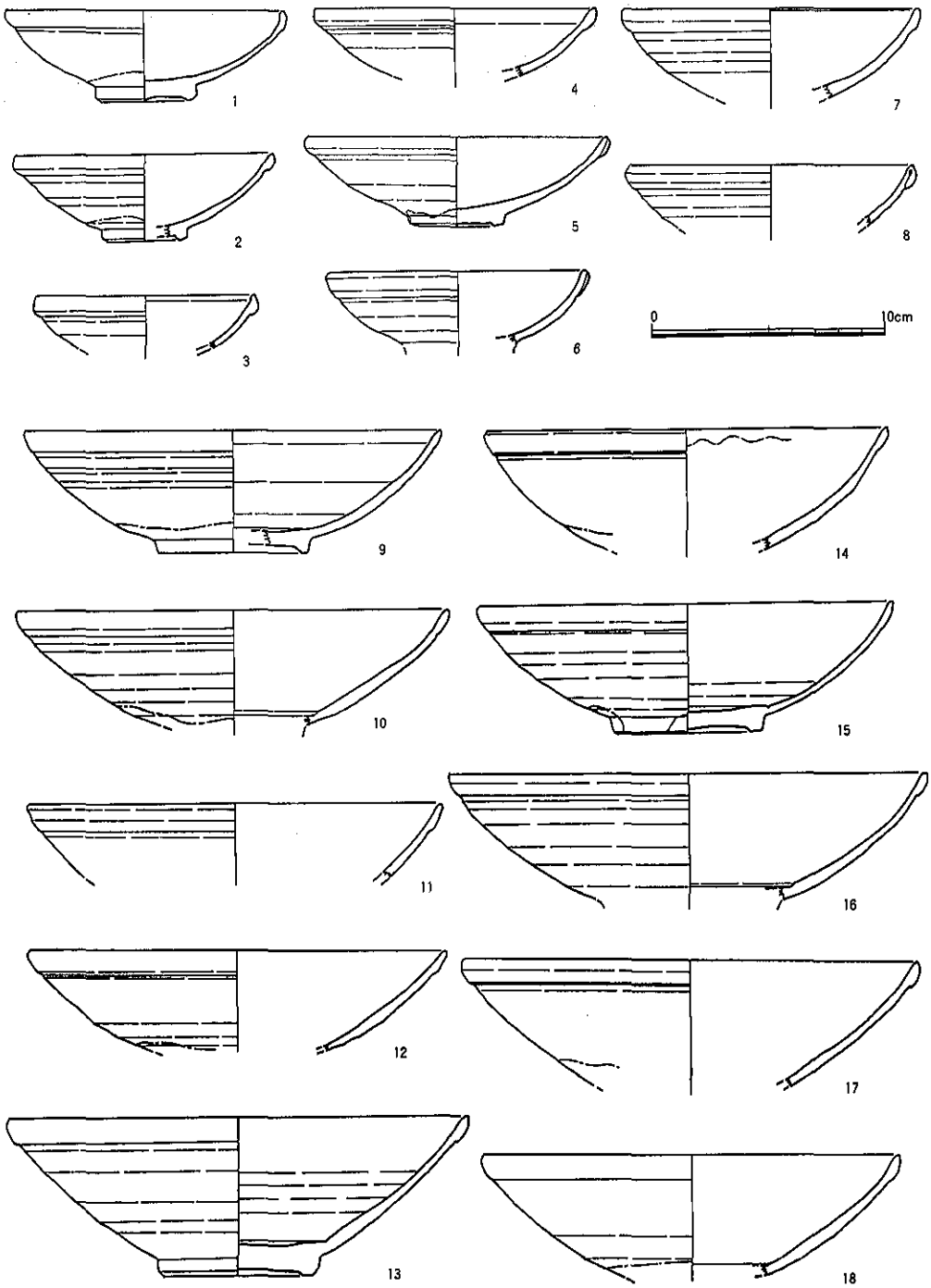


Fig. 9　SK−01 出土遺物実測図Ⅳ（白磁器）

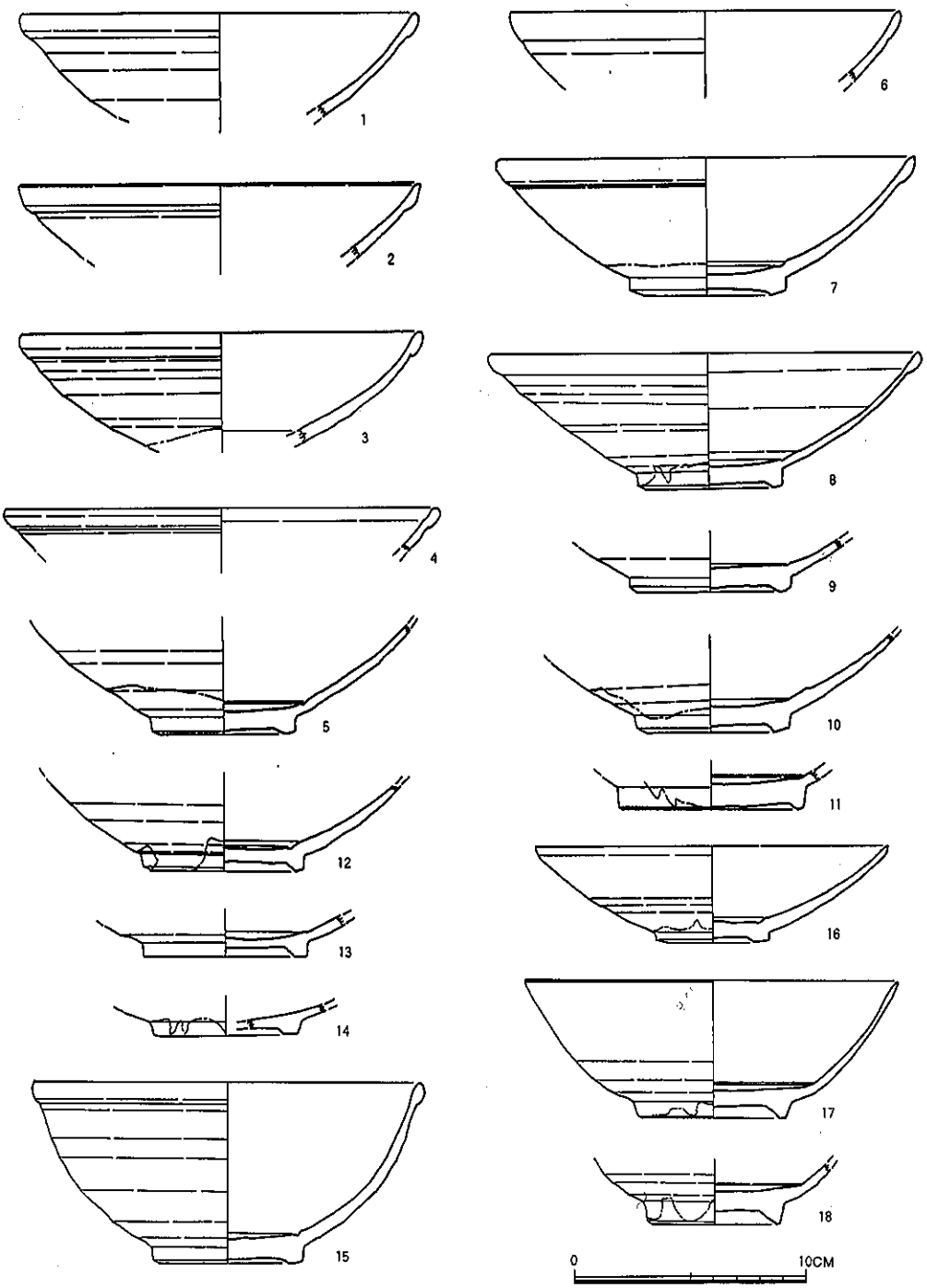


Fig. 10　SK−01 出土遺物実測図Ⅴ（白磁器）

じである。

白磁器（Fig. 9～12）

量的には青磁器より多い。器形には碗、皿、を主体としている。

碗（Fig. 9～12）

Ⅰ－1ａ 類（Fig. 12－18, 19）

高台畳付は施釉後、手持ちでヘラ削りされている。体部はゆるやかに丸味をもってたちあがる。口縁部を欠いているが、口縁は19のように小さな玉縁をもつと考えられる。両者共やや黄味がかった白釉を全面施釉する。

Ⅰ－2ａ 類（Fig. 9－1～8）

小型の碗、高台は内側の削りが低い。体部はゆるやかなカーブを描いて立ちあがり、口縁部で内傾気味にたちあがる。口縁部は玉縁となる。玉縁のつくり方には、粘土折り曲げ、粘土貼り付けなどがあり、若干の差異があるが一括した。釉は釉だまり部分がやや青味をおび、他は明灰白色で、体部下位から内面にかけて施され、底部は露胎のままである。体部は口縁下までヘラ削り調整される。胎土は黄白色～灰白色で精良である。1は口径12.1cm、器高4.0cm、2は口径10.8cm、器高3.8cm、3は口径9.3cm、4は口径12.3cm、5は口径12.8cm、器高3.8cm、6は口径10.9cm、7は口径12.6cm、8は口径12.0cm。

Ⅰ－2ｂ 類（Fig. 9－9～18. Fig. 10－1～11）

前記Ⅰ－2ａ 類を大きくした碗を一括した。高台の内側の削りは低い。畳付の外側は斜にヘラ削りされ面とりされている。体部はゆるやかにたちあがる。口縁部は肥厚し玉縁をなす。玉縁の大部分は折り曲げによるものであるが、形態的にはそれぞれに差異があるが一括する。体部下半部は丁寧なヘラ削り調整である。見込に沈線一条をめぐらす。体部下位から内面にかけて青味をおびた白色～灰色の釉をかけ、底部は露胎のままである。高台内側に環状に黒土の目跡が残っている。胎土は灰白色で精良である。9は口径17.9cm、器高5.2cm。10は口径18.3cm、11は口径17.7cm、12は口径18.0cm、13は口径19.6cm、器高6.8cm、14は口径17.1cm、15は口径17.7cm、器高5.6cm、16は口径20.4cm、17は口径19.2cm、18は口径17.9cm、Fig. 10－1は口径16.9cm、2は口径17.2cm、3は口径17.1cm、4は口径18.6cm、5は底径6.2cm、6は口径16.7cm、7は口径18.1cm、器高5.9cm、8は口径18.6cm、器高6.0cm。9は底径7.0cm、10は底径6.5cm、11は底径7.9cmである。

Ⅰ－2ｃ 類（Fig. 10－12～14）

高台は前者に比較し高くなり、底部が薄くなる。体部はゆるやかにたちあがる。口縁部は欠損するため形態不明。前者のような玉縁のつく可能性をもある。体部外面下半部はヘラ削り調整。上半部から内面にかけては丁寧な横ナデ調整。見込に沈線一条をめぐらす。体部下位から

内面にかけて青味をおびた白色～灰白色の釉をかけ、底部は露胎のままである。胎土は灰白色で精良である。2b 類と極めて類似している。12は底径7.0cm、13は底径6.9cm、14は底径6.2cmである。

Ⅰ－2ｄ 類（Fig. 10－15）

高台の内側の削りは低く、畳付は荒い削りによって調整される。体部は丸味をもってたちあがり口縁部は粘土を折り曲げ肥厚させ玉縁としている。体部外面下半部は丁寧なヘラ削り調整、上半部から内面にかけては横ナデ調整である。見込に沈線一条をめぐらす。体部下位から内面にかけて青味がかった白色釉をかけるが、高台内側にも釉滴がみられる。胎土は灰白色で精良。Ⅱ類に比較して深みのある碗である。口径16.5cm、器高7.7cmである。

Ⅰ－2ｅ 類（Fig. 10－16）

浅い碗である。高台は小さく、内側の削りは低い。体部は大きく開き気味にたちあがる。口縁部でわずかに内側に屈曲し、端部は尖り気味におさめる。体部外面下半はヘラ削り調整、見込に沈線をめぐらし、段をつくり出す。体部下位から内面にかけて青味がかった白色釉をかける。底部は露胎のままである。胎土は灰白色で精良、口径15.1cm、器高4.1cmである。

Ⅰ－2ｆ 類（Fig. 10－17, 18）

高台は内外から斜に削り出し高く、断面台形をなす。体部は下半で張り出し外傾しながら直線的にたちあがり、端部は尖り気味に丸くおさめる。体部外面下半はヘラ削り調整、上半から内面にかけては横ナデ調整である。見込は広く、沈線一条をめぐらす。高台外面から内面にかけて青灰色がかった白色釉をかける。高台内側にも釉滴がみられる。胎土は灰白色で精良、17は口径16.0cm、器高5.9cm、18は底径5.7cmである。

Ⅰ－2ｇ 類（Fig. 11－1, 4, 5）

底部形態が不明であるが、他の白磁器からみて削り出し高台になると考えられるので、この類に分けた。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は大きく屈曲させ、端部は丸くおさめている。口縁に輪花の刻みがあり、その下に画線の沈線があるが、数は不明。内外面は灰白色の釉をかける。胎土は赤褐色から白色で精良である。４は口径12.4cm、５は口径14.2cmである。器壁はいずれも薄い。

Ⅰ－2ｈ 類（Fig. 11－12, 13）

底部形態は不明であるが、削り出し高台を有すると考えられる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁は直線的にのび端部は丸くおさめる。体部下半は丁寧なヘラ削り調整、上半から内面にかけては横ナデ調整である。体部上半部は外から押した画線があり、体部を輪花状にしているが、画線の数は不明。端部の輪花の刻みはない。内外面共に青味がかった白釉をかける。胎土は白色で精良、器壁はきわめて薄い。12は口径17.2cm、13は口径17.0cmである。

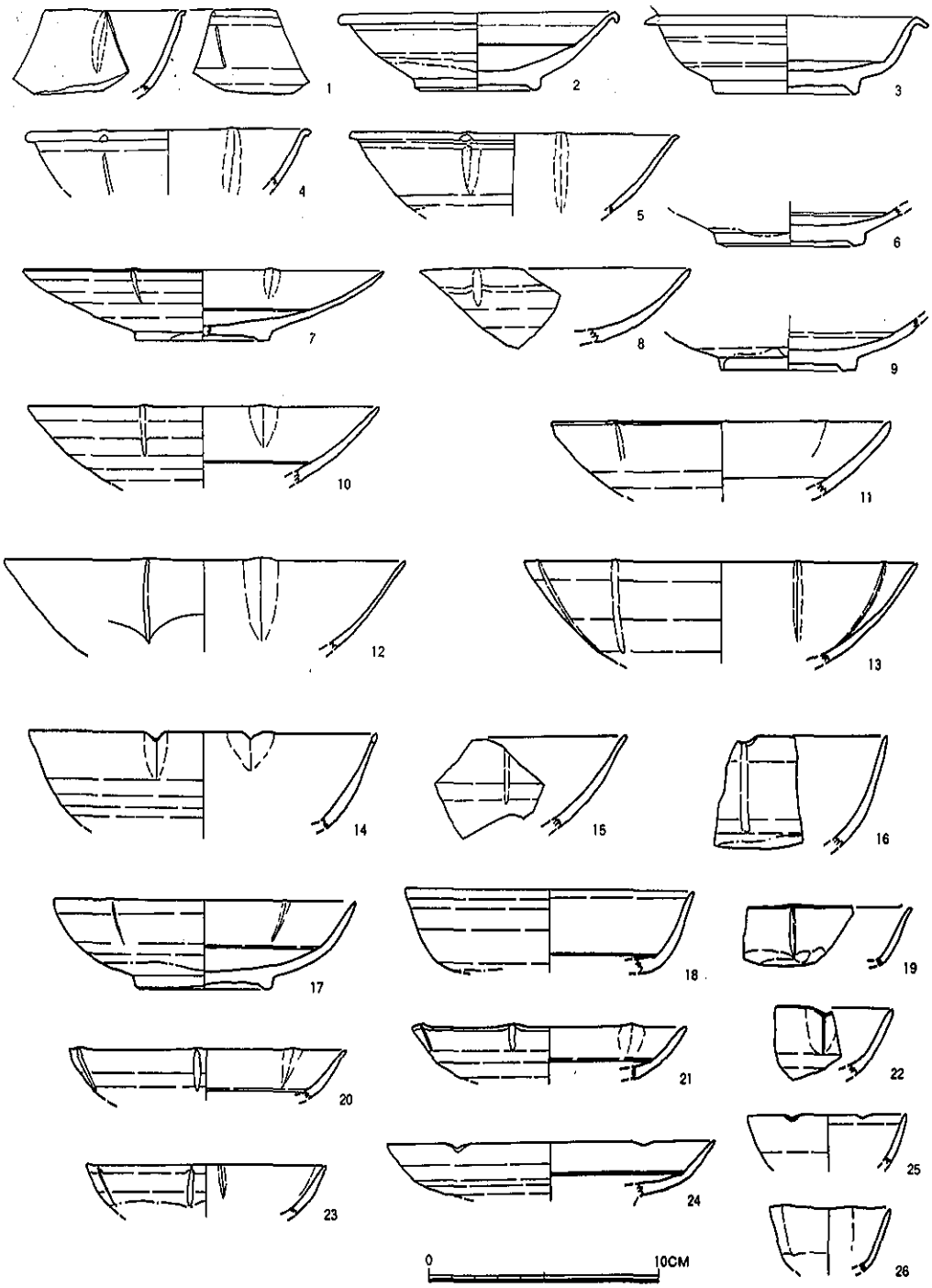


Fig. 11　SK−01 出土遺物実測図Ⅵ（白磁器）

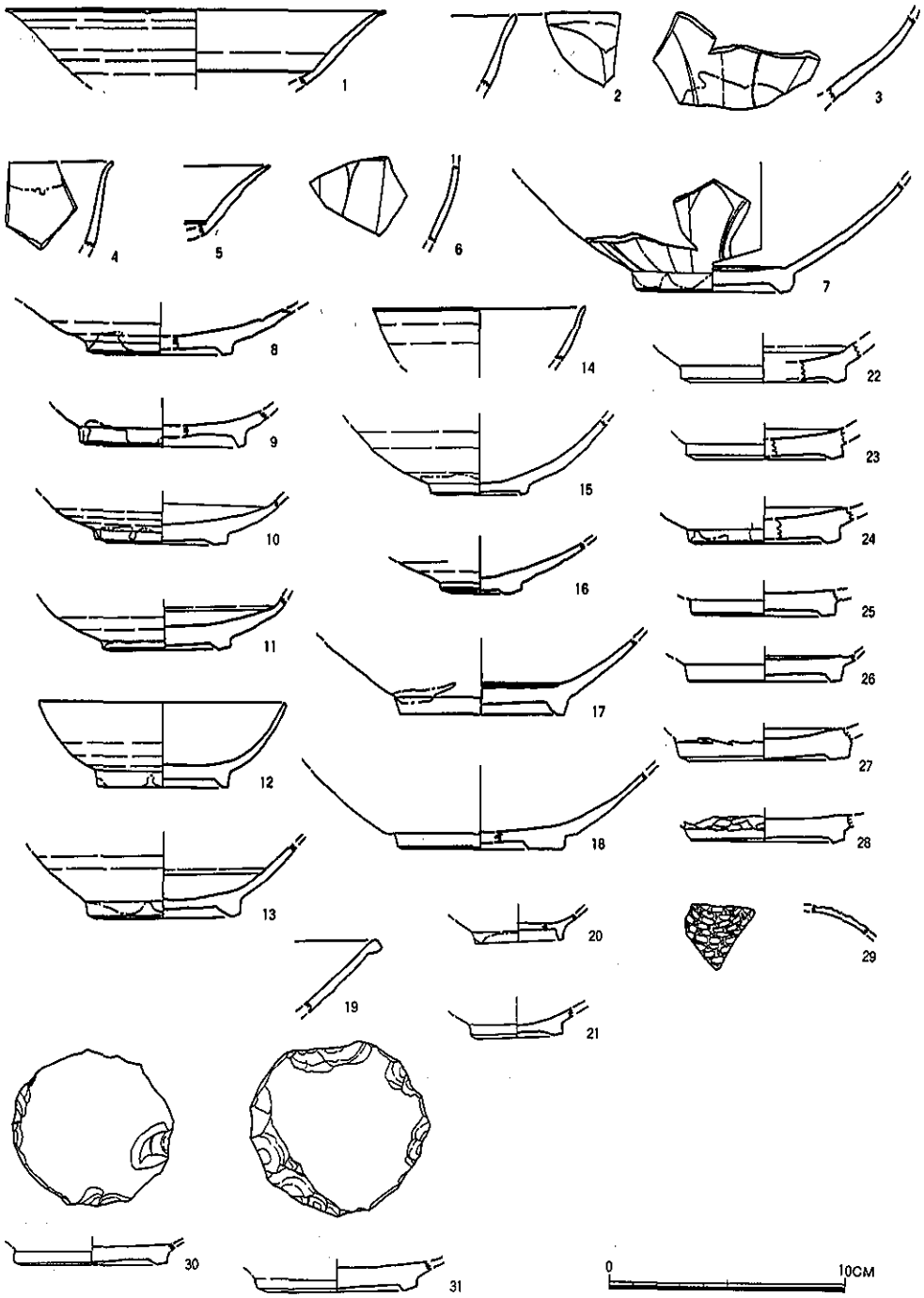


Fig. 12　SK−01 出土遺物実測図Ⅶ（白磁器）

Ⅰ－2ｉ 類（Fig. 11－14～16）

底部形態は不明であるが前者同様に削り出し高台になると考えられる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は直線的にのび端部は丸くおさめる。体部下半はヘラ削り調整、上半から内面にかけては横ナデ調整である。口縁端部には輪花の刻みがあり、その下位には外から押した画線がはいり、体部も輪花状に仕上げている。輪花の数は不明。体部下位より内面にかけて青味がかった灰白色をかける。底部は露胎のままと考えられる。胎土は白色で精良。14は口径15.0cmである。

Ⅰ－2ｊ 類（Fig. 12－2, 3, 6, 7）

高台内側は斜にヘラ削りされ、高台はやや幅広で断面形は台形をなす。体部は大きく外傾しながらたちあがる。見込に沈線一条をめぐらす。体部外面には蓮弁文を施している。体部下位から内面にかけて青味がった白釉～黄味の強い白釉をかけている。胎土は黄白色～白色で精良である。

皿（Fig. 11, 12）

Ⅰ－2ａ 類（Fig. 11－2）

高台は内側が斜に外側が直に削られ、断面台形をなす。体部は丸味をもって外に開き、口縁部は折返し口縁になり、端部は丸くおさめている。体部下半はヘラ削り調整、上半から内面にかけては横ナデ調整、口縁部内側は軽く押した指あとが並ぶ。見込に沈線一条をめぐらす。体部外面下半から内面にかけて青味がかった白釉がかけられるが、釉は上半が厚く、下半は薄くなる。底部は露胎、胎土は灰白色、焼成は良好である。口径12.0cm、器高3.3cmである。

Ⅰ－2ｂ 類（Fig. 11－3）

高台は前者と類似する。体部は下半が外に開き、途中で大きく屈曲し、外傾しながら直線的にたちあがり、口縁は折返し口縁となり、端部は丸くおさめている。外底部には輪形のハマ跡がみられる。底部近くの外面から内面にかけて、青味がかった白釉をかける。施釉にあたっては高台を鉗子ではさんで行なわれたとみられ、高台に４個の傷跡がみられる、胎土は灰白色で精良である。口径12.3cm、器高3.4cmである。

Ⅰ－2ｃ 類（Fig. 11－7）

高台内側の削りは低い。体部は大きく外傾し、やや丸味をもってたちあがる。口縁は尖り気味に丸くおさめる。見込に沈線一条をめぐらす。口縁から上半部にかけて外から押した画線があり、体部を輪花状にしている。体部外面下半部は丁寧なヘラ削り調整、上半部から内面にかけては横ナデ調整である。外面下位から内面にかけて灰白色釉をかける。胎土は灰色～白色。口径15.6cm、器高3.0cm。

Ⅰ－2ｄ 類（Fig. 11－6, 8～11）

前者に比較して、深さがあるものを一括した。高台は内側の削りが低い。体部は丸味をもってゆるやかにひらく。口縁端部は丸くおさめる。見込に沈線一条をめぐらす。体部上半には外から押した画線があり、体部を輪花状にしているが、画線の数は不明。体部下半はヘラ削り調整。上半から内面にかけては横ナデ調整。外面下位から内面にかけて青味おびた灰白色～黄味をおびた灰白色釉をかける。底部は露胎。胎土は灰白色で精良。10は口径15.0cm、11は口径14.6cmである。

Ⅰ－2e 類（Fig. 11－17, 19, 20, 21, 23）

高台内側は斜にヘラ削りされ低い。体部下半は大きく外に開き、中位で屈曲し、外傾しながら直線的にのび口縁にいたる。口縁端部は尖り気味におさめる。見込に段を有する。体部外面上半部には外から押した画線があり、体部を輪花状にしている。画線は5ヶ所にみられる。体部外面の削り調整は上半までおよび、他は横ナデ調整である。体部外面下半から内面にかけて黄味の強い白釉をかける。底部は露胎のよままである。胎土は白色で精良。17は口径13.0cm、器高3.8cm。20は口径11.8cm。21は口径11.8cm、23は口径10.3cmである。

Ⅰ－2f 類（Fig. 11－22, 24）

前者とほぼ同様の器形をなすと考えられる。外から押した画線がなく、かわりに口縁部に輪花の刻みをもつ。刻みの数は不明。口縁端部は尖り気味におさめている。体部外面は屈曲部以下がヘラ削り調整。上半から内面にかけては横ナデ調整である。内外面に青味がかった灰白色の釉をかける。胎土は灰白色で精良である。24は口径14.0cmである。

Ⅰ－2g 類（Fig. 12－1, 5）

口縁部破片であるために底部形態は明らかでないが、削り出し高台になると考えられるのでこの類に分けた。体部下半でわずかに屈曲し、上半部はやや外反しながに大きく外に開く。口縁端部は尖り気味におさめる。見込に段を有する。体部外面下半はヘラ削り調性、上半から内面にかけては横ナデ調整である。内外面にはうすく青味がかった白色釉をかける。胎土は黄白色、精良である。1は口径16.0cmである。

Ⅰ－4a 類（Fig. 11－18）

平底になると考えられる。体部は底部付近で丸味をもつが、すぐ直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。見込に沈線一条をめぐらす。底部はヘラ削りで、他は横ナデ調整である。底部は露胎で、他は青灰色がかった白色釉をかける。胎土は白色で精良。焼成は良好である。口径12.4cm、器高3.5cm前後。

小碗（Fig. 11. 12）

Ⅰ－2a 類（Fig. 12－12）

高台はやや高い。高台内側は斜に、外側は直に削られる。体部は丸味をもってたちあがり、

端部は丸くおさめる。体部外面は口縁下までヘラ削り調整を加える。口縁外面から内面にかけては横ナデ調整である。底部は露胎で、他は青味をおびた白釉がかけられる。青白磁である。口径10.4cm、器高3.6cmである。

Ⅰ－4ａ 類（Fig. 11－25）

底部形態は不明であるが、平底になると考えられる。体部は内湾気味にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。口縁に輪花の刻みがあるが数は不明。内外面に灰白色釉をかける。胎土は灰白色で精良である。口径は6.8cm前後か。

Ⅰ－4ｂ 類（Fig, 11－26）

前者同様に底部形態不明であるが、平底になると考えられる。体部下半は丸味をもってひらき、上半部は直線的にのび、口縁端部は丸くおさめる。体部は外から押して輪花状にしているが、何ヶ所になるか不明。内外面共に青味がかった白釉をかける。胎土は白黄色で精良、焼成も良好である。復原口径は5.2cm前後であるが正確を期しがたい。

その他（Fig. 12－4, 8～11, 13, 15～17, 20, 21）

口縁部　底部破片で所属不明なものを一括した。4、14は口縁破片　4は口縁部が外反する。14は小碗で体部は丸味をもってたちあがり、口縁部がわずかに外反する。内外面に青味がかった白釉をかける、胎土は精良で白色をなす。8～11、13、15～17、20～21はいずれも底部破片で、削り出し高台をもつ。8、9は高台が断面方形をなし、体部は大きく外へ開く。見込に沈線一条をめぐらす。10、11は高台内側の削りが低く、体部は外にひらくが途中で屈曲する。見込に沈線一条をめぐらす。13、17はやや幅広の高台で、高台内側が斜に削られ、畳付はせまい。体部は外傾しながにたちあがる。13は身込に沈線一条をめぐらし、17は段を有する。15は高台は低く、体部はふくらみながらたちあがる。16は高台が低く幅広である。小型品の底部である。20、21は小型品、20は高台はやや高い。貼り付け高台の可能性もある。内面に細い蓮弁状の文様がある。21は高台内側の削りが低い。以上はいずれも体部下位から内側にかけて青味がかった白釉～灰白色で精良である。

白磁器再利用円盤（Fig. 12－22～28, 30, 31）

白磁器の底部の周辺に打撃を加えて円盤状に成形した白磁器の再利用品である。いずれも高台内側の削りの低い高台を利用し、大きさもそろう。遊具類として利用されたものであろう。

型づくり袋物（Fig. 12－29）

小破片で器種は明らかにできない。外面に型押しによる編籠文様があり、内面はナデによる調整である。器壁は薄い。内側面に乳白色の釉をかける。胎土は淡灰白色、焼成は良好である。

緑釉陶器

中国産の緑釉陶器と考えられる小破片1点がある。器種は不明。胎土は淡赤白色、表面に濃

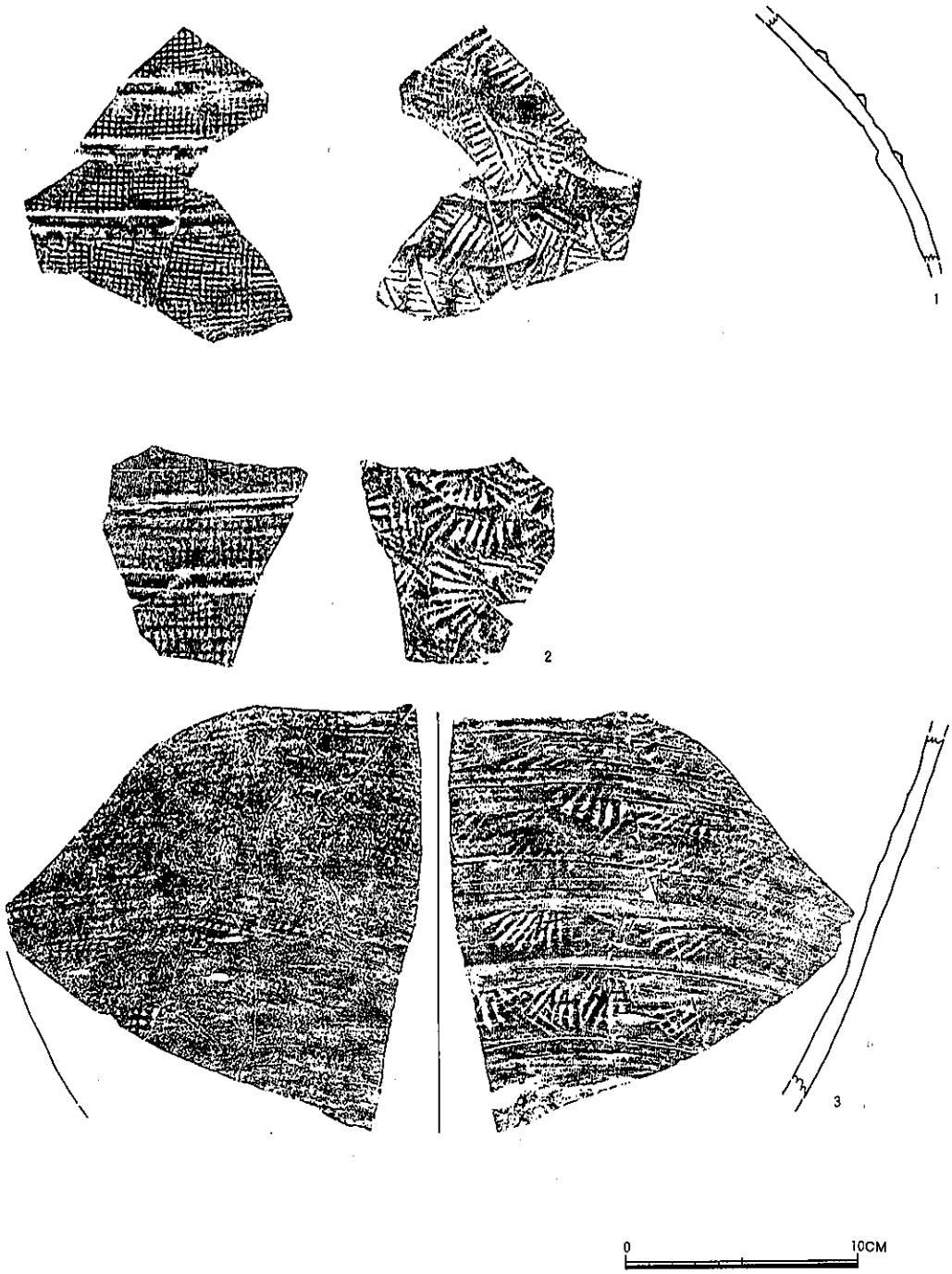


Fig. 13　SK−01 出土遺物実測図Ⅷ（高麗陶器）

い緑色釉をかける。内面は無釉で、横ナデ調整される。

高麗陶器（Fig. 13－1～3）

高麗陶器は総数43点があるが、固体数としては3固体前後である。図示したのは同一固体とみられ破片40点がある。大形の甕とみられる。図示したのは肩部と底部近くの破片である。肩部に断面三角形の突帯を三条あるいはそれ以上貼り付けている。外面には格子タタキ、内面は円弧状の受具に刻まれたやや特殊な受具痕が残るが、タタキ後、横ナデによつてタタキ目を消す努力をする。ナデ消しは特に体部下半において顕著である。胎土は若干の砂粒を含むが精良、焼成は良好。内外面とも黒灰色を呈する。

土師器（Fig. 14、15）

器種には皿、脚付皿、杯、高杯がある。

皿（Fig. 14－1～23）

器形、大きさから次のように分類できる。

Ⅰ類（1～7、9～12、20）

口径9.3cm～10.4cm、器高1.0cm～1.9cm、底部はヘラ切り離しで丸味をもつ。6には板目圧痕がつく。体部は大きく開き気味にたちあがり浅い。体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。口縁端部は丸くおさめ、器形は全体的に丸味をもっている。1は口径9.3cm、器高1.0cm、2は口径9.4cm、器高1.4cm、3は口径9.8cm、器高1.3cm、4は口径9.5cm、器高1.5cm、5は口径9.5cm、器高1.7cm、6は口径9.9cm、器高1.5cm、7は口径9.5cm、器高1.9cm、9は口径9.7cm、器高1.3cm、10は口径10.4cm、器高1.3cm、11は口径10.1cm、器高1.6cm、12は口径10.2cm、器高1.4cm、20は口径10.1cm、器高1.5cmである。

Ⅱ類（8、13～15）

口径9.9cm～10.2cmと小型である。底部はヘラ切り離しであるが、平底ないし若干のあげ底となる。14には板目圧痕が残る。他はヘラ切り後ナデ調整を加えている。体部は外傾しながら直線的にのび、口縁端部は丸くおさめている。体部外面から内面にかけては横ナデ調整。8は口径9.9cm、器高1.5cm、13は口径10.2cm、器高1.5cm、14は口径10.2cm、器高1.3cm、15は口径10.0cm、器高1.5cmである。

Ⅲ類（16～19）

Ⅰ・Ⅱ類に比較してやや大きくなる。口径10.7cm～11.3cm、器形はⅠ類と同様で、底部はヘラ切り離しで丸味をもつが、いずれも板目圧痕が残っている。体部は丸味をもって開き気味に短くたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。16は口径10.7cm、器高1.5cm、17は口径11.0cm、器高1.7cm、18は口径11.3cm、器高1.9cm、19は口径10.8cm、器高1.6cmである。

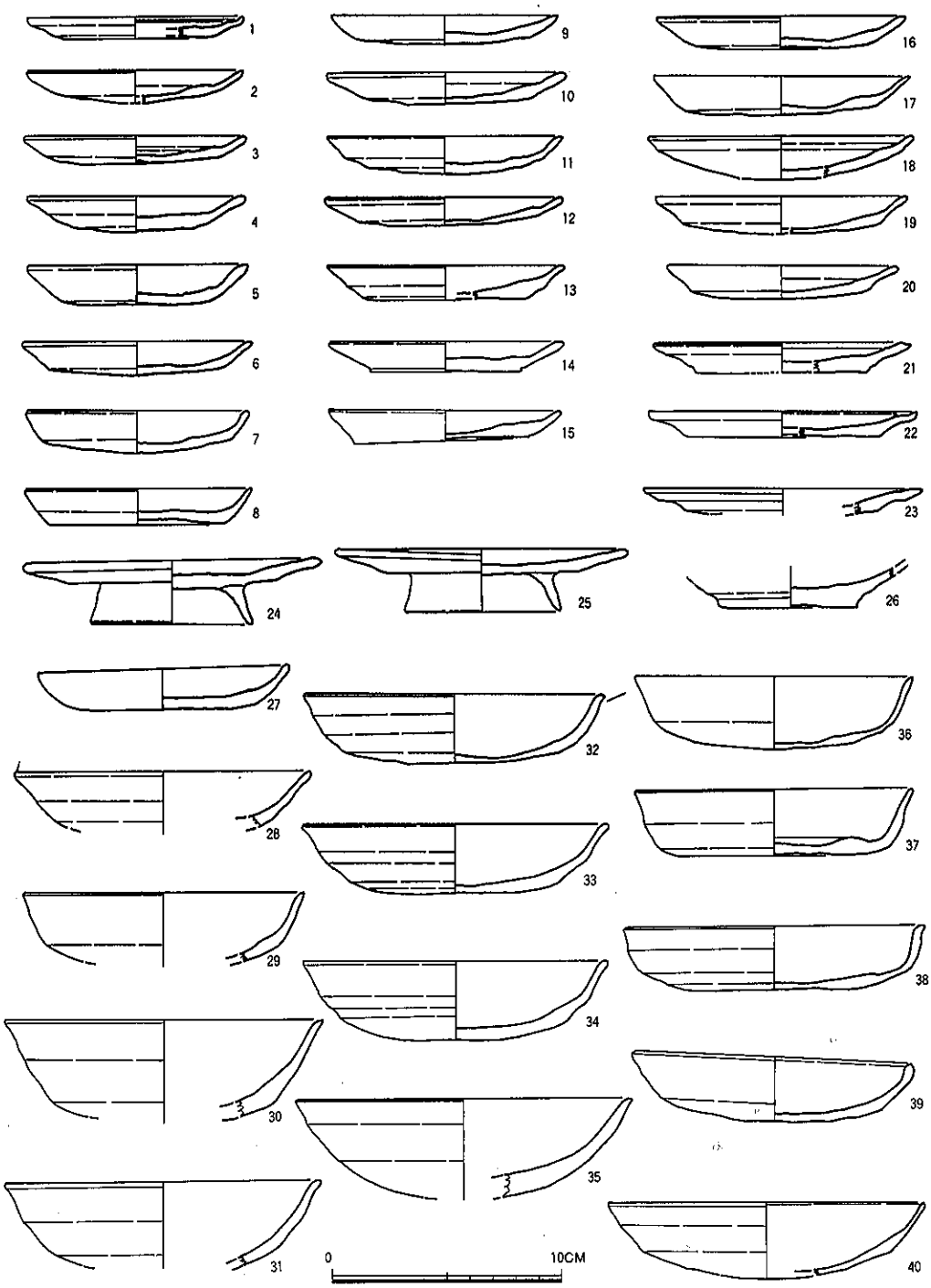


Fig. 14　SK−01 出土遺物実測図Ⅸ（土師器）

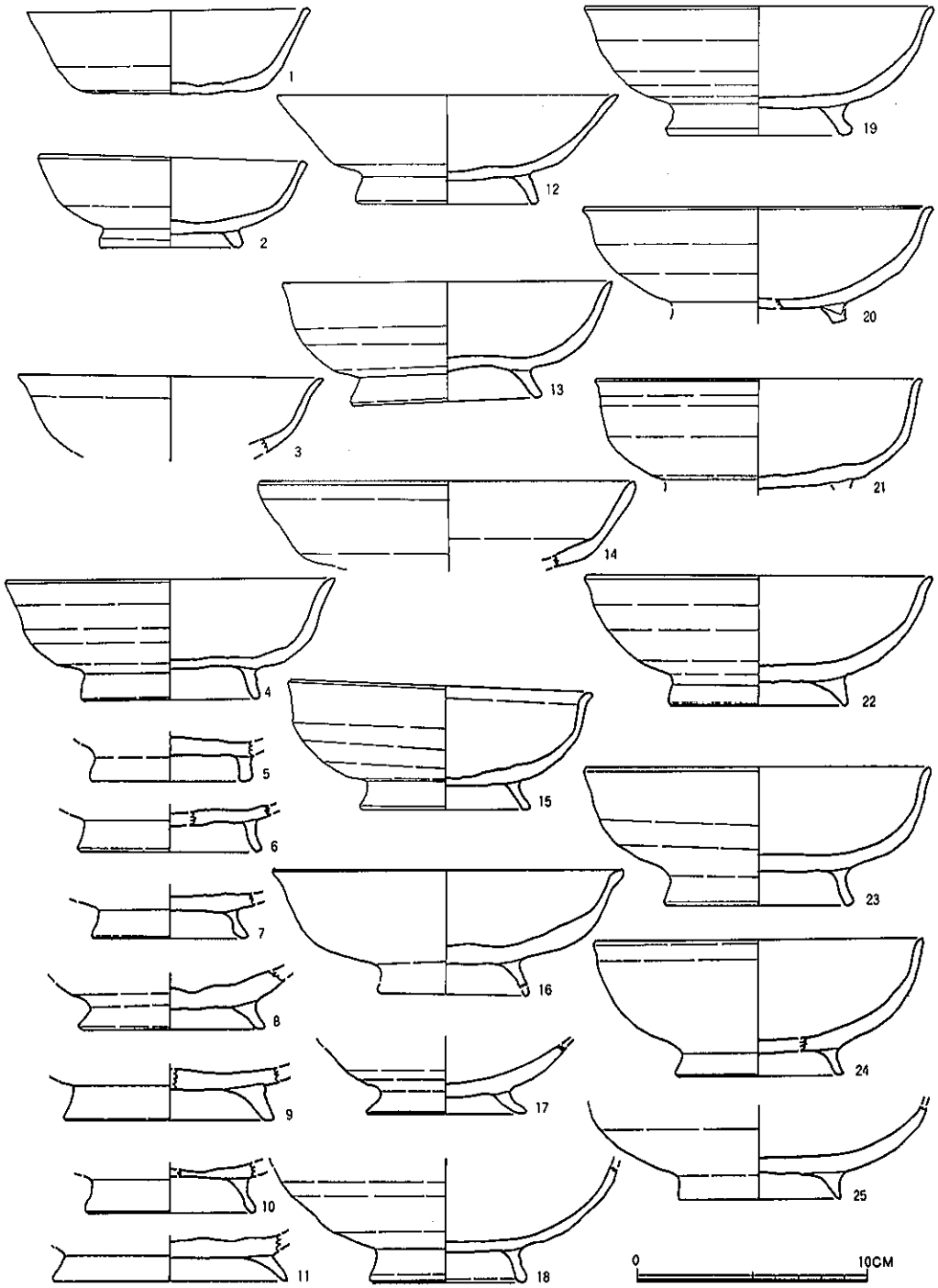


Fig. 15　SK−01 出土遺物実測図X（土師器）

Ⅳ類（21～23）

Ⅲ類同様、Ⅰ、Ⅱ類に比較してやや大きくなる。口径11.2cm～12.0cm、底部はヘラ切り離しであるが平底、体部との境は明瞭である。21には板目圧痕がつく。体部は外反気味に外に開き、口縁はわずかに上むきになり、端部は丸くおさめる。体部外面から内面にかけては横ナデ調整、21は口径11.2cm、器高1.3cm、22は口径11.5cm、器高1.1cm、23は口径12.0cmである。

高台付皿（Fig. 14－24、25）

ほぼ同形、同大の資料２点がある。やや外に開いた高い貼り付け高台をもち、体部は途中でわずかに屈曲し、外反気味に外に開き、たちあがりは低い。口縁端部は丸くおさめる。高台外面から皿部内面にかけては回転ナデ調整で、ロクロ回転は左回転である。焼成は良好で、褐色がかった灰白色となす。24は口径13.0cm、器高2.9cm、25は口径12.2cm、器高2.8cmである。

杯（Fig. 14－26～40、Fig. 15－1）

形態から四類に分類できる。

Ⅰ類（26）

底部は糸切りの平底で厚い。体部は開き気味にたちあがるが、口縁部を欠き全形を知ることができない。底部径5.9cm、体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。

Ⅱ類（27～30、35～37）

底部はヘラ切り離しで、やや丸味をもつものから平底まで、形態的に変化がみられる。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は直線的にのび、端部は丸くおさめる。体部外面から内面にかけては横ナデ調整。27は小型で小皿に分類した方が良いかもしれない。口径10.9cm、器高1.9cm、28は口径12.7cm、29は口径12.1cm、30は口径13.8cm、35は口径14.6cm、36は口径12.0cm、器高3.2cm、37は口径11.9cm、器高2.9cm、Fig. 15－１は口径11.9cm、器高3.7cmである。

Ⅲ類（31～34）

底部はすべてがヘラ切り離しで、丸味をもった平底をなす。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部はやや外反気味にのび、口縁端部は丸くおさめる。体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。34の底部にはヘラ切り離し後、板目圧痕がついている。31は口径13.7cm、32は口径13.0cm、器高3.0cm、33は口径13.3cm、器高3.0cm、34は口径13.1cm、器高3.4cmである。

Ⅳ類（37～39）

底部はヘラ切り離し後、ナデ調整が加えられる。丸底気味の平底である。体部は丸味をもって外傾しながらたちあがり、口縁部は内湾気味にのび、口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。38は口径13.0cm、器高2.8cm、39は口径12.3cm、器高2.8cm、40は口径13.6cm、復原器高3.3cmである。

椀（Fig. 15）

形態の差異、大きさから六類に分類できる。

Ⅰ類（2）

小型の椀である。高台は貼り付けで、バチ形をなす。高台端部は丸くおさめる。体部は大きく外に開き、体部中位でわずかに屈曲し、口縁部は直線的に外傾しながらたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。内底部は不定方向のナデ調整。体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。口径11.2cm、器高3.9cmである。

Ⅱ類（12）

高台は高く、直線的にバチ形に開き、端部は丸くおさめる。体部は高台近くで屈曲し、外傾しながら直線的にのび、口縁端部は尖り気味におさめる。高台内側は不定方向のナデ、体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。12は口径14.6cm、器高4.7cmである。

Ⅲ類（13、14）

高台は外反気味にバチ形をなし高い。貼り付けで端部は丸くおさめる。体部は内湾気味に丸味をもってたちあがり、口縁部は直線的にたちあがり、端部は尖り気味におさめる。高台内側は不定方向のナデ、高台から体部外面、内面にかけては横ナデ調整である。14は体部外面をヘラ削り後、ナデ調整を加えている。13は口径14.1cm、器高4.7cm、14は口径16.1cmである。

Ⅳ類（3、19、20、22、24）

高台は貼り付けで、やや高い。バチ形をなすが、19は端部が肥厚し、丸くおさめ、22は端部が尖り気味で断面三角形をなし、23は細く端部を丸くおさめる等、高台に変化があるが一括した。体部は丸味をもって内湾気味にたちあがり、口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。高台内側は不定方向のナデ調整、高台内外面、体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。3は口径13.0cm、19は口径14.8cm、器高6.5cm、24は口径14.0cm、器高5.9cmである。

Ⅴ類（15、16）

貼り付けの高台は細く高い。バチ形をなすが、15は外反、16は内反気味で、端部は丸くおさめる。体部は大きく外に開くが、体部中位で屈曲し、口縁にむかってたちあがるが、口縁は肥厚しながら強く外反し、端部は丸くおさめている。15は体部内面がヘラ磨き、16は外面下半がヘラナデ、上半から内面にかけては丁寧な横ナデ調整である。15は口径13.4cm、器高5.7cm、16は口径15.3cm、復原器高5.5cmである。

Ⅵ類（4、21、23）

貼り付けの高台は細く高い。外方にむかってバチ形に開き、端部は丸くおさめる。体部は外傾しながら開き、体部中位で屈曲し、口縁部は直線的にのび、口縁端部はわずかに外反し、丸くおさめる。高台内側は不定方向のナデ調整、体部外面から内面にかけては横ナデ調整を加え

る。４は口径14.2cm、器高5.2cm、21は口径14.0cm、23は口径14.8cm、器高6.0cmである。

Ⅶ類（５～11、17、18、25）

底部破片を一括した。いずれも貼り付けの高台をもつ。５は直立した高台、６、７、10、17は細く、やや高い高台で、端部は外反し、丸くおさめる。８、９、11、25は直線的にのびバチ形をなす。内側に貼り付けのナデが強い。８、９は端部を丸くおさめ。11、25は端部を尖り気味におさめている。18は細く高い高台、バチ形をなし、端部は丸くおさめる。17、18、25の体部は丸味をもってたちあがるが、口縁部を欠く、５は底径6.8cm、６は7.7cm、７は6.7cm、８は8.0cm、９は9.0cm、10は7.3cm、11は10.0cm、17は6.8cm、18は6.4cm、25は6.9cmである。

黒色土器（Fig. 16、17）

いずれも椀である。内黒の黒色土器Ａと両面黒の黒色土器Ｂに大別できる。

黒色土器Ａ（Fig. 16）

形態から五類に分類できる。

Ⅰ類（１）

貼り付けの高台は高く、直立し、端部は丸くおさめる。体部は外に開き、体部中位で強く屈曲し、口縁部は直線的にたちあがり、端部は尖り気味に丸くおさめる。全体に器面が荒れている。内面はヘラ磨き調整である。口径15.0cm、器高5.5cmである。

Ⅱ類（４～６）

高台を欠いているために全形を知ることはできないが、高台は貼り付けでバチ形になると考えられる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部はわずかに外反し、尖り気味におさめる。体部内外面はヘラ磨き調整。４は口径14.2cm、５は口径15.0cm、６は口径13.3cmである。

Ⅲ類（２、３）

貼り付けの高台はバチ形をなし、端部は大きく外反し、丸くおさめる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は直線的にのび、端部はやや肥厚気味に丸くおさめる。体部内外面はヘラ磨き調整を加える。２は口径14.1cm、３は口径13.8cm、器高5.7cmである。

Ⅳ類（７～９）

貼り付けの高台は細く高い。断面形はバチ形をなし、端部は丸くおさめる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部はわずかに外反し、やや肥厚気味に丸くおさめる。体部内外面はヘラ磨きを加える。７は口径14.3cm、器高6.3cm、８は口径14.5cm、９は口径14.2cm、器高5.5cmである。

Ⅴ類（10～13）

大小があるが一括した。貼り付けの高台は直線的にのび、バチ形をなす。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は肥厚しながら外反し、端部は丸くおさめる。体部内外面は丁寧なヘラ

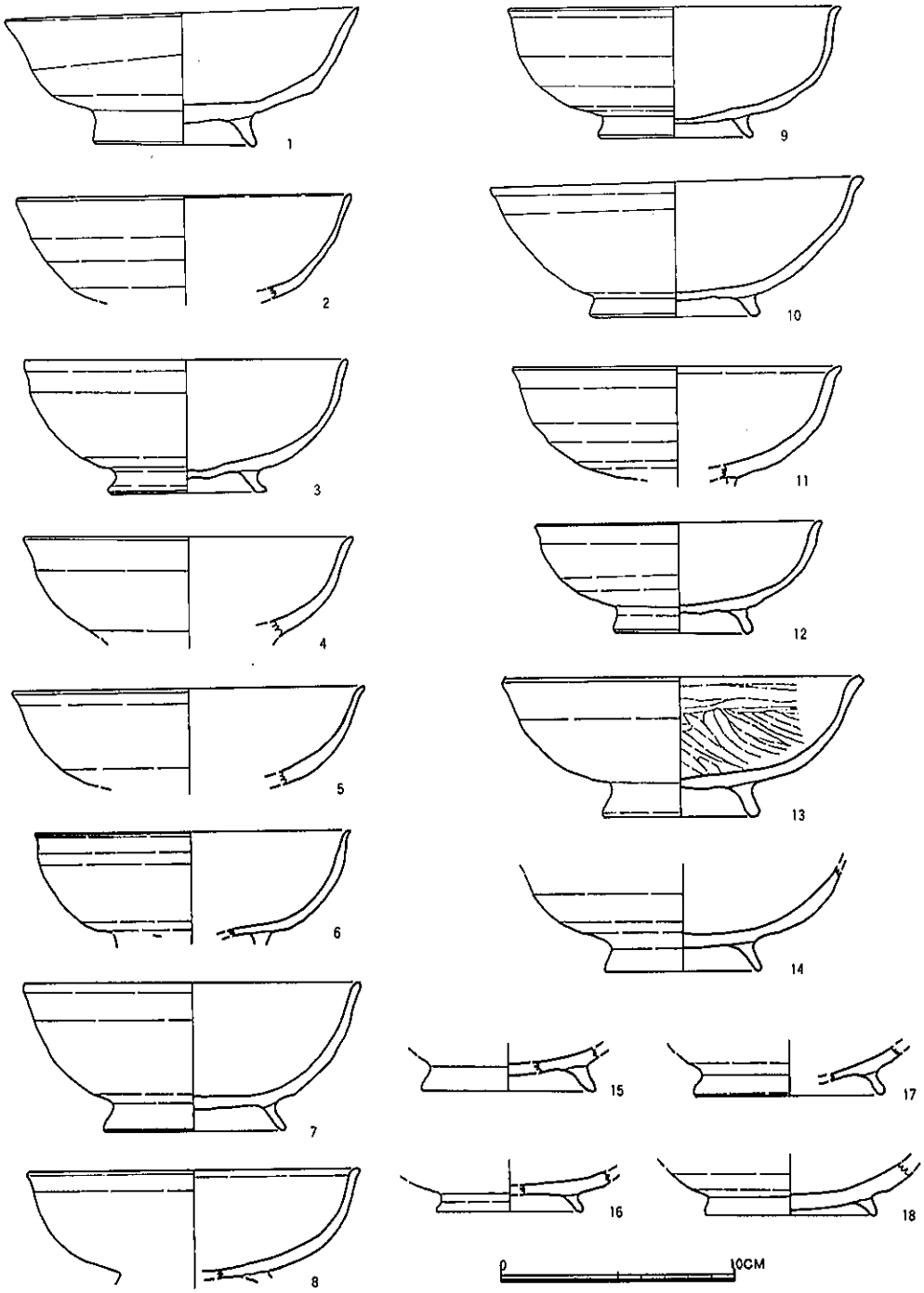


Fig. 16　SK−01 出土遺物実測図XI（黒色土器）

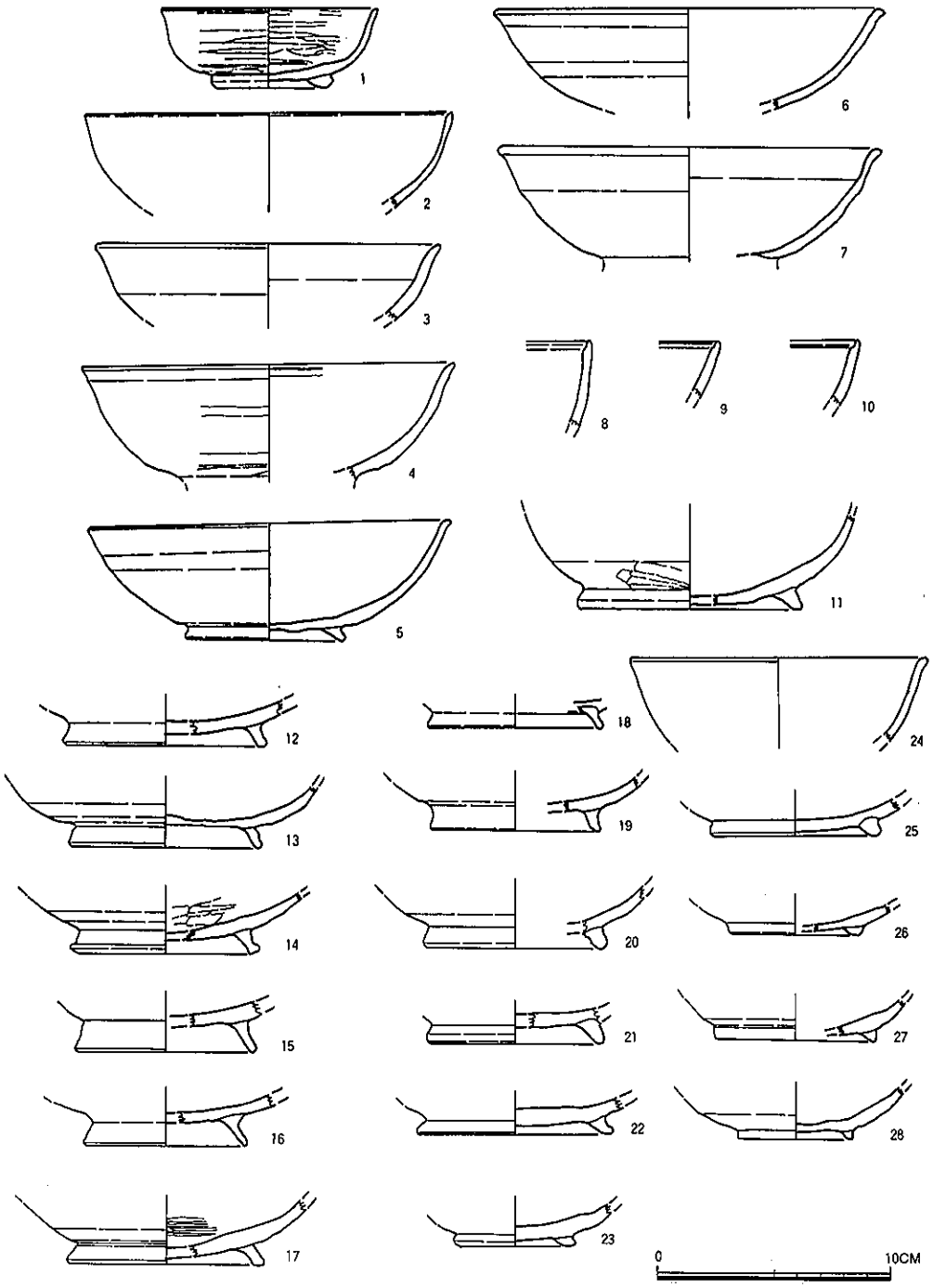


Fig. 17　SK−01 出土遺物実測図Ⅻ（黒色土器）

磨き調整である。10は口径15.9cm、器高5.6cm、11は口径14.2cm、12は口径12.2cm、器高4.7cm、13は口径15.2cm、器高5.9cmである。

Ⅵ類（14～18）

底部破片を一括した。貼り付け高台はいずれも直線的に外方に開き、バチ形をなし、端部は丸くおさめる。14～16は高く、18は低い。体部内外面はヘラ磨き調整。底部径は14が6.8cm、15が7.4cm、16が6.4cm、17が8.0cm、18が7.2cmである。

黒色土器B（Fig. 17）

形態、大きさからⅤ類に分類した。

Ⅰ類（1）

小型の椀である。貼り付けの高台は、幅広で低く、断面は楕円形をなす。体部は外に開き、体部下位で屈曲し、口縁部は直線的にのび、端部は丸くおさめる。体部内外面は横方向のヘラ研磨調整。口径9.2cm、器高3.4cmをはかる。

Ⅱ類（2）

底部を欠き、底部形態は不明、体部は丸味をもってたちあがり、口縁は直線的にのび、端部は丸くおさめる。口径15.6cm。

Ⅲ類（3、4、24）

底部を欠き、底部形態は不明、体部は内湾気味にたちあがり、口縁部はわずかに外反し、端部は尖り気味におさめる。体部内外面は横方向のヘラ研磨調整。3は口径14.7cm、4は口径15.8cm、24は口径12.7cmである。

Ⅳ類（5～7）

貼りつけの高台は低いバチ形をなす。体部は、ゆるやかな丸味をもってたちあがり、口縁部は肥厚し、わずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部内外面はヘラ研磨調整である。5は口径15.5cm、器高5.0cm、6は口径16.6cm、7は口径16.5cmである。

Ⅴ類（8～10）

口縁部小破片である。全形を知ることはできないが、体部はゆるやかに内湾しながらたちあがり、口縁内側に細い沈線一条をめぐらる。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。体部内外面は横方の丁寧なヘラ研磨調整を加える。

Ⅵ類（11～23、25～28）

底部破片を一括した。いずれも貼り付けの高台である。12、13は外方に直線的に開くバチ形をなす。14は脚端部が大きく外反する。16は細くやや高い、脚端部は丸くおさめる。17、18は内湾気味に貼り付けられ、19はやや外反する。共に脚端は丸くおさめる。20～22は幅広の低い高台、22は外反する。23、25～28はさらに低くなる高台で断面三角形をなす。脚端部は丸くな

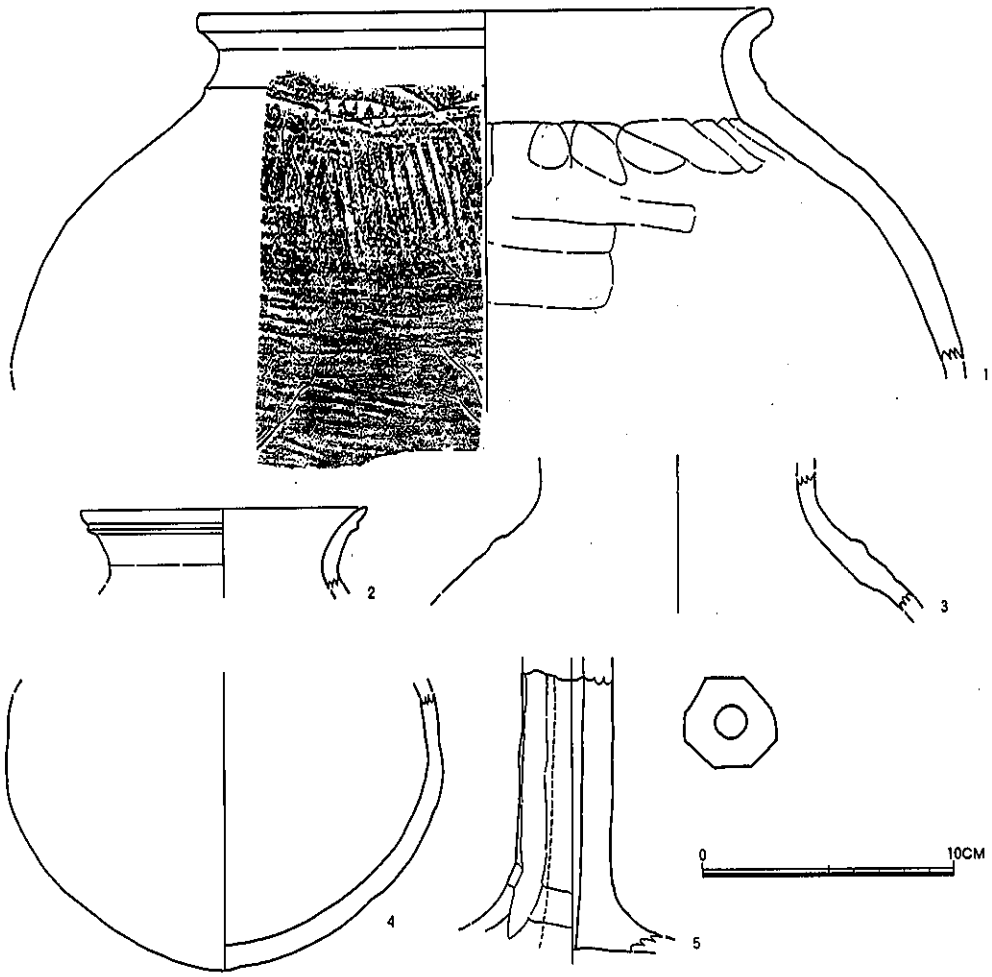


Fig. 18　SK−01 出土遺物実測図XIII

る。いずれも内底部はヘラ研磨調整である。底径は11が8.4cm、12が8.8cm、13が8.0cm、14が8.2cm、15が5.2cm、16が6.8cm、17が8.3cm、18が7.5cm、19が7.2cm、20が7.7cm、21が7.6cm、22が8.5cm、23が5.3cm、25が7.3cm、26が5.7cm、27が6.8cm、28が5.0cmである。大小のばらつきがみられる。

須恵器（Fig. 18）

破片は相当数あるが、いずれも胴部破片で器形がわかるものは少ない。

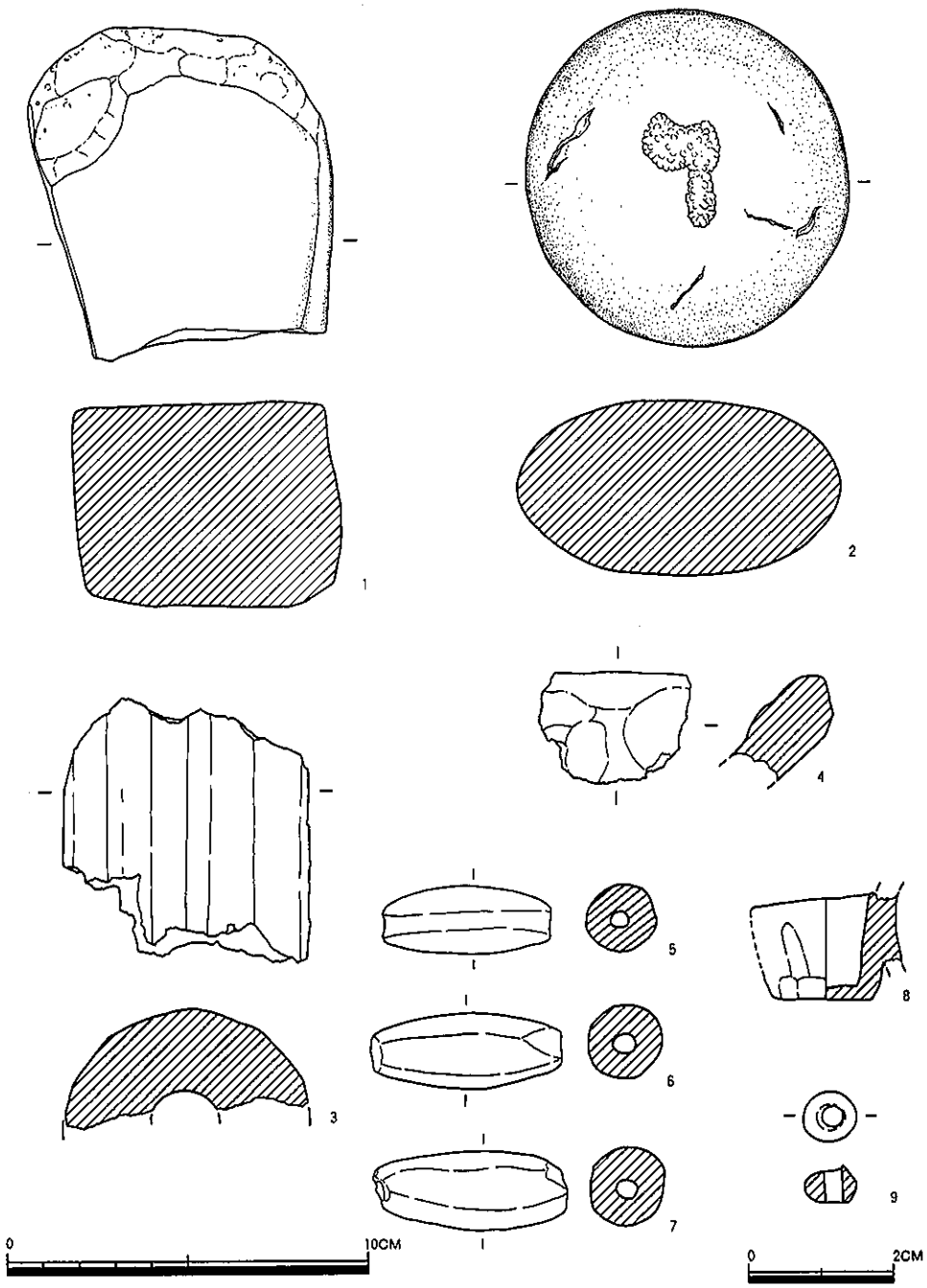


Fig. 19　SK−01 出土遺物実測図XV

１は甕である。周部が張り球形をなすとみられる。口頸部は短く、口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。体部外面は上部が縦方向、下位が横方向の平行タタキがある。口頸部は横ナデ調整。体部と頸部の境の内側は指で押した粘土接合部があり、指頭圧痕が残る。体部内面は横方向のヘラ削り調整。胎土中には籾殻が混入されたとみられ、各所に籾圧痕がみられる。口径23.0cmをはかる中型品である。２は小型壺の口頸部、頸部からゆるやかに外反し、口縁端部は丸くおさめている。口縁下の外面に突線一条をめぐらしている。内外面共横ナデ調整である。胎土は精良で、焼成良好、黒灰色をなす。口径11.3cmである。３は壺の頸部破片、体部からゆるやかに頸部に移行し、頸部はまっすぐにたちあがる。内外面とも横ナデ調整で、体部内側にタタキがみられる。外面には自然釉がかかる。胎土、焼成は良好で灰黒色となす。４は小型壺の体部。球形をなし、底部は丸底である。上半部は内外面とも横ナデ調整。胎土、焼成は良、灰黒色をなす。上半部は灰をかぶっている。胴部最大径は16.6cmである。５は土師器高杯脚部、２個体がある。外面はヘラ削りによって八角形に面とりがおこなわれている。脚筒部には1.2cmの孔があけられている。胎土には石英粒を含む。焼成は良好、黄白色をなす。

その他の遺物（Fig. 19）

その他の遺物として、フイゴ羽口、ルツボ、砥石、磨石、土鈕、滑石製品、ガラス小玉、貨幣等がある。

フイゴ羽口（３）

破片、復原径7.0cm、復原孔径1.9cmである。外面はヘラ削りにより面とりがおこなわれている。上部は二次的加熱によって黒灰色に変色している。胎土には径５mmの花崗岩小石を混入している。

ルツボ（４）

小破片１点がある。土師質の椀形品と考えられるが、復原不可能である。手づくねで成形され、外面は凹凸が著しい。口縁内側は溶解しガラス質に変質している。全体も二次的加熱により硬く変質し、黒灰色をなす。

磨石（２）

長径9.4cm、短径9.0cm、厚さ4.8cmの自然礫を利用した磨石である。片面は使用によって磨滅し、他の面の中央部には打痕が認められる。黒曜石の剝片も若干存在するので、縄文時代の遺物が混入した可能性もある。

滑石製品（８）

２点がある。１点は石鍋。底部から体部にかけての破片であるが、径がでないので実測図は示せない。外面にはススが多量に付着している。４は石鍋の再利用品と考えられる小型容器である。直径2.0cm、高さ1.4cmのカップ形をなす。二個連接して作られているが、一個は欠損し

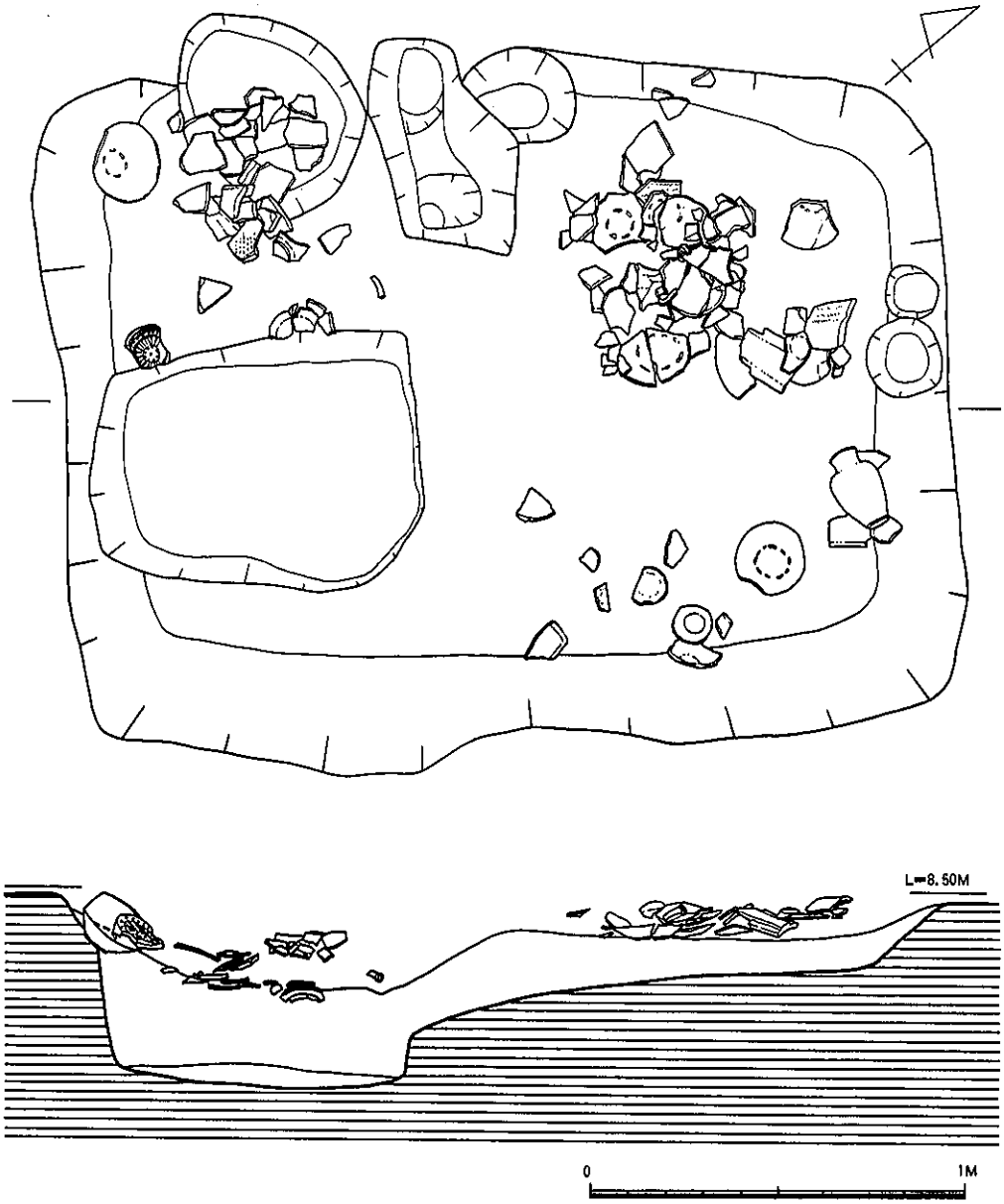


Fig. 20　SK－02 実測図

ている。何に使用されたかは不明。

土錘（５～７）

管状の漁網錘である。中央部がややふくらみ、両端部がほそくなる紡錘形をなす。いずれも黒褐色をなす。５は長4.6cm、径2.0cm、孔径0.4cm、６は長5.3cm、径2.0cm、孔径0.6cm、７は長5.5cm、径2.2cm、孔径0.5cmである。

ガラス小玉（９）

２個がある。変質し、白色に変色しているため本来の色は不明。９は径0.7cm、厚0.5cm、孔径0.3cm。

貨幣

中国新時代の大泉五十一枚がある。径2.75cm、方形透し1.2cm、重さ3.92ｇである。坑底からの出土である。

(2) SK－02

a．遺構

Ⅱ区に検出した土坑である。SK-01 の東6.5ｍのところに位置する。第３紀の頁岩岩盤に掘り込まれているのは、SK-01 と同様である。SK-01 と02の軸線は平行していて、両者が無関係に掘り込まれたものでないことがわかる。土坑は検出面で東西径2.4ｍ、南北径1.8ｍの長方形プランをなすが、南側の中央部に幅30cm、深さ５cmの浅い溝が連接している。底面では東西径2.0ｍ、南北径1.5ｍの長方形プラン、断面形は浅い逆台形状をなす。深さ20cmと浅いがこれは上部がかなり削平されているためである。土坑の埋土は黒褐色土層となっている。土坑は後世のピットの重複がみられ、特に西半部に多い。西半部中央には東西径0.87ｍ、南北径0.7ｍ、深さ0.35ｍ長方形プランの江戸時代の礎石抜き穴がうがたれているが、そのつながりの抜き穴は兵舎等によって攪乱され明らかでない。

遺物は底面より約10cm浮いたところに集中して存在する。瓦類をはじめ、越州窯系の青磁器（双耳壺、水注、椀、合子）がある。陶磁器類は土坑東半部に集中し、そのほとんどがほぼ完形で出土していて、一時期のセット関係を知る好資料である。その他若干の白磁器、黒色土器、ガラス容器がある。ガラス容器の１個は床面に密着して出土している。完形に近い磁器類は目跡がついたままで使用痕も認められないので未使用品と考えられる。また、その大部分に火を受けた痕跡があることは注目されよう。床面近くに出土した磁器小片には使用痕があり、これらと区別されるものである。

B．　出土遺物

青磁器、白磁器、土師器、黒色土器、ガラス容器、瓦類がある。量的には多くないが、完形品に近い遺物がセットで出土していて貴重である。

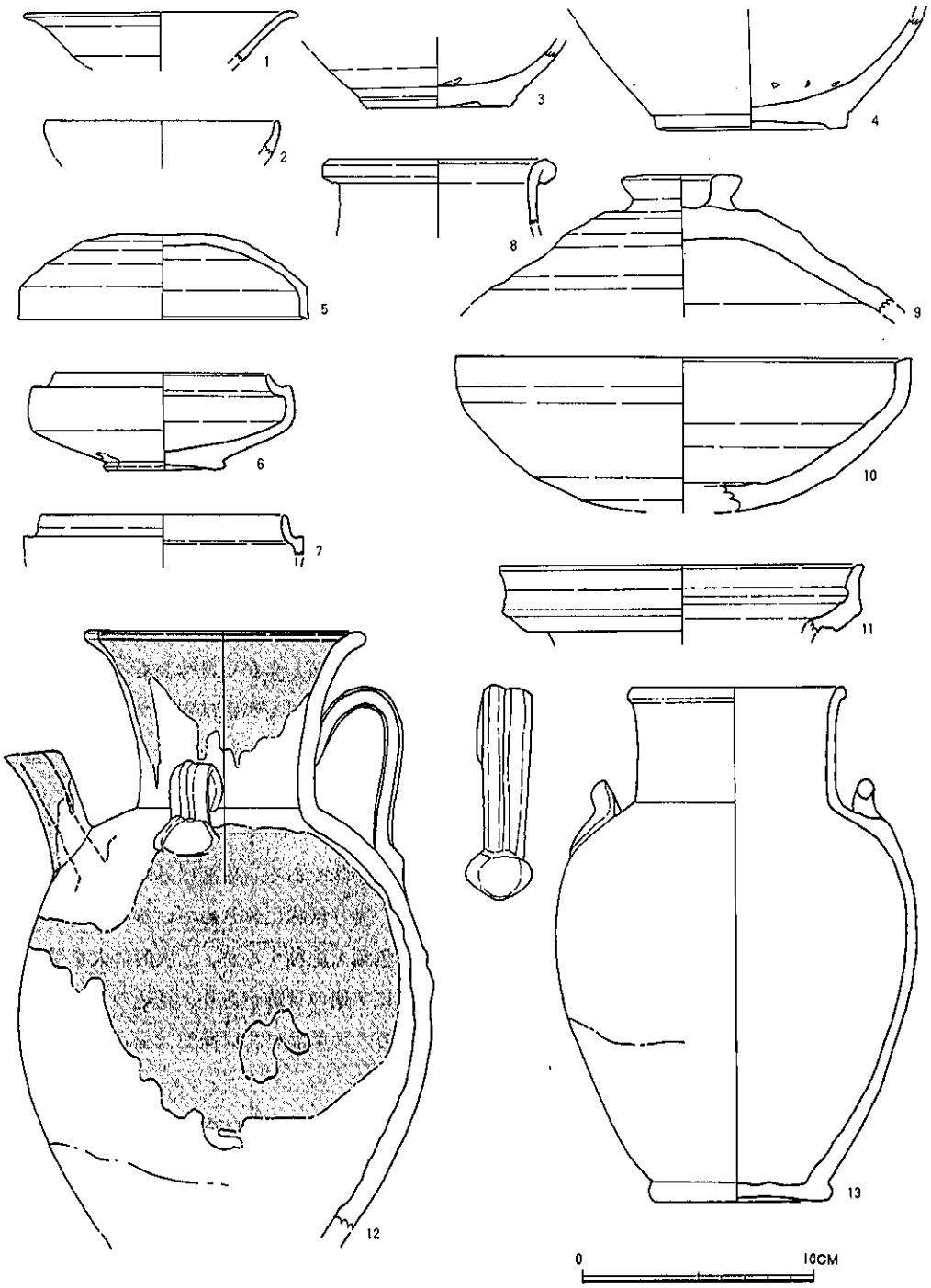


Fig. 21　SK−02 出土遺物実測図 I

青磁器（Fig. 21、22）

椀、合子、水注、双耳壺、盤口壺など器種が豊富である。

椀（Fig. 21－1～４、Fig. 22）

Ⅰ類（Fig. 21－1、Fig. 22－1）

２個体がある。いずれも底部を欠いていて底部形態は不明。１は体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめている。胎土は灰白色で精良、焼成は良好で、内外面には黄色がかった淡青灰色の釉を施す。口径11.8cm、６は体部は外傾しながらたちあがり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部下半はヘラ削り、上半部から内面にかけては横ナデ調整である。内外面に褐色がかった淡オリーブ色の釉を施す。胎土は淡褐色で精良。口径16.0cmである。

Ⅰ－２ａ類（Fig. 21－4）

高台は幅広で低い。断面は低い方形をなす。体部は丸味をもってたちあがるが、口縁部を欠失する。全面に施釉するが、二次的加熱のため釉が剝落し、釉色は不明。畳付は施釉後、釉がかきとられる。見込と畳付に目跡が残り、特に見込には白色の目土が残る。目跡は縦に細長く、小さい。16個前後あったと見られる。底部径8.2cmである。

Ⅱ－１ａ類（Fig. 21－3）

高台内側の削りは浅く中央部は盛り上がる。体部はやや内傾しながら丸味をもってたちあがるが、口縁部を欠き全形は不明。見込と高台畳付外縁に目跡が残るが数は明らかでない。体部上半部から内面にかけて施釉されるが二次的に火を受けているために釉の剝落が著しく釉色は不明。胎土は灰白色で精良。底部径6.2cmである。

Ⅱ－４ａ類（Fig. 22－1）

底部はややあげ底をなし、底部端が外に張り出した円盤状である。体部は外傾しながらほぼ直線的にたちあがる。口縁部は外面が内側にナデられ、尖り気味におさめている。体部下半は横ナデ調整。上半部から内面にかけて青味がかった灰色釉を施釉するが、二次的に火を受けて変色しているので本来の釉色ではない。見込と外底部に７個の目跡があり、見込の目跡には目土が残ったままであり、未使用品であったと考えられる。大型品で、口径22.2cm、器高9.0cm、胎土は精良で黒色粒子を混入している。

Ⅱ－４ｂ類（Fig. 22－2～5、７～９）

高台はややあげ底で、底部端が外方に張り出す円盤状の底部であるが、外縁部はヘラケズリによって面とりがおこなわれている。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁端部は丸くおさめている。体部下半はヘラ削り調整で露胎、上半部から内面にかけて、黄色の強いオリーブ色～淡オリーブ色の釉を施す。見込と畳付に目跡が残り、特に見込の目跡は白土の目土

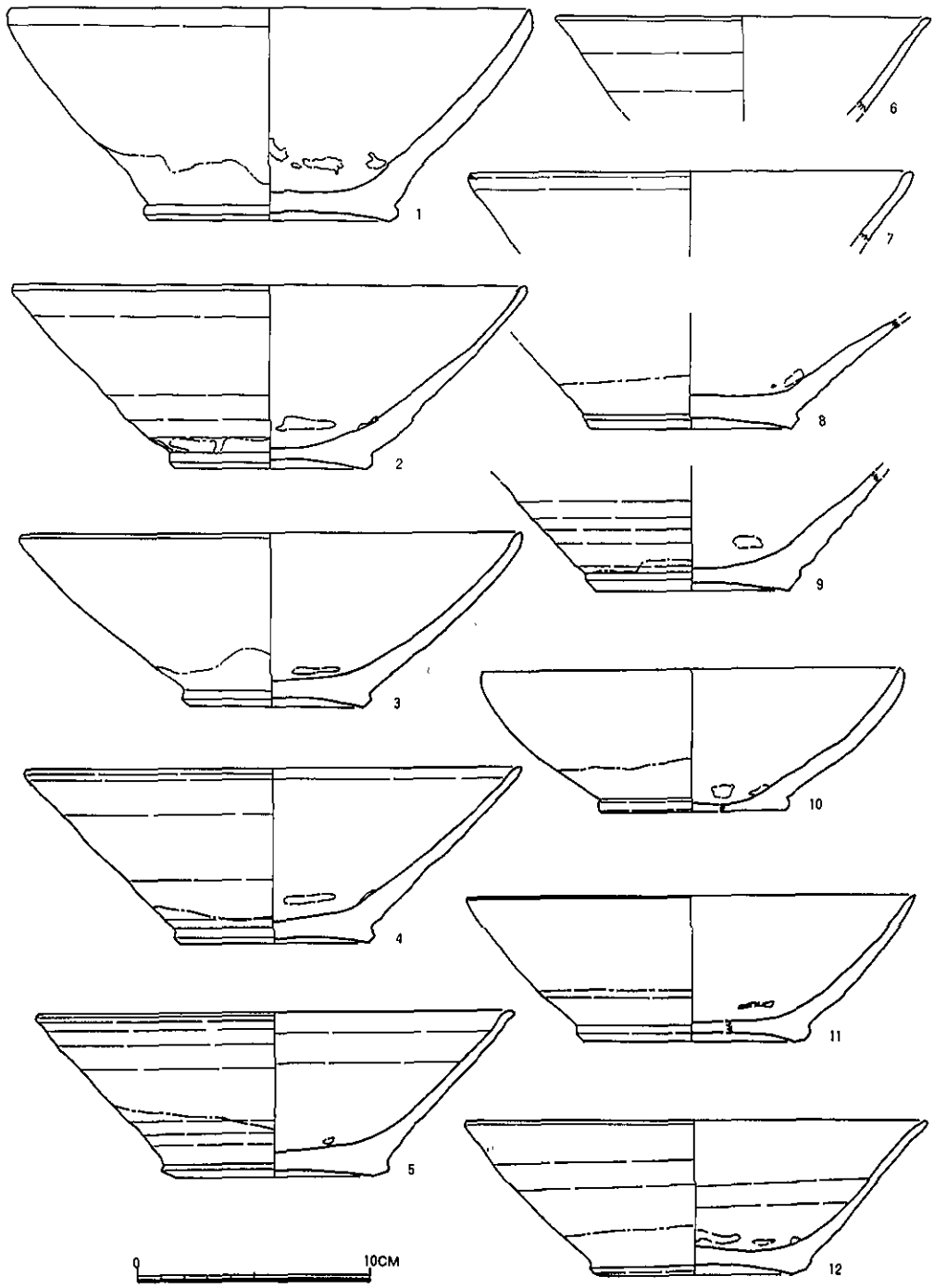


Fig. 22　SK−02 出土遺物実測図Ⅱ

が付着したままであり、これらが未使用品であることがわかる。目跡の数は、５が推定14個で他は６個である。いずれも二次的に火を受けていて若干変色している。２は口径21.9cm、器高7.8cm、３は口径21.5cm、器高8.1cm、４は口径20.0cm、器高7.5cm、５は口径20.4cm、器高7.1cm、７は口径18.7cm、８は底径8.4cm、９は底径8.2cmである。

Ⅱ－４ｃ類（Fig. 22－10）

底部は平底で、端部は外に張り出した円盤状をなす。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は内湾しながらのび、端部は丸くおさめる。体部下半はナデ調整で露胎のまま、上半部から、内面にかけて施釉されるが、二次的に火を受けていて釉が剝落している。胎土は精良であるが、黒色粒子を含んでいる。見込と畳付に目跡が残るが数は不明。復原口径17.8cm、器高6.1cmである。

Ⅱ－４ｄ類（Fig. 22－11）

底部はややあげ底にる。底部端の張り出しは小さい円盤状底部である。体部はやや内傾気味にたちあがり、口縁端部は尖り気味におさめている。体部下半は露胎で、上半部から内面にかけて、化粧土の上にやや青味おびた灰白色釉を施すが、二次的に火を受け変色している。胎土には黒色粒子を混入しているが精良。焼成も良好である。見込と畳付に目跡があり、特に見込には白色の目土が残り未使用品であることがわかる。口径19.1cm、器高6.2cmである。

Ⅱ－４ｅ類（Fig. 22－12）

底部はややあげ底で、端部はあまり張り出さない。外縁部はヘラ削りによって調整している。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。体部下半は露胎で、上半から内面にかけて、緑～黄緑色の釉をかけるが発色にむらがある。見込と畳付に12個の目跡が残り、見込には白色の目土が残る。胎土には黒色粒子を混入しているが精良。焼成も良好である。口径19.8cm、器高6.5cmである。SK－02 出土の椀はいずれも大型品であることは注目される。

灯盞（Fig. 21－2）

灯盞と考えられる口縁部破片がある。口径9.8cm、浅い皿状をなし口縁端部は丸くおさめる。内外面に施釉するが、二次的に火を受け大きく変色している。胎土には黒色粒子を混入し、やや粗い。

合子（Fig. 21－5～7）

蓋一個体、身二個体がある。５は蓋である。天井部は平坦で、体部と口縁部の境は大きく屈曲し明瞭である。口縁部はほぼ垂直に下方にのび、端部はヘラ削りによって平坦に仕上げる。外面に青味がかった灰白色釉を施すが、二次的に火を受け変色し本来の釉色ではない。口縁端部に身と重ねた目跡14個が残る。胎土は精良であるが、黒色粒子を混入している。口径12.5cm、

器高3.7cm。6、7は身である。6は完形品。底部はややあげ底をなし、端部は外に張り出した円盤状底部である。外底部には糸切りの痕跡が明瞭に残る。体部は外傾しながらたちあがり、受部は垂直にたちあがる。受部は平坦で、受部のたちあがりは垂直に近く、高さ1cm前後、端部は丸くおさめている。底部は露胎で、体部外面から内面にかけて、淡青白色の釉を施すが、二次的に火を受け変色しているので本来の釉色ではない。受部平坦面に目跡14個が残る。6は口径9.2cm、受部径11.4cm、器高4.2cm、7は口径10.3cm、受部径16.1cmである。

壺（Fig. 21－8、11、13）

口縁部破片二点、（うち一点は盤口壺口縁）、双耳壺の計三点がある。8は頸部がほぼ直立し、口縁部は粘土折り曲げによって肥厚している。内外面に施釉するが、二次的に火を受けているため釉が剝離し、釉色は不明。褐彩か。口径9.4cm、胎土は精良であるが黒色粒子を混入している。焼成は良好。11は盤口壺口縁部、頸部から大きく外に開き、口縁部は屈曲し垂直にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。内外面にオリーブ色の釉を施釉する。胎は精良で、黒色粒子を混入している。焼成は良好。口径15.6cmである。13は双耳壺。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形である。底部はわずかにあげ底になる平底。底部端は外に張り出した円盤状底部である。体部は内傾気味にたちあがり、胴部最大径は上位にある。頸部は真すぐにたち、口縁部は肥厚し外反する。肩部には粘土紐を貼り付けた横耳が相対して2個つけられる。体部下半から底部にかけては露胎、上半部から口縁部内面にかけて化粧掛の上に釉を施すが、二次的に火を受けているために釉が剝離し、本来の釉色を示さない。体部上半四ヶ所に褐釉による斑があり、釉だれで連接されていたとみられる。胎土は精良であるが、黒色粒子、砂粒が混入される。焼成は良好。口径9.3cm、器高22.2cm、胴部最大径は15.5cmである。

水注（Fig. 21－12）

底部を欠損するが、ほぼ定形の水注1点がある。底部は双耳壺同様にややあげ底で端部が外に張り出した円盤状底部になると考えられる。体部は内傾気味にたちあがり、長胴になり、胴部最大径は胴中央にある。頸部は外反しながらゆるやかにのび、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。肩部には注口部が成形後に挿入される。注口部の長さ約5cm、相対する部分には粘度紐二本を組み合せた把手が頸部中位から胴肩部上位に渡される。左右の肩部にはやはり粘土紐二本を用いた縦耳が配されている。体部外面下半、体部内面は露胎、体部外面上半部から口縁内側にかけては白土の化粧掛の上に黄白色釉を施す。また口縁部、胴部には斑状に褐釉が施されている。口径12.0cm、胴部最大径17.8cmをはかる。胎土には微砂粒と含むが精良、焼成良好である。

蓋（Fig. 21－9）

大型の蓋である。環状のつまみをもつ。つまみ径3.2cm、つまみは垂直にたちあがり、端部

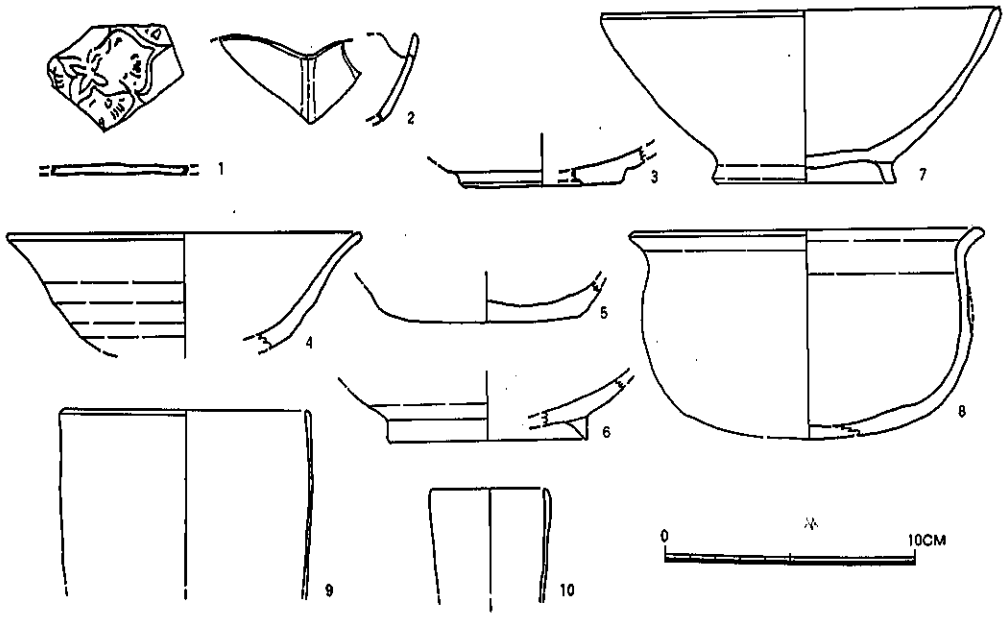


Fig. 23　SK−02 出土遺物実測図Ⅲ

は外へ大きく張り出す。天井部と体部の境は不明瞭で、下方にのびる。口縁部を欠き全形を知ることはできない。環状つまみの内側の一部から外面には褐色がかった緑黄色の釉をかける。胎土は淡褐色、径2～3㎜の砂粒を多量に混入し粗雑である。全面にナデ調整を加える。大型の壺等の蓋であろうか。

無釉陶器（Fig. 21−10）

丸底の底部から体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は内湾気味になる鉢形の陶器である。口縁端部は平坦に仕上げる。全体に横ナデ調整である。胎土はやや赤味をおびた灰白色、黒色粒子や径2～3㎜の白色の砂粒を多量に含み粗雑である。焼成は良好、口径19.6㎝、器高6.8㎝である。

白磁器（Fig. 23−1～3）

椀、蝶花皿があるが量はきわめて少ない。

椀（Fig. 23−3）

Ⅰ−1a類に分類できる。底部の小破片のである。底部は露胎、体部外面から内面にかけて

くすんだ白色釉を施す。底部径6.6cm。この他口縁部に小さな玉縁をもつ破片があるが、小破片のため図示できない。

蝶花皿（Fig. 23－1，2）

同一個体と考えられる底部破片と口縁部破片がある。型づくりで、見込には四弁からなる花文を陽刻している。体部から口縁部はゆるやかなふくらみをもってたちあがる。全体を花形にすると考えられ、体部の画線は深い。口縁の刻みも深く華麗である。底部内面、体部内外面に白色の透明釉をかける。外底には釉滴がみられるがヘラで削り取られる。胎土は白色で精良、焼成も良好で優品である。見込には使用による磨滅痕がみられ、他の青磁器と異なり鴻臚館で使用されたことがうかがえる。

土師器（Fig. 23－4，5，8）

杯、椀、広口壺各１点がある。

杯（５） 底部破片。底部はヘラ切り離し後、ナデ調整を加えている。丸底に近い平底である。体部は外傾しながらあがるが、口縁部を失うので全形は不明。底径7.8cm。

椀（４） 底部を欠く。たぶん貼り付けの高台がつくと考えられる。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。体部内外面とも横ナデ調整である。口径14.0cmである。

広口壺（８） 底部は丸底で体部は内傾しながら半球状にたちあがり、頸部はしまらず、口縁部は大きく外反する。端部は肥厚気味に丸くおさめる。器面ま剝落が著しいために調整痕等は不明瞭、外面にはススが付着している。焼成はやや不良である。口径14.0cm、器高8.2cmである。

黒色土器（Fig. 23－6，7）

２点が存在する。共に椀形品である。６は底部破片。貼り付けの高台は内傾気味につけられ断面三角形で端部は尖る。体部は外傾気味にたちあがる。外面は横ナデ調整。内面は器面が荒れているためにヘラ研磨調整か否かは明らかにしがたい。底径7.9cmである。７は底部が貼り付けの高台でやや高い。脚端部は平坦におさめている、体部は底部から直接、外傾しながらたちあがり、口縁部は内湾気味に肥厚しながら丸くおさめる。体部外面は横ナデ調整、内面は器面が荒れていて、ヘラ研磨調整の痕跡は不明瞭、口径15.7cm、器高6.8cmである。６、７共に黒色土器Ａである。

ガラス容器（Fig. 23－9，10）

２個体がある。出土状況は１点が青磁器類の下の坑底、他の１点が青磁器類と共伴状態で出土したので時期的には問題ない資料である。９は椀ないしはワイングラス風の杯になると考えられるが、底部を欠いていて全形を知ることはできない。体部は垂直にたちあがり、口縁部で

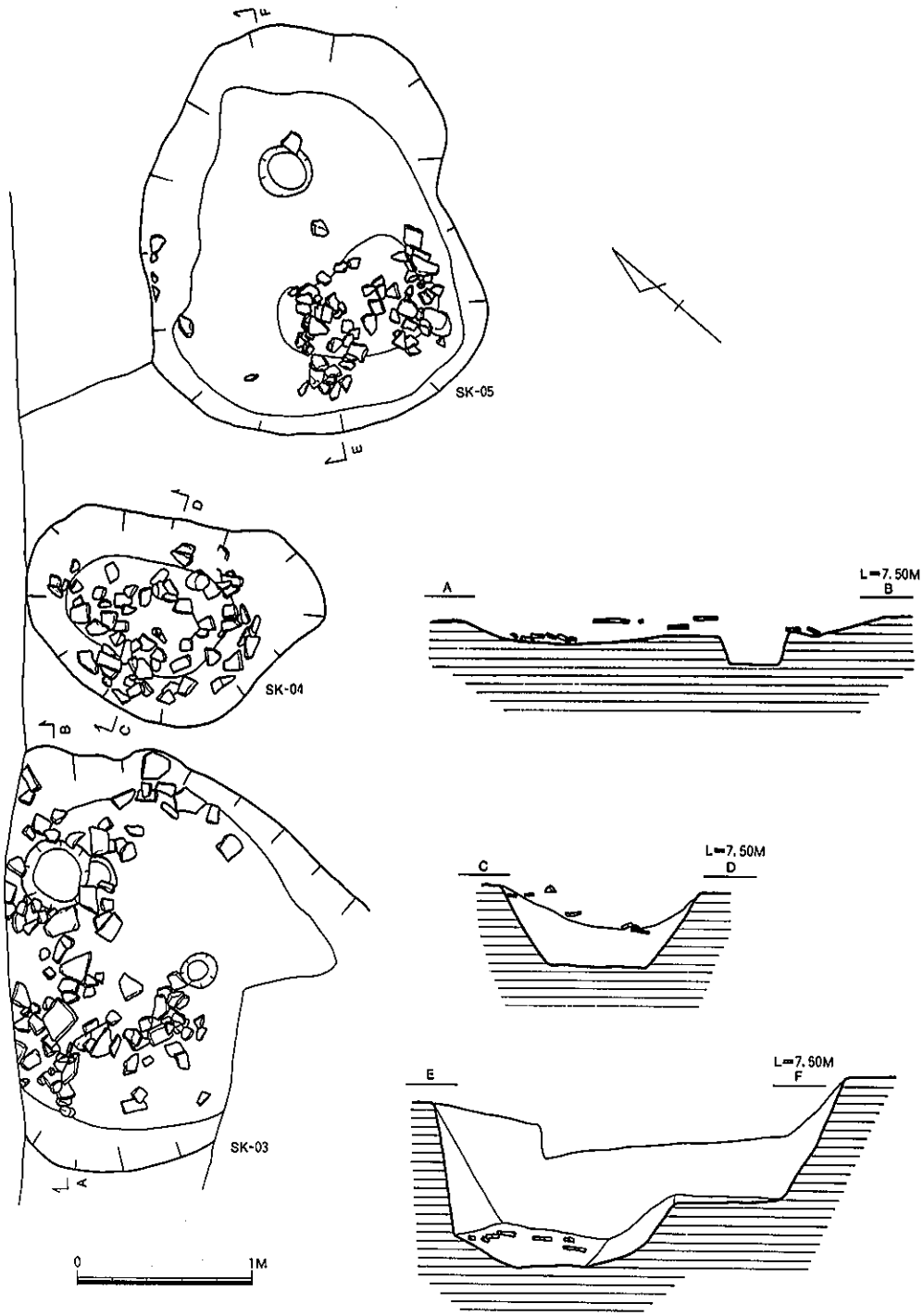


Fig. 24　SK―03～05 実測図

やや内湾し、端部は肥厚しながら丸くおさめる。復原口径10.0cm、器体は薄く、若干の気泡がみられる。色調は薄い緑色がはいるが、ほとんど透明である。10は9に比較して小型品である。同様に底部を欠失するために全形を知ることはできない。体部はやや外傾しながらたちあがり、口縁部は肥厚しながら内湾し、端部は丸くおさめている。口径4.8cmと小さく、器体はルリ色をした半透明、気泡が多量にはいる。ワイングラス風の杯ないしは瓶の口頸部にあたると考えられる。両者共に横あるいは斜方向のナデがみられる。

(3) SK－03

a．遺構

Ⅱ区調査区の東端部近くに検出した土坑である。Ⅱ区の東半部は旧地形では谷部であり、筑紫館あるいは鴻臚館造営時期に埋めたと考えられる整地層となっている。土坑は各部を埋めた整地層上面から整地層に掘り込まれている。土坑は南側の一部が工事によって破壊され、北側は未調査区にのびている。平面形は楕円形をなすのであろう。検出面で南北径2.1m＋α、東西径2.4mを測る。深さ15cmと浅く皿状をなす。底面に2個の柱穴がある。この土坑の上部が削平されているのは他と同様である。SK－01.02の規格化された土坑とは異なり、時期、使用目的に大きな違いがあったことが推測される。

b．出土遺物

青磁器　白磁器　瓦類がある。

青磁器（Fig. 25－1～8. 10～13. 18. 19）

青磁器の器種には皿、小鉢　椀、蓋、水注がある。

皿

Ⅰ－3a類（1、2）

1は細いバチ形の高台、体部はゆるやかにひろがり、口縁は直線的にのび、端部はわずかに外反し、丸くおさめる。体部外面下半はヘラ削り調整で、外面上半部から内面にかけては横ナデ調整である。見込には毛彫りで草花文を描いている。全面に黄味の強い淡オリーブ色の釉を施釉する。高台内に目跡（白土の目土）4個が残る。口径16.2cm、器高4.2cmである。2の高台は1よりやや低い。バチ形をし、脚端部は丸くおさめる。体部は大きく外に開く。口縁部を欠き全形は不明。見込にはやや太目の毛彫りで草花文が描かれる。全面に茶褐色をおび、白く変色した淡オリーブ色の釉を施釉する。しかし、二次的に火を受けて変色していて、本来の釉色ではない。高台内に目跡（白土の目土）4個が残る。両者共、胎土は灰白色で精良である。

Ⅰ－4a類（8）

底部はややあげ底をなす。体部は外傾しながら丸みをもってたちあがるが、口縁部を欠いて

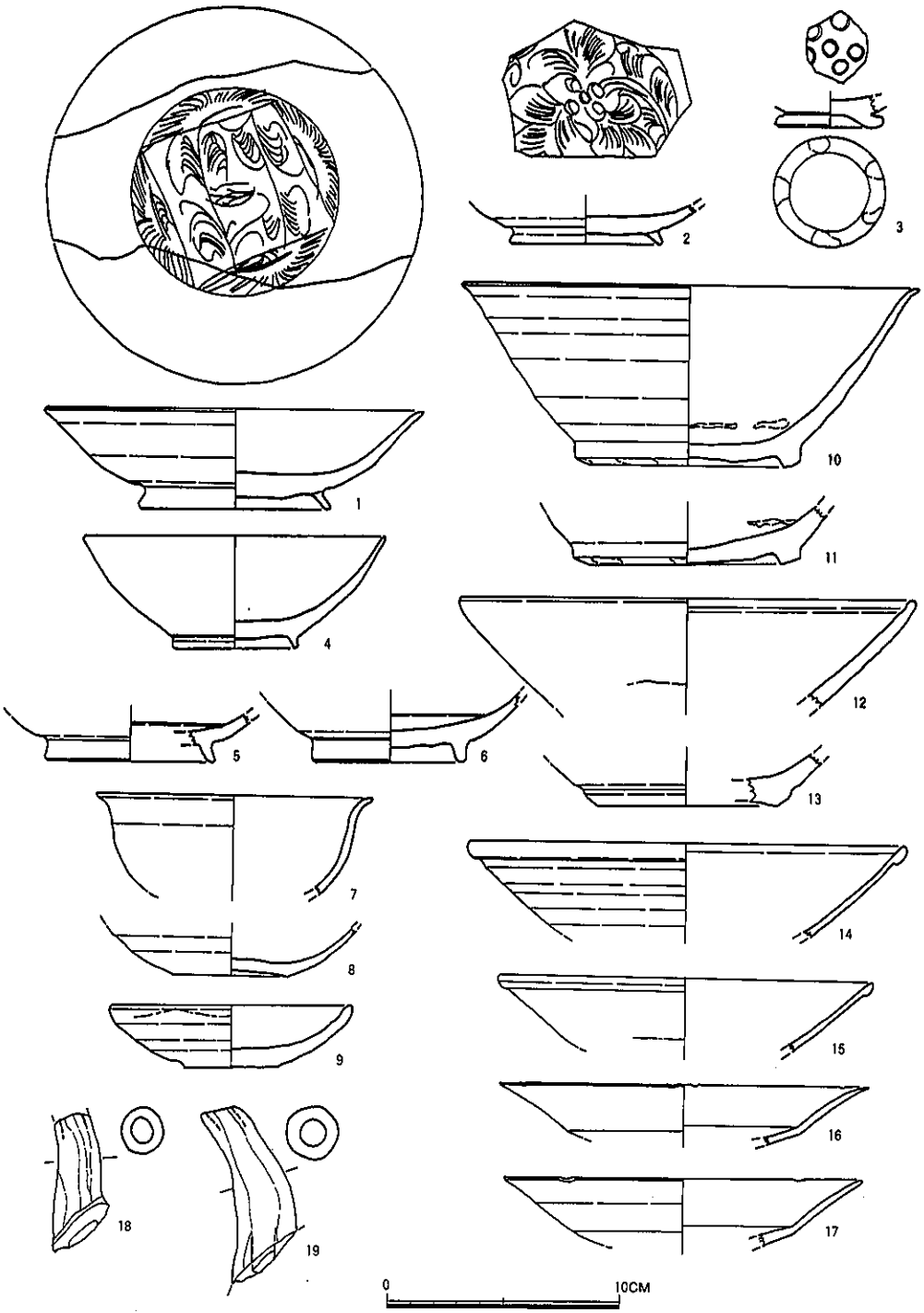


Fig. 25　SK−03 出土遺物実測図

いる。全面ナデ調整、青味の強い淡いオリーブ色の釉を全面施釉する。畳付に７個の目跡が残る。胎土は灰白色で精良、焼成良好である。底径4.9cmである。

脚付小鉢（３）

底部は貼り付けの低い脚になる。脚は低く、大きく外反し、脚端部ははね上げ状に丸くおさめる。体部は欠失し全形は不明。見込に竹管による刻文がみられる。全面に淡青灰色釉を施す。畳付に５個の目跡（白土の目土）が残っている。胎土は灰白色で精良である。脚部径4.6cmである。五代の温州窯に同一の例がある。

椀（４～７、10～13）

Ⅰ－2a 類（４）

小型の椀である。細く低い高台で、端部は丸くおさめる。体部は外傾しながらゆるやかな丸味をもってたちあがり、口縁部は直線的にのび端部は丸くおさめる。全面に発色の良くないモスグリーンの釉を施す。胎土は灰白色で精良。焼成は堅緻、口径12.8cm、器高4.8cm、高台内側に目跡が残る。

Ⅰ－2b 類（６）

底部は直立した高台でやや高い。肉厚で、端部は丸くおさめる。体部は丸味をもってたちあがるが、口縁を失うので全形は不明。見込に浅い段を有する。底部および体部最下段はヘラ削り調整、体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。全面に黄味の強い淡オリーブ色の釉を施す。高台内側に目跡３個が残る。胎土は淡褐色で精良、焼成は良好である。底部径6.7cmである。

Ⅰ－2c 類（５）

高台はやや細め、外に開き気味で、端部は丸くおさめる。貼り付け高台の可能性もあるが、一応削り出し高台とする。体部は外傾しながらたちあがる。見込みに浅い段を有する。全面横ナデ調整である。黄味の強い淡オリーブ色の釉を全面施釉する。高台内側に目跡がつくと考えられる。胎土は灰褐色、高台径は7.3cmである。

Ⅰ－2d 類（７）

底部を欠くが、おそらく削り出しの高台をもつと考えられる。体部は球状に丸味をもってたちあがり、口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。全面横ナデ調整である。体部内外面には褐色がかった淡オリーブ色の釉を施す。胎土は灰色がかった淡褐色、精良である。口径11.8cmである。

Ⅰ－2e 類（10、11）

底部は幅広で低い高台、端部はやや上方に削られ平坦、高台内側も削りがあり、中央部は円形に凹む。体部は直線的にのび、口縁部は外反し、端部は尖り気味におさめる。体部下半はヘ

ラ削り調整。上半部から内面にかけては横ナデ調整である。淡青緑色～淡オリーブ色の釉を全面施釉する。畳付部分は施釉後、釉が削り取られる。見込と畳付に目跡（白土の目土）７個が残る。胎土は灰白色で精良、焼成は良好。10は口径19.5cm、器高7.8cm、底部径9.6cm、11は底部径9.7cmで、いずれも大型の椀である。

Ⅱ-4a 類（12）

底部形態は不明であるが、他の条件からみて平底の円盤状底部になると考えられる。体部は外傾しながら直線的にのび、口縁部でわずかに内湾する。端部は丸くおさめる。体部下半部は露胎で、上半部から内面にかけて化粧掛の上に釉をかけるが、釉は二次的に火を受けているため剝落し、釉色等は不明。胎土は灰白色で、黒色粒子を混入する。口径19.2cmである。

Ⅱ-4b 類（13）

底部はややあげ底、底部外縁はヘラ削りによって面とりがおこなわれる。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。体部外面下半はヘラ削り調整、内面はナデ調整である。施釉は内面に黄味の強い淡オリーブ色の釉を施し、体部外面下半は露胎のままである。胎土は砂粒を混入するが精良。焼成良好である。底部径7.5cmである。

白磁器（14～17）

椀、皿の二種の器種がある。

椀（14、15）

底部形態は不明、体部は外傾しながら直線的にのび、口縁部は粘土折り曲げによって小さな玉縁状をなす。体部内外面にやや灰色がかった白釉を施釉する。胎土は白色で精良。14は口径18.8cm、15は口径15.1cmである。

皿（16、17）

ほぼ同形同体の２点がある。いずれも口縁部破片である。非常に薄手のつくりである。底部は輪高台になると考えられるが、欠失している。体部は大きく開き、中位で屈曲し、口縁部は外反しながらたちあがり、口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。外面には削り調整がかすかに観察され、内面は丁寧なナデ調整である。口縁部には輪花の刻みがあり、六輪花に復原できる。見込に沈線一条をめぐらす。内外面には青味をおびた白釉がかけられる。高台移行部の一部は露胎のままである。胎土は白色で精良である。16は口径15.8cm、17は口径15.4cmである。

褐釉陶器

灯盞（９）

底部は平底、糸切りで未調整。体部は丸味をもってたちあがる。端部は丸くおさめる。全体に厚手で、いびつなつくりである。体部外面の口縁直下からは露胎、口縁部から内面にかけては黒褐色～オリーブ色の釉をかける。灯台は欠損する。胎土は灰白色で黒色粒子、白色砂粒を

混入する。口径10.2cm、器高2.7cmである。

水注（18、19）

水注注口部二点がある。断面形は円形、ゆるやかなカーブを描くが、つくりはいびつである。釉は灰白色で、一部褐釉がかかる。胎土は淡褐色で黒色粒子を若干混入するが精良。。水注の全体形は SK－02 出土水注と同様のものと考えられる。

(4) SK－04

a．遺構

Ⅱ区の調査区の東端部 SK－03 に近接し、東15cm離れた所に検出した土坑である。SK－05 とは約55cm離れた西側に位置する。SK－03 同様に整地層に掘り込まれている。検出面で南北径1.7m、東西径1.15mの不整楕円形プランをなす。深さ45cmで、断面形は逆台形をなす。埋土は黒褐色粘質土層。上部が削られているのは他と同様である。形状等からは SK－03 と同様の使用目的で掘削されたのであろう。

b．出土遺物

青磁器、無釉陶器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦類がある。最も多いのは瓦類で、他の遺物はいずれも小破片である。須恵器、土器師器、青磁器の３点を図示した。

須恵器（Fig. 26-１）

杯、貼り付けの高台は、断面形方形で、底部と体部の境よりやや内側に付く。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁端部は尖り気味におさめる。底部高台内側はヘラ切りのままで未調整。体部外面から内面にかけては横ナデ調整。内底部は不定方向のナデ調整である。胎土には砂粒を混入する。焼成良好で、灰白色なす。口径14.6cm、器高4.0cm

土師器（Fig. 26-２）

小皿、底部はヘラ切り離し、体部と底部の境は不明瞭で、体部はやや丸味をもってたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ調整、胎土は精良、焼成はやや不良、淡褐色となす。口径10.1cm、器高1.8cm。

青磁器（Fig. 26-３）

水注の注口部。断面円形であるが、手ずくりであるためややいびつである。注口端部はわずかに屈曲する。注口部は体部成形後に挿入するようになっていて、粘土接合部ではずれている。二次的に火を受け、釉は完全に剝離している。胎土は赤味がかった灰白色、砂粒を多量に含み良好ではない。

(5) SK－05

a．遺構

Ⅱ区の東端に検出した。SK－04 の東55cmのところに位置し、SK－5' とは切り合い関係にあ

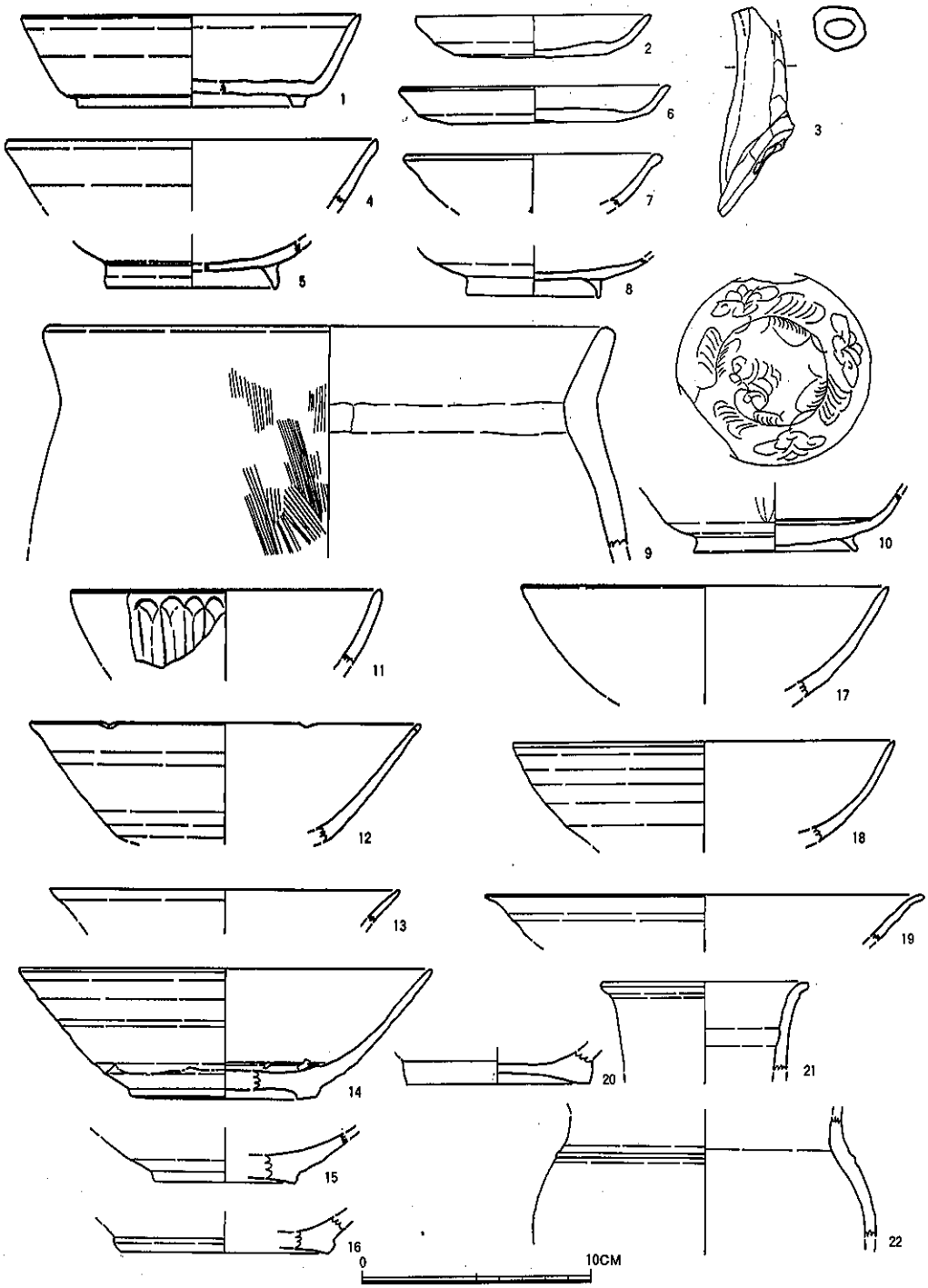


Fig. 26　SK—04・05出土遺物実測図

るが、SK－5' のプランがはっきりしないために、その前後関係は不明。SK－03、04同様整地層に掘り込まれている。検出面では東西径1.95ｍの不整楕円形プランをなす。底面は平坦でなく西側が一段深くなっている。深さは浅い部分が約70cm、西側の深い部分が約95cmを測る。埋土は黒褐色粘質層である。形状等からは、SK－03、04と同様で、SK－01、02の規格化された土坑との間に使用目的の違いを感じる。

b．出土遺物

青磁器、白磁器、須恵器、土師器、黒色土器、奈良・平安時代の瓦類があり、量的に多いのは瓦類である。

土師器（Fig. 26－４～７，９）

器種は小皿、椀、甕がある。

小皿（６）

底部はヘラ切り離し、体部は直線的にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面から内面にかけては横ナデ調整。胎土には砂粒を多量に含み良くない。口径11.8cm、器高1.6cmである。

椀（Fig. 26－４，５，７）

３個体がある。４、７は口縁部、５は底部破片である。４は体部が外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。内外面共横ナデ調整である。口径15.9cm、７は体部は丸味をもってたちあがり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。体部内外面は横ナデ調整である。口径10.9cm、５、高台はやや高く、内湾気味になり、脚端部は尖り気味に丸くおさめる、高台内側はヘラ切り離しのまま未調整。体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。底部径7.3cm

甕（Fig. 26－９）

体部はあまり張らず、頸部でややすぼまり、口縁部は外傾しながら直線的にのび、口縁端部は丸くおさめる。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は下から上に縦方向にヘラ削りを加え、頸部内側に横方向のヘラ削りを加える。口縁部内外面は横ナデ調整である。口頸部外面にはススが付着している。胎土には径１～３㎜の砂粒を多く混入し、粗雑である。焼成は良好、口径24.8cmである。

黒色土器（Fig. 26－8）

椀底部１点を図示した。高台は細く、内湾気味に貼り付けられる。脚端部は丸くおさめる。体部は開き気味、外面は横ナデ調整、内面はヘラ研磨調整である。

青磁器（Fig. 26-10～22）

皿、椀、水注等の器類があり、量的にも多い。

皿（10）

Ⅰ-3a 類、底部は細く低い。バチ形で脚端部は丸くおさめる。体部は底部から屈曲し直線的にのびる。体部外面高台近くはヘラ削り調整、他は横ナデ調整である。見込に沈線一条をめぐらし、その内側に毛彫りによる草花文を描く。胎土は灰白色で精良、焼成は良好、全面に黄味の強い淡オリーブ色の釉を施す。高台内側に５個の目跡が残っている。底部径21cmである。

椀（11～20）

Ⅰ－1a 類（15）

底部破片で蛇ノ目高台になると考えられる。高台付近の体部はヘラ削り調整、上半部から内面にかけて横ナデ調整を加える。全面に淡青灰色の釉を施する。畳付に目跡が残るが数は不明。胎土は灰白色で精良。焼成は良好である。底部径6.1cmである。

Ⅰ-2a 類（11）

底部を失い分類は明らかでないが、削り出し高台をもっと考えられる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部内外面は横ナデ調整。外面には連弁文が施される。内外面に黄味の強い淡オリーブ色の釉をかける。胎土は淡灰褐色で精良、焼成はやや不良、口径13.4cmである。

Ⅰ-2b 類（12）

11同様に底部の形態は不明であるが、削り出しの輪高台と考えられる。体部は底部から外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。口縁部には輪花の刻みがあり、五輪花をなす。体部外面下半部はヘラ削り調整、上半部から内面にかけては横ナデ調整。胎土は灰白色で精良。体部外面上半部から内面にかけて黄味の強い淡いオリーブ色の釉をかける。見込に目跡が残るが数は不明。口径17.0cmである。

Ⅰ-2c 類（13）

口縁部破片、底部は削り出しの輪高台になると考えられる。口縁部は外反気味にたちあがり、口縁端部は尖り気味におさめる。口縁内外面は横ナデ調整。また、内外面には黄味がかった淡オリーブ色の釉とかける。胎土は淡褐色で精良、焼成はやや不良である。口径15.3cmである。

Ⅰ-2d 類（17、18）

底部形態は不明であるが、削り出しの輪高台になる可能性が強い。体部は内湾気味に丸味をもってたちあがる。口縁部は直線的にのび、端部は尖り気味におさめる。体部内外面は横ナデ調整、胎土は灰白色で精良、焼成は良好。内外面には青味強い淡オリーブ色～褐色がかった淡いオリーブ色の釉をかける。17は口径16.0cm、18は口径16.5cmである。

Ⅰ-2e 類（19）

底部形態は不明であるが、削り出しの輪高台になると考えられる。体部は外傾しながら直線

的にたちあがり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。体部内外は横ナデ調整、淡青灰色の釉がかけられる。胎土は灰白色で精良、焼成は良好である。口径19.2cmである。

Ⅱ－2a 類（14）

高台は低く幅広で、畳付部分を斜に削る。体部は外傾しながらほぼ直線的にのび、口縁端部は丸くおさめる。体部外面下位はヘラ削り調整、上部から内面にかけては横ナデ調整。見込に段がめぐる。体部外面下半から内面にかけて、黄味がかった灰白色釉を施す。見込と畳付に目跡が残っている。特に見込の目跡には白土の目土が残っていて、未使用品であることがわかる。胎土は灰白色で精良、口径17.8cm、器高5.7cmである。

Ⅱ－4a 類（16）

円盤状底部でややあげ底になる。底部端は外に張り出す。内面に黄褐色を施すが、二次的に火を受けていて本来の色調は不明。胎土は灰白色で、黒色粒子を混入し精良ではない。底部径9.0cmである。

Ⅱ－4b 類（20）

底部はあげ底をなす。底部端は外に張り出さず、まっすぐにたつ、外底部は削り調整。他は横ナデ調整である。胎土は淡褐色、黒色粒子を混入するがやや精良。内面に青灰色の釉を施す。底部径8.0cmである。

水注（21，22，Fig. 27－7）

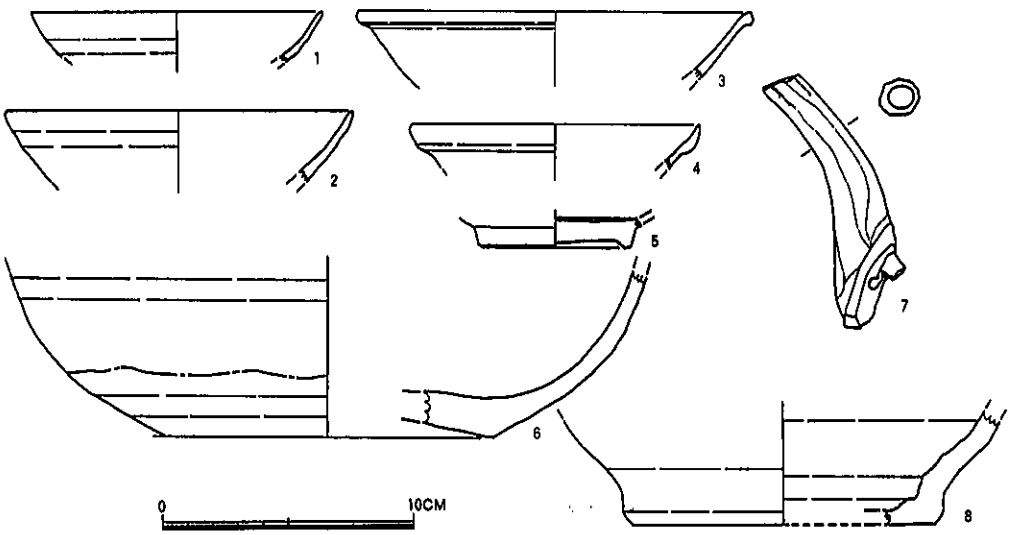


Fig. 27　SK－05 出土遺物実測図

２個体がある。21は口頸部、22は頸部から体部上半部にかけての破片である。21、頸部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。内外面は横ナデ調整。暗オリーブ色の釉を内外面に施すが、内面には釉がかからず露胎部分が多い。胎土は灰白色で黒色粒子を混入し、やや粗い。焼成は良好である。口径9.0cmである。22、頸部は不明瞭な段がある。肩部はあまり張らず、やや長胴になると考えられる。内外面は横ナデ調整。内外面にやや黄味がかった淡青灰色の釉をかける。胎土は灰白色で精良。胴部最大径は16.0cmである。Fig. 27－７は注口部である。断面円形をなし、外面はヘラ削りで荒い面とりがある。注口は基部で上方にたちあがり端部は外反する。体部成形後に挿入する方法をとっている。胎土は灰白色、砂粒を多量に含み粗い。焼成は良好である。釉は完全に剝落し不明。

白磁器（Fig. 27－１～５）

皿、椀の器種がある。

皿（１）

底部を欠く。体部は外傾しながら内湾気味にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。内外面に白濁した青白色の釉を施す。胎土は灰白色、精良である。焼成やや不良。口径11.4cmである。

椀（２～５）

Ⅰ－1a 類（３）

口縁部破片である。他例からみて底部は蛇の目高台をなすと考えられる。体部は直線的に外に開き、口縁部は肥厚し、小さな玉縁となる。全面に白色釉を施す。胎土は黄白色で精良。焼成は良好である。口径15.4cmである。

Ⅰ－2a 類（２）

口縁部破片で底部を欠くが、削り出しの高台をもつと考えられる。体部は外傾しながらやや内湾気味にたちあがり、端部は丸くおさめる。体部内外面は横ナデ調整、釉はやや青味をおびた白釉で内外面に施される。胎土は白色で精良、焼成は良好である。口径13.6cmである。

Ⅰ－2b 類（４，５）

底部（５）は、高台内側の削りは浅い。底部はやや厚くなる。体部は外傾しながら直線的にたちあがると考えられる。口縁部（４）は肥厚し、幅広の低い玉縁状をなす。体部上半部から内面にかけては横ナデ調整。下半部はヘラ削り調整とみられる。見込に沈線一条をめぐらす。体部外面上半部から内面にかけて青味がかった黄白釉を施す。体部外面下半部は露胎のままである。胎土は白色で精良、焼成は良好である。４は口径11.4cm、５は底部径6.0cmである。

褐釉陶器（Fig. 27－６）

大型の鉢形品、底部はあげ底になる。体部は外傾しながら丸味をもってたちあがる。口縁部は欠損し形態不明。体部外面下半部はヘラ削り調整。体部外面上半部から内面にかけて暗黄褐

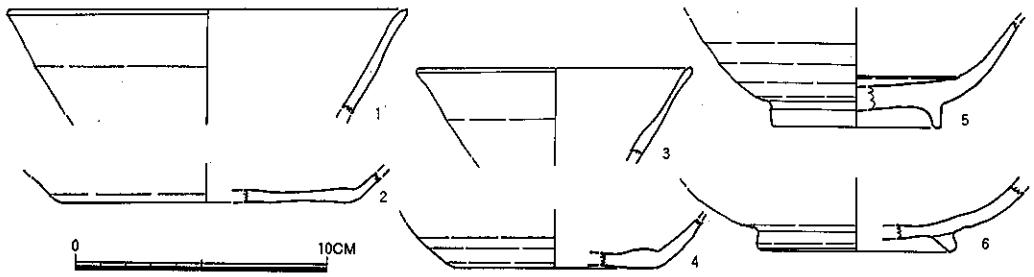


Fig. 28　SK－05′出土遺物実測図

色の釉をかける。釉は剝落が著しい。胎土は淡赤褐色で砂粒を多量に混入し粗い。焼成は良好、底部径12.9cmである。

無釉陶器（Fig. 27－8）

底部は平底、体部は底部から外反気味にたちあがり、一転し、内湾気味にふくらみをもってたちあがるが上半部を欠く。体部外面は横ナデ調整。内面はロクロ痕が明瞭に残っている。胎土は赤褐色～黄褐色で、多量の砂粒を含み、粗い。焼成はやや不良である。底部径12.0cm。

(6)　SK－05′

a．遺構

Ⅱ区調査区の東端に検出した土坑である。SK－05 と切り合い関係にあるが、その前後関係は不明。SK－03～05 同様に整地層に切り込まれた土坑である。南側が未調査区にのびる。平面プランは明確でないが径2.6m前後の円形ないしは楕円形プランをなすと考えられる。断面形は皿状をなし、深さ20cm前後を測る。SK－03～05と一連の土坑である。

b．出土遺物

青磁器、須恵器、土師器、黒色土器、黒釉陶器、瓦類があるが、いずれも最的に少なく、小破片である。

青磁器（Fig. 28－5）

椀、底部は削り出しの輪高台、高台と底部の境に浅い沈線をめぐらす。体部は丸味をもってたちあがる。口縁部を欠く。体部外面下半部はヘラ削り調整。上半部、内面は横ナデ調整である。見込に段を有する。やや青味の強いオリーブ色の釉がやや厚く全面施釉される。外底の高台内側に目跡が残る。胎土は灰白色で精良、焼成は良好である。高台径6.7cmである。

土師器（Fig. 27－1～4）

皿、杯、椀がある。いずれも小破片、4点を図示した。

皿（2）

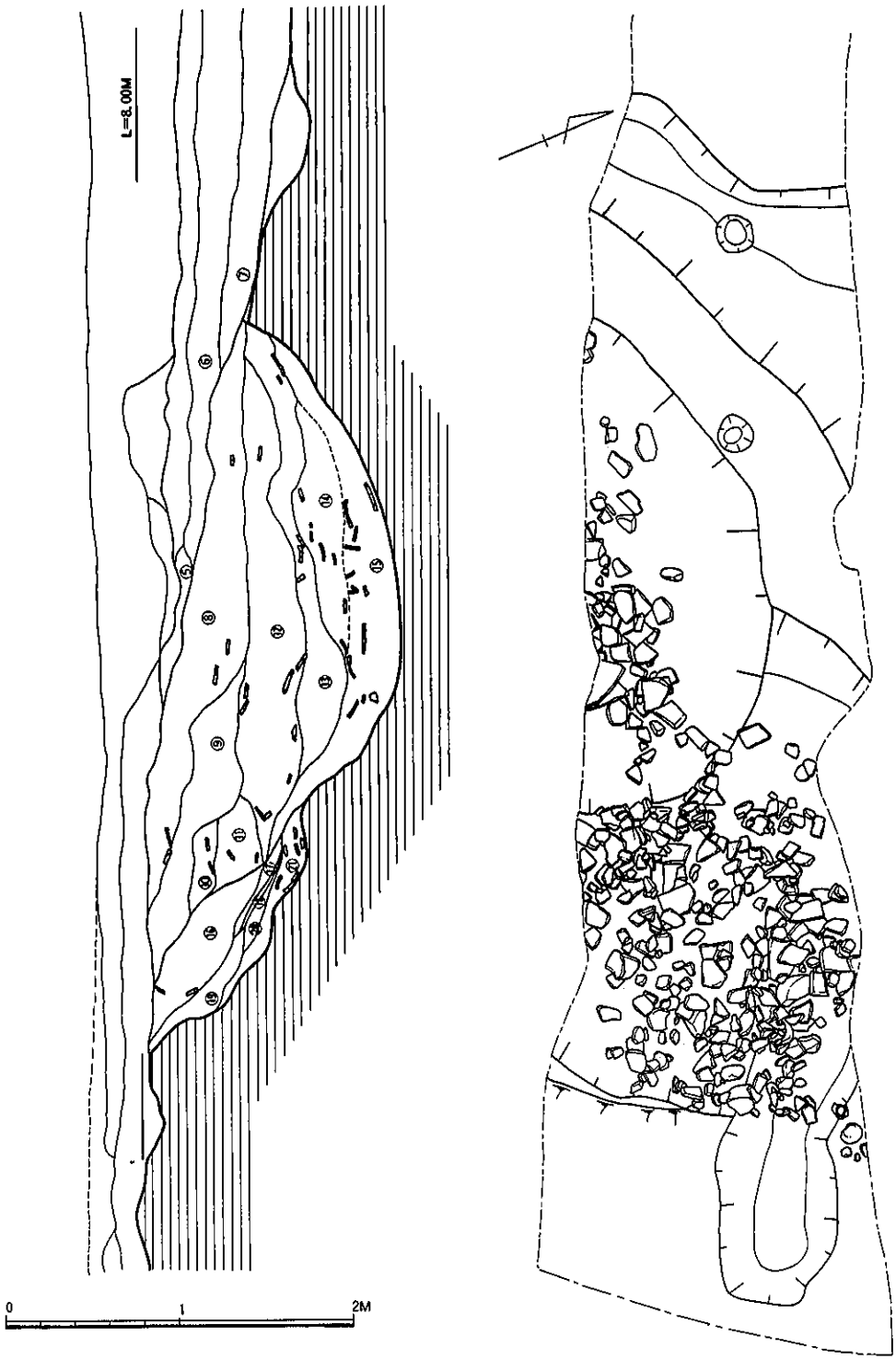


Fig. 29　SD－06 実測図

底部は平底、ヘラ切り離しで、ヘラ切り後ナデ調整を加えている。体部は外傾し直線的にたちあがる。体部から内面にかけては横ナデ調整、胎土には砂粒を含みやや粗い。焼成はやや不良。底部径11.5cmである。

椀（4）

底部はややあげ底状をなし、体部は内湾気味にたちあがる。口縁部は欠くが、あまり高くはない。外底部はヘラ切り離しと考えられるが、判別しがたい。体部外面から内面にかけては横ナデ調整。胎土は砂粒を若干混入するが精良、焼成はやや不良である。底部径8.0cm。

椀（1、3）

共に底部を欠くが、貼り付け高台をもつ椀と考えられる。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁部はわずかに肥厚し、端部は丸くおさめる。体部内外面は横ナデ調整である。胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良くない。1は口径15.7cm、2は口径10.8cmである。

黒色土器（6）

内外面と黒色にした黒色土器Bである。底部はバチ形に開く。脚端部は丸くおさめている。体部は内湾気味に丸味をもってたちあがる。内外面はヘラ研磨調整。胎土は砂粒を多量に含み、やや粗い。焼成は不良である。底部径7.9cmである。

(7) SD−06

a．遺構

Ⅱ区調査区南半部SB−11の北側約6mに検出した溝状の遺構であるが性格が正確に把握できていない。一応、溝としたが、土坑である可能性も強い。溝幅3.0m、深さ0.9m、断面U字形をなす。溝の方向は東西方向をとっている。溝底には瓦が堆積し、その上部に木炭層が厚さ2〜3cmで堆積している。北西部で土坑（SK−06'）と重複していて、土坑に切られている。土坑は南北径3.9m、東西径1.1m＋aの楕円形プランをなすと考えられる。深さ1.4mで断面形は皿形をなす。土坑内には溝状に堆積する木炭層がないことからもその切り合いに関係は明白である。土坑内には瓦が多量に存在し、瓦溜内の土坑と考えられる。

西壁の土層から各構造の関係をみてみよう。第1層、花崗岩風化礫、真砂土を混入した褐色土層。第2層、灰茶褐色粘質土層は江戸時代の築造時における整地層。第4層、木炭片を若干含んだ褐色粘質土層。第5層、明褐色粘質土層。第6層、瓦小片、小礫、木炭片を若干含んだ褐色粘質土層、第7層、第6層より瓦、礫の量が少なくなる。やや赤味をおびた茶褐色粘質土層。以上の第4〜第7層は西側に順次厚くなっている。地山の傾斜とも符号しているので、自然に流出した土の堆積とみられる。SK−06'はこの土層の下面において確認できる。第8層〜第15層はSK−06'の埋土である。第8層、木炭片、瓦小片を含む赤褐色粘質土層。第9層、暗赤褐色粘質土層。第10層、赤褐色粘質土層。第11層、頁岩風化土、木炭片を含んだ暗赤褐色

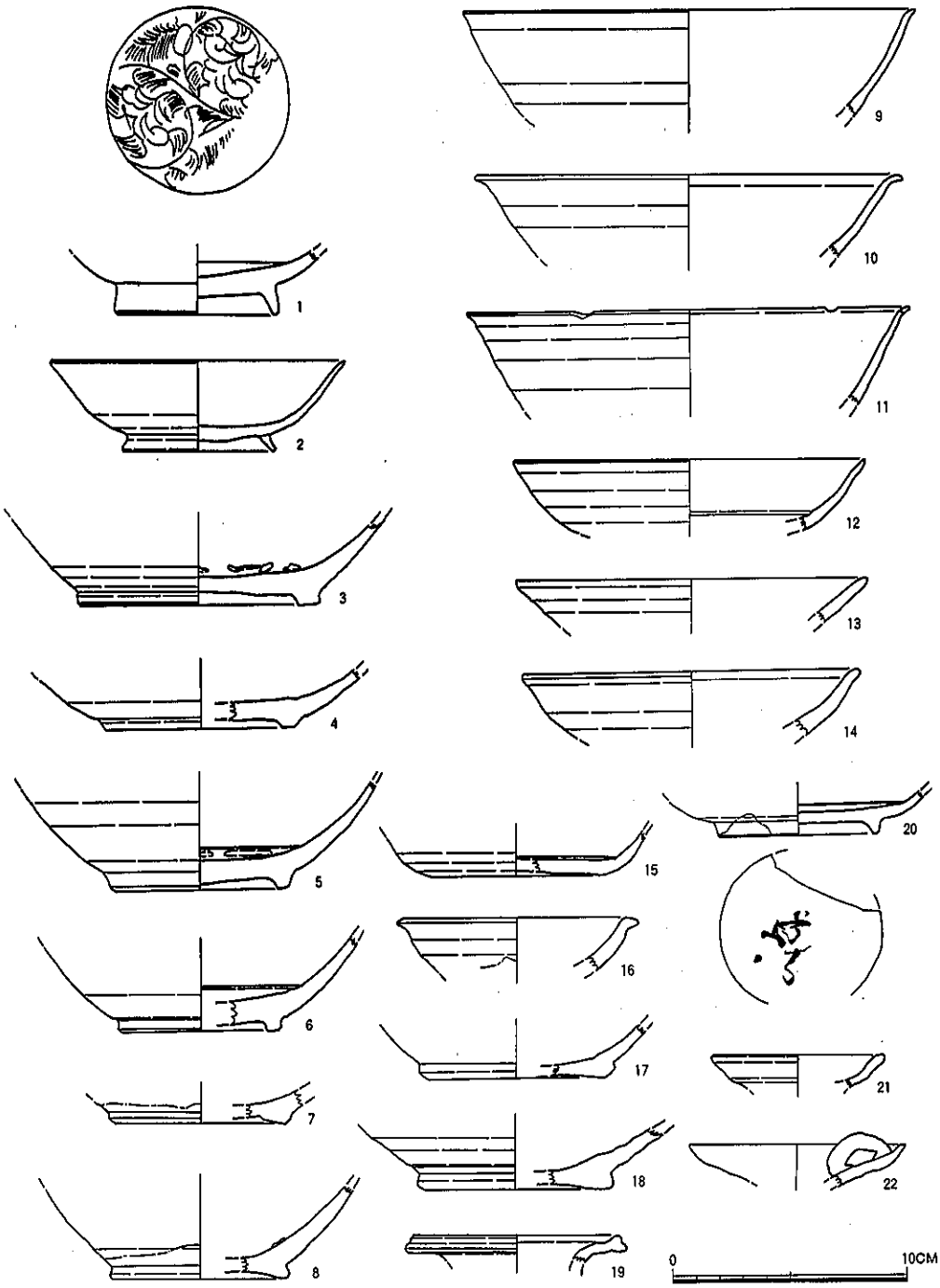


Fig. 30　SD−06 出土遺物実測図 I

粘質土層。第12層、頁岩風化土、木炭片、瓦片を含んだ明赤褐色粘質土層。第13層、瓦片を含む赤褐色粘質土層。第14層、木炭片を含む茶褐色粘質土層。第15層、木炭片、瓦類を多量に含んだ暗褐色粘質土層となっている。第18層～第21層は、SD－06の埋土である。第16層、暗赤褐色粘質土層。第17層、褐色粘質土層。第18層、木炭層。第19層、赤褐色粘質層。第20層、黄褐色粘質土層。第21層となっている。

SK－06'、SD－06 の埋土はいずれも自然の流れ込みによる堆積状態を示している。

b．出土遺物

多量の瓦類に混じって、青磁器、白磁器、須恵器、土師器、黒色土器、石製硯等が出土している。SK－06' では瓦類が主で青磁器等の遺物類はきわめて少ないが、調査当初、切り合い関係がわからず、遺物が混在している危険性が強く、ここでは両者の出土遺物をいっしょにして報告する。

青磁器（Fig. 30）

椀、皿、合子、壺、灯盞等の器種がある。

椀（Fig. 30－1，3～11，17，18）

Ⅰ－2a 類（1）

高台は細く高い。高台端部は丸くおさめる。体部は大きく外に開く。見込に圏線をめぐらし、内部に毛彫による草花文を描いている。オリーブ色の釉を全面に施釉している。高台内側に4個の目跡が残っている。高台径7.0cmである。

Ⅰ－2b 類（3～6，10，11）

高台は低く幅広い。畳付はヘラ削りによって面とりされる。体部は外傾しながら丸味をもってたちあがる。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。体部外面下半部はヘラ削り調整、上半部から内面にかけては横ナデ調整である。全面に淡灰褐色～淡青灰色の釉を施し、畳付は施釉後に釉が削り取られている。見込と畳付には長楕円形の目跡が残っている。11は口縁部に輪花の刻みをもつ。胎土は褐色がかった灰白色、砂粒を若干含むが精良である。3は底径10.4cm、4は8.0cm、5は7.6cm、6は6.9cm、10は口径18.1cm、11は口径18.2cmである。

Ⅱ－1a 類（7）

高台幅はややせまい。小破片で全体形は不明。体部外面下半から内面にかけて、青味がかった黄白色の釉をかける。胎土は灰白色で精良、焼成は良好である。見込と畳付に目跡が残る。底径7.2cmである。

Ⅱ－4a 類（8，9，17，18）

底部はややあげ底の平底。底部端は外に張した円盤状をなす。体部は外傾し、丸味をもってたちあがる。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味におさめる。体部外面下半から内面にかけ

て黄味の強い淡オリーブ色の釉をかける。釉下には化粧掛がみられる。胎土は灰白色で黒色粒子を混入する。８は底径7.6cm、９が口径19.0cm、17は底径7.2cm、18は底径8.0cmである。

皿（２，12～16，20，21）

Ⅰ－2a 類（20）

高台は外側がほぼ垂直に、内側は斜に削り出され、畳付きの幅がせまくなる。見込に段がある。体部は外に開き気味にたちあがる。外面の高台より上と内面に黄褐釉が施されるが釉の剝落が著しい。外底部に墨書があるが、残存状態が悪く判読できない。胎土は黄白色で精良。底部径6.8cmである。

Ⅰ－3a 類（２）

高台はバチ形に外に開き、脚端部は丸くおさめる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。白くくすんだオリーブ色の釉を全面に施す。高台内側に目跡５個が残る。体部外面下半部はヘラ削り調整である。胎土は淡褐色で精良。口径12.5cm、器高3.9cmである。

Ⅰ－4a 類（15）

底部はややあげ底の平底である。体部は丸味をもってたちあがるが、口縁部を欠く。体部外面はヘラ削り調整である。全面施釉であるが、釉が風化し褐色をなす。胎土は灰白色で精良。焼成は良好である。底径7.0cmである。

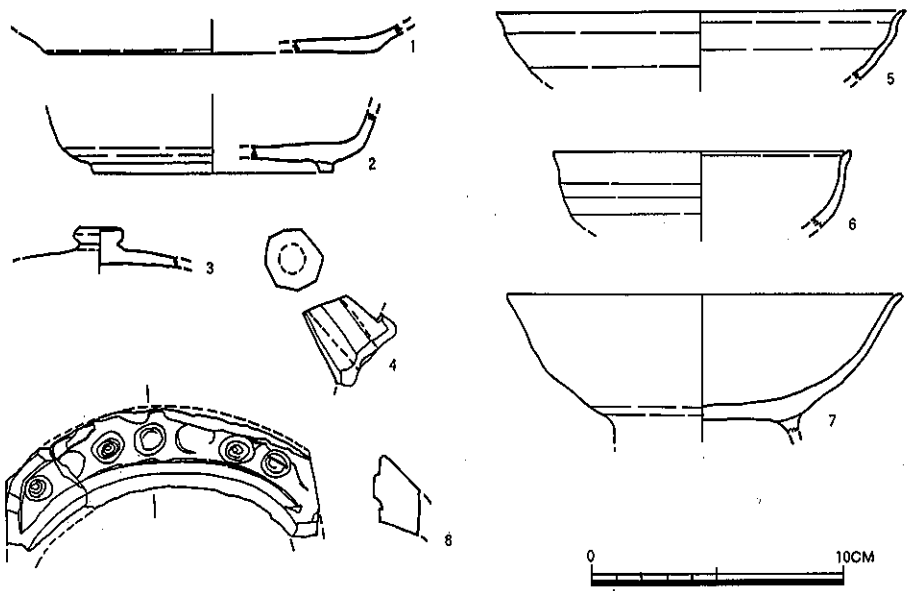


Fig. 31　SD－06 出土遺物実測図Ⅱ

その他（12～14，16，21）

底部形態不明品を一括した。12、13は体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は12が尖り気味に、13が丸くおさめる。14は体部がやや内湾気味に丸味をもってたちあがり、口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。16は体部が内湾気味にたちあがり、口縁部は大きく外反し、端部は尖り気味におさめる。21は皿ないしは壺口縁破片とみられるが、ここでは一応小皿として扱う。口縁部は外反気味にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。12は見込に段を有する。体部内外面は横ナデ調整で、青味がかった黄白色釉がかけられる。口径14.8cm、13は体部内外面は横ナデ調整、褐色がかった青灰色の釉を施釉する。口径14.7cm。14は体部外面下半はヘラ削り調整、上半部から内面にかけては横ナデ調整。淡オリーブ色の釉がかけられる。口径14.2cm。16は体部内外面は横ナデ調整。白濁した青灰色の釉がかけられるが剝落が著しい。体部外面下半は露胎である。口径10.2cm。21は体部内外面は横ナデ調整。褐色がかった淡灰白色の釉をかける。口径7.3cmである。いずれも胎土は灰白色で精良。焼成は良好である。

灯盞（Fig. 30－22）

底部を失うが、平底になると考えられる。体部は外傾しながら外に開き、口縁部でやや内湾気味にたちあがり、端部は段をつくる。灯台は粘土紐を環状にして体部内側に貼り付けられる。内外面に黄味の強い淡オリーブ色の釉をかける。胎土は灰色がかった淡褐色、焼成は良好である。口径9.4cm。

水注（Fig. 31－4）

水注の注口部がある。注口部は短かく直線的にのび、ヘラ削りによって面とりがされ断面八角形をなす。全面に釉がけするが、釉の剝落が著しく、わずかに淡オリーブ色と褐釉が確認できる。胎土は赤味をおびた淡褐色で精良、焼成はやや不良である。長沙窯の青磁褐彩の水注注口部である。

須恵器（Fig. 31－1～3）

盤、杯、蓋の三種がある。盤(1)は底部はヘラ切り離し、体部は外傾して大きく開く、口縁部形態は不明。体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。胎土には多量の砂粒を含み精良ではない。焼成は良好で、灰色をなす。底部径13.3cmである。杯(2)は貼り付けの高台をもつ。底部のやや内側にあり、断面方形をなす。体部はやや丸味をもってたちあがる。口縁部を欠く。体部内外面は横ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが精良、焼成良好で灰白色をなす。底部径9.4cmである。杯蓋(3)は天井部破片、ボタン状のつまみがつく。天井部内外面は横ナデ調整である。胎土には少量の砂粒を含むが精良。焼成は良好。灰白色をなす。

土師器（Fig. 31－5～7）

いずれも椀である。5、体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部は強い横ナデによ

ってやや屈曲し、外反する。端部は尖り気味に丸くおさめる。調整は磨滅が著しいため不明。胎土には白色砂粒を少量含むが精良、焼成はやや不良。色調は淡褐色。口径16.2cmである。６は底部を欠く。体部は内湾気味にたちあがり、口縁部は肥厚しながら外反し、端部は丸くおさめる。体部外面下半はヘラ削り調整、上半部から内面にかけては横ナデ調整である。胎土には微細な砂粒を多く含み、やや粗い。焼成はやや不良で色調は淡褐色、口径11.8cmである。７は底部が貼り付け高台、バチ形に開くが脚端部を欠く。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。器面は磨滅し、調整は不明。胎土には若干の砂粒を含むが精良、焼成不良で、色調は淡黄褐色、口径15.6cm、復原器高6.0cmである。

石製風字硯（Fig. 31－8）

粘板岩様の堆積岩が利用されている。海部の壁にあたる部分の破片。全体に良く研磨されていて、上面に軒平瓦様の文様が彫り込まれる。文様は縁どりした内側に、珠文７個を浮彫りにしているが、２個は剝離している。また、珠文の頂部にはきわめて浅い線刻で渦巻文様が施されている。

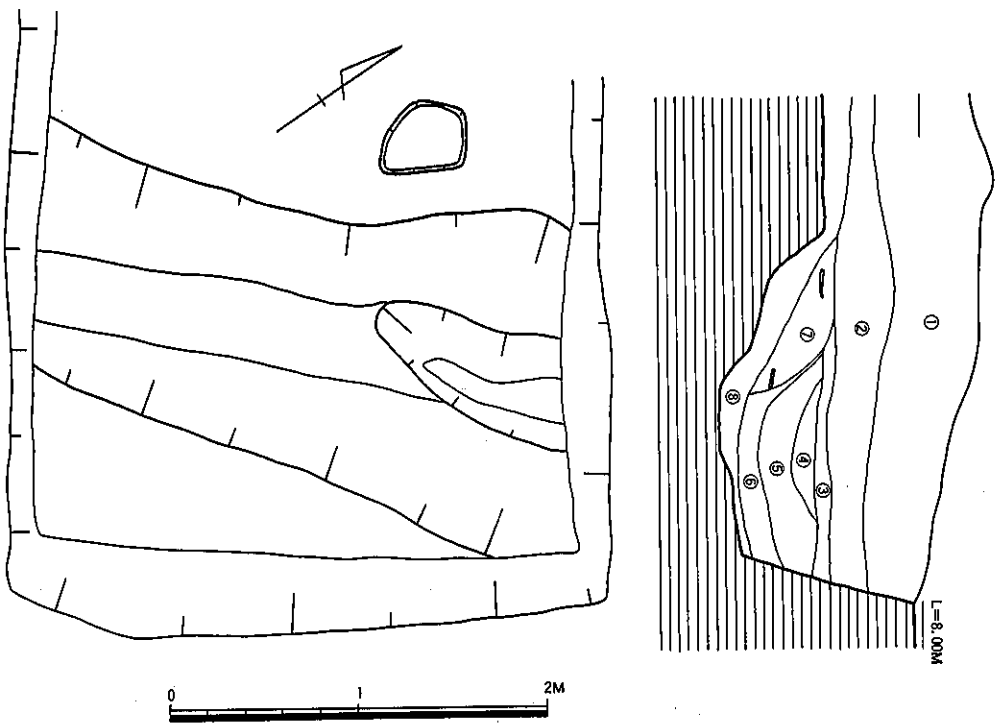


Fig. 32　SD－07 実測図

(8) SD－07

a．遺構

Ⅱ区の調査区の中央部に検出した溝である。溝幅1､2～1､8 m、深さ25～50cm、断面U字形をなす。東にむかって順次深さをましている。主軸方向は S －98.5°－E をとる。調査区がせまいために長さは約2､4 mを確認したにとどまるが、 SB－11, 15, 16, SD－06 の方向とほぼ一致することは注意される。

SD－07 の部分の土層断面は、第1層、地山の頁岩風化土を含んだ赤褐色粘質土層、厚さ40～60cm、江戸時代の整地層。第2層、暗茶褐色粘質土層で、鴻臚館時代の遺物を含む。第3層以下が SD－07 の埋土である。第3層、茶褐色粘土層。第4層、黄褐色粘質土層。第4層、頁岩風化土の粒子を含んだ茶褐色粘土層。第6層、明褐色粘質土層。第7層、頁岩風化土の粒子を多量に含む黄褐色粘土層となっている。

この溝から出土する遺物はきわめて少ない。

b．出土遺物

量的に少なく、瓦類、青磁器類が若干あるが、いずれも小破片である。また、鴟尾かと思われる破片が1点出土している。

(9) SD－08，10

a．遺構 (Fig 33)

Ⅱ区調査区の北端近くに検出した溝状の遺構である。遺構が非常に大規模であるのに対し、発掘調査区がせまいために、詳細を明らかにすることは困難であるが、検出した各所の所見からすれば、東西溝と南北溝の接点、すなわちコーナー部分にあたっているのではないかと推測することができる。溝底にコーナーが検出されていることも、その傍証となろう。ただし、大規模な土坑である可能性もある。将来の調査で確認できるまでは溝として記述を進めていくことにする。

調査区内で検出した東西溝 (SD－08) の長さは約3 m、南北溝 (SD－10) の長さは約15mである。発掘区内の所見から復原すれば、東西溝 (SD－08) は、溝幅が11m前後、深さ1.7m断面形は浅いV字形の大溝になる。南北溝 (SD－10) は溝幅が8 m前後、深さ1.7m、断面形は SD－08 同様に浅いV字形をなすと考えられる。SD－08 の周は北側で頁岩の岩盤、南側では、筑紫館、鴻臚館に関る整地層となっている。SD－10 は西側の周部は不明であるが、東側は SD－08 同様に整地層となっている。SD－08 の南側、SD－10 東側の整地層は、さらに南側に続き、SB－11 の落ち込み部分まで存在している。このことは、SD－08 と SB－11 の間に小さな谷が存在していたことを証明するものである。筑紫館、鴻臚館の建設以前、この地が谷の入り組んだ複雑な地形をしていたことを知ると同時に、筑紫館・鴻臚館の造営に伴い、大規模な

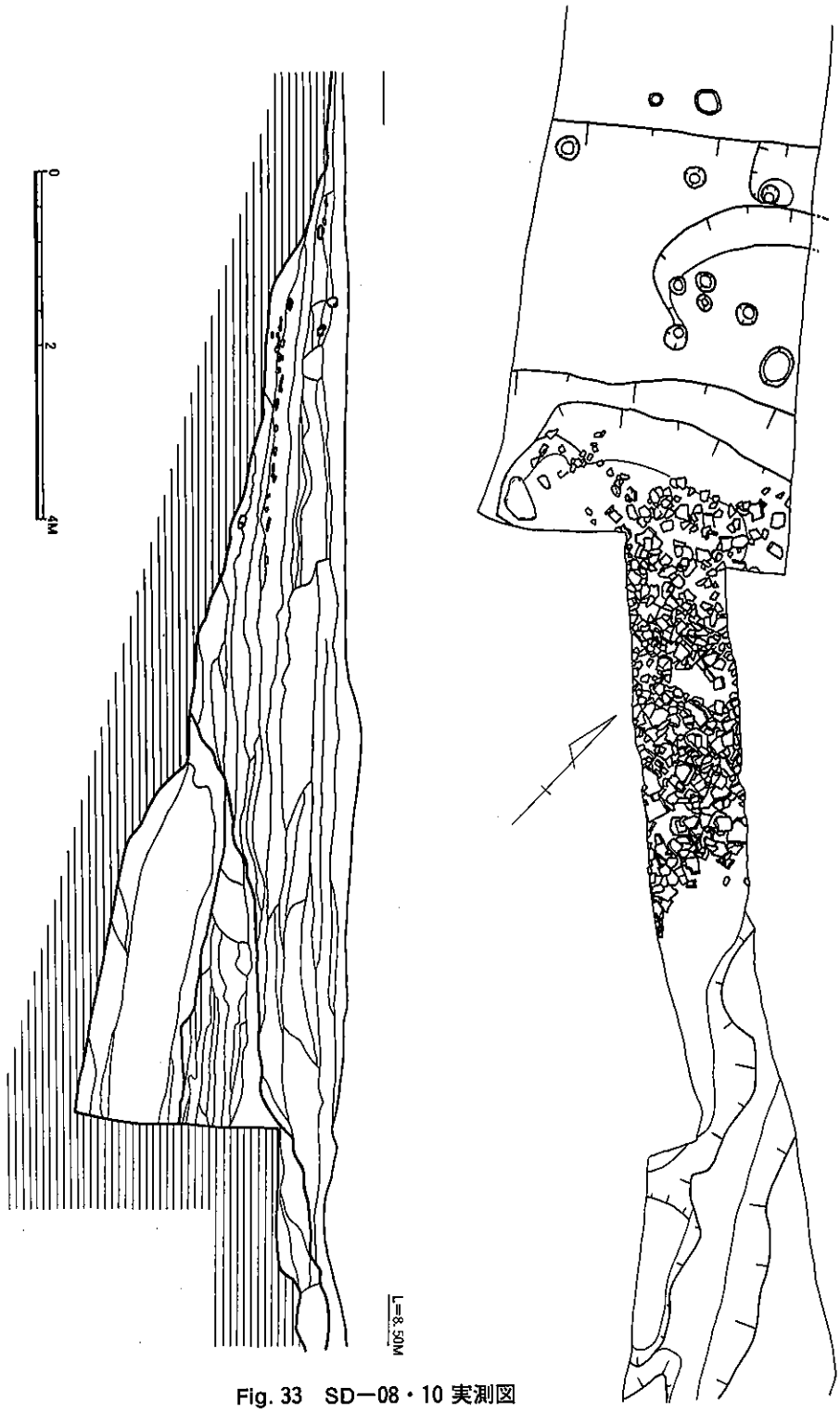


Fig. 33　SD－08・10 実測図

造成工事が行なわれたことを知ることができる。

SD－08 の東側断面の土層によって、この谷部の造成と他の遺構との関係をみてみよう。土層は大きく三大別できる。下層は灰褐色粘土質土層を主体とした谷部に流入した自然堆積層である。厚さ約１ｍあり、８層に分層できる。下より、第51層、黄褐色粘質土層、第50層、暗褐色粘質土層、第49層、灰色がかった粘性の強い暗褐色粘土層、第48層、黄褐色粘質土層、第47層、49層と同一粘土層、第46層、粘性の強い明茶褐色粘質土層、第45層、淡褐色粘質土層、第44層、黄茶褐色粘質土層となっている。これらの土層中からは、六世紀中頃から後半にかけての須恵器が出土する。筑紫館・鴻臚館造営以前に、後期古墳の築造あるいは関連の生活遺構等があったことが推測される。中層は筑紫館・鴻臚館造営に伴う整地層である。厚さ１ｍ前後、谷中央部にむかって順次厚くなり、厚い所では数ｍ以上になると考えられる。岩盤の風化土を主体とし、版築状に固められている。20層に分層できる。第43層、ピンクの粘土粒を含んだ灰色がかった淡赤褐色粘質土層、第42層、赤褐色粘土層、第41層、明茶褐色粘質土層、第40層、褐色の強い赤褐色粘土層、第39層、赤褐色粘質土層、第38層、やや灰色がかった赤褐色粘質土層、第37層、やや赤の強い赤褐色粘土層、第36層、明赤褐色粘土層、第35層、茶色がかった赤褐色粘土層、第34層、白、赤色粘土粒を含んだ赤褐色粘土層、第33層、灰色がかった赤褐色粘土層、第32層、赤褐色粘土層、第31層、粘性の強い淡赤褐色粘土層、第30層、赤・白色粘土粒を含む淡赤褐色粘土層、第29層、黄赤色土層、第28層、白色粘土粒を含む淡赤褐色粘質土層、第27層、灰褐色粘質土層、第26層、淡褐色粘質土層、第25層、茶褐色粘質土層、第24層、茶褐色粘質土層となっている。上層は SD－08 の埋土となっている。埋土はいずれも流れ込みによる自然堆積土である。29層に分けることができる。第23層、炭化物、白色粘土粒を含む淡赤褐色粘質土層、第22層、黄茶色粘質土層、第22層、炭化物、白色粘土粒を含む淡赤褐色粘質土層、第23層と同様である。第20層、暗褐色粘質土層、第19層、白色粘土粒を含む黄褐色粘土層、第18層、黄褐色粘質土層、第17層、赤褐色粘土粒を含む暗褐色粘土層、第16層、炭化物を含む黒褐色粘質土層、第15層、黄茶色粘質土層、第14層、明灰褐色粘質土層、第13層、やや砂を含む明灰褐色粘質土層、第12層、明灰褐色粘質土層、混入物が少ない。第11層、淡褐色粘質土層、第10層、淡赤褐色粘質土層、第９層、褐色粘質土層、第８層、灰を含む灰褐色粘質土層、第７層、灰褐色粘土層、第６層、暗茶褐色粘質土層、第５層、明灰褐色粘質土層、第４層、暗茶褐色粘質土層、第３層、灰褐色粘質土層、第２層、炭化物を含む灰褐色粘質土層、第１層、灰褐色粘質土層、第０層、茶褐色粘質土層、第－１層、暗茶褐色粘質土層、第－２層、白色粘土粒を含む淡赤褐色粘質土層、第－３層、炭を含む茶褐色粘質土層、第－４層、やや赤味をおびた茶褐色粘質土層、第－５層、褐色粘質土層となっている。溝の埋土は基本的には四大別できる。上層には多量の瓦類を含み、中層（第12層）に無遺物層の間層をはさむ。下層（第13層）に再

び多量の瓦類を含み、最下層（第14～第23層）には瓦類を含まず、七世紀代の遺物を包含している。遺構検出面より上層は江戸時代遺構の攪乱層となり約１ｍの堆積がある。

ｂ．出土遺物

多量の瓦類、青磁器、白磁器、須恵器、土師器、新羅陶器等がある。

青磁器（Fig. 33－1，7～9）

椀、合子蓋、広口壺、盤口壺等の器種があるが、椀はいずれも小破片で図示できない。

盤口壺(1)

頸部から口縁部にかけての破片、頸部と体部の境はしまり、体部は肩が張るとみられる。頸部から肩にかけて相対する二ヶ所に縦耳がつくとみられる。頸部は外反しながらたちあがる。口縁部はいったん横に開き、２cmいったところで強く屈曲し直立する。口縁端部は平坦に仕上げる。内外面は横ナデ調整である。外面と頸部の一部に施釉されるが、釉の剝落が著しく、本来の色調は不明確、黄味の強いオリーブ色で、表面に褐色の斑点が多量認められる。胎土は灰色で、多量の黒色粒子と砂粒を混入し粗い。焼成は良好である。口径14.1cmである。

合子蓋（７）

天井部は丸味をもち、天井部と口縁の境に浅い沈線をめぐらし、口縁部は強く屈曲し、下方に垂直にのびる。口縁端は肥厚し、平坦に仕上げられている。釉はわずかに緑がかった黄白色で全面に施釉され、口縁部上端からやや内側の部分の釉をかきとっている。胎土は黄白色、少量の砂粒を混入しているが、精良、焼成はやや不良である。口径14.0cmである。

広口壺（８，９）

８は肩が張り口縁部はくの字形になり外に開く。口縁端部は丸くおさめている。体部外面から内面にかけては横ナデ調整。体部内面にはロクロ痕が残る。釉は体部内外面にかけられているが、剝落が著しく不明確である。胎土は淡褐色で精良。焼成は不良。口径18.0cm、９は８と同様の器形をなすが、８に比べ肩が張らず、丸味をもっている。口縁端部はわずかに上方にはねあがる。肩部には横耳がつくが、双耳壺になるか四耳壺になるかはわからない。体部外面から口縁部内面にかけては横ナデ調整。内面下半部にはロクロ痕が残る。内外面には白味がかった黄褐色釉をかける。胎土は黄白色で精良。焼成不良である。口径16.5cm。

白磁器（Fig. 34-２，10）

Ⅰ－２ａ類（２，10）

ほぼ同形同大の椀２個体がある。高台外面は垂直に削り取り、内側の削りは浅い。高台端は平坦にする。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部はわずかに内湾気味で口縁端は折りまげて肥厚させ幅広の玉縁を形成している。見込には沈線一条をめぐらす。体部内外は横ナデ調整、体部下半から内面にかけてやや黄味がかった淡青白色の釉をかける。底部付近は露

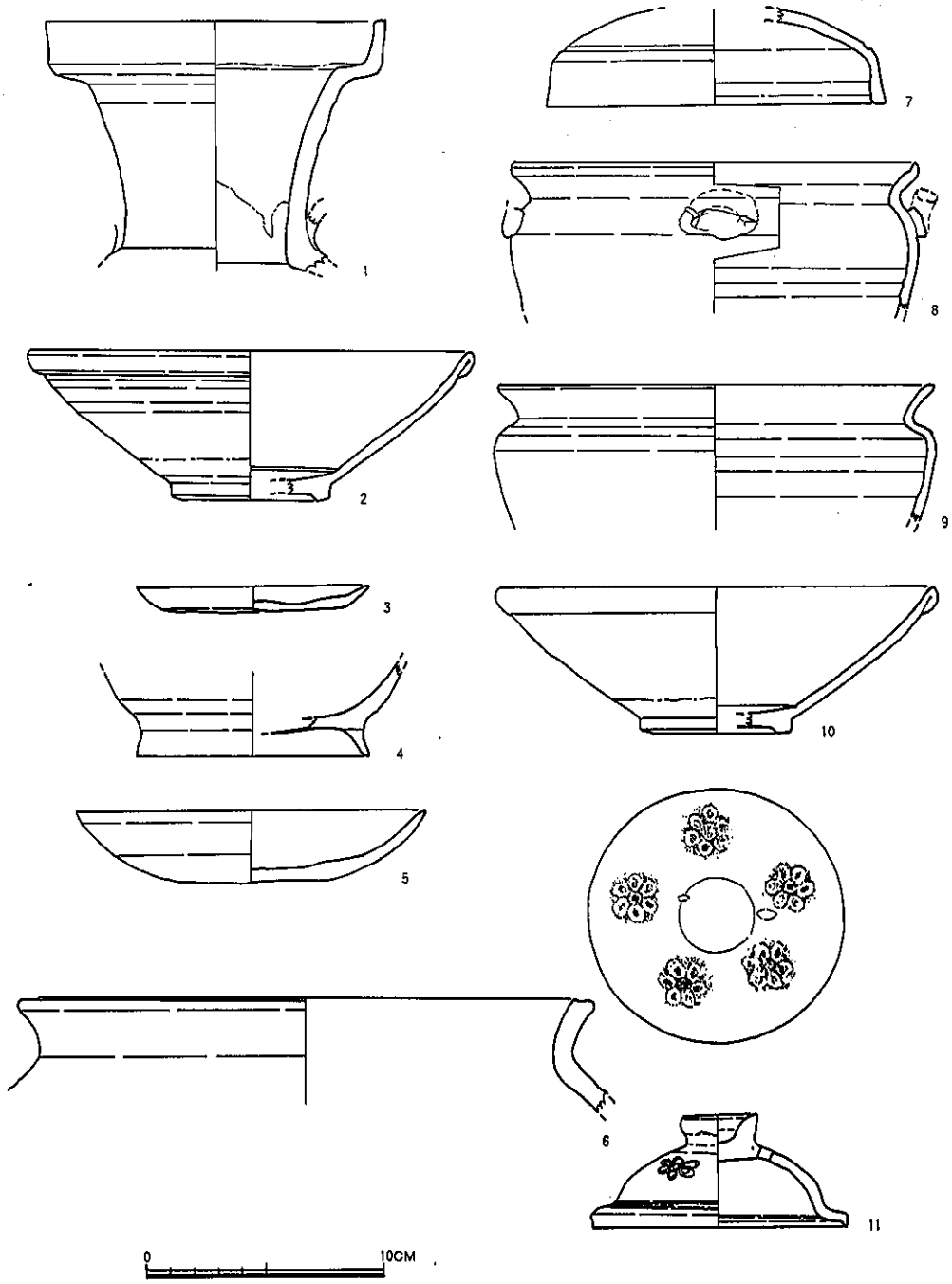


Fig. 34　SD−08 出土遺物実測図 I

胎のままである。胎土は淡白色で精良。焼成は良好である。2は口径18.8cm、器高6.2cm、10は口径18.4cm、器高6.1cmである。

新羅陶器（Fig. 34－11）

ほぼ完形の蓋一個体がある。天井中央部に環状のつまみがつく。つまみの端部はやや肥厚させ、丸くおさめている。天井部は丸味をもって下り、口縁部は大きく屈曲し外側へのび、端部はくちばし状に下方にのび、端部は尖る。天井部には中心に1個、その周囲に6個の竹管文で花文様をつくり、それを5個等間隔で施している。また、つまみの直下に相対して焼成前の穿孔があり、孔は米形をしている。体部内外面は横ナデ調整、天井部に自然釉がかかる。胎土は精良。焼成良好である。口径10.3cm、器高4.4cm、つまみ径3.2cmと小型である。長頸壺の蓋と考えられる。

土師器（Fig. 34－3～5）

小皿、杯、椀がある。3は小皿、底部ヘラ切り離し、体部は直線的にのび、端部は丸くおさめる。口径9.6cm、器高1.1cm、5は杯、底部は切り離し後、上からナデ調整を加えている。体部は内湾しながら外に開く。口縁端部は丸くおさめる。口径14.4cm、器高3.0cm、4は椀、高台は、貼り付けで細く高い、やや外に開く。体部は内湾気味にたちあがる。底部径9.7cmである。

須恵器（Fig. 34－6，Fig. 35，36）

杯蓋、杯、高杯、盤、甕があり、量的には多い。

蓋（Fig. 35－1～6，13～16）

1～6は杯蓋、13～16は盤の蓋と考えられる。1は天井部はヘラ削り、天井部と体部の境は不明瞭、体部はゆるやかに下方にくだる、口縁端部は丸くおさめ、内側のかえりは低く内傾している。天井部にはつまみがつくが失う。天井部はヘラ削り、体部外面から内面にかけては横ナデ調整、口径14.8cm、2は天井部は平坦、体部との境は不明瞭で、体部は丸味をもって下り、口縁部で若干外側にひらき、口縁端部がわずかに下方にのびる。端部は尖り気味に丸くおさめる。天井部はヘラ削り、体部外面から内面にかけては横ナデ調整である。口径15.0cm、3～6は口縁部がわずかに下方に屈曲し、端部は3、5が丸く、6が尖り気味に屈曲する。天井部はヘラ削り調整、体部外面から内面にかけては横ナデ調整、4には擬宝珠形のつまみをつける。全体に扁平である。口径は3が14.6cm、5が14.0cm、6が14.8cm、13～16は扁平、天井部と体部の境は不明瞭、口縁はわずかに下方にのび、端部は丸くおさめる。天井部の1/2がヘラ削り調整、他は横ナデ調整である。天井部には擬宝珠形のつまみをつけるが、現存するのは16のみである。口径は13が19.0cm、14が18.3cmである。

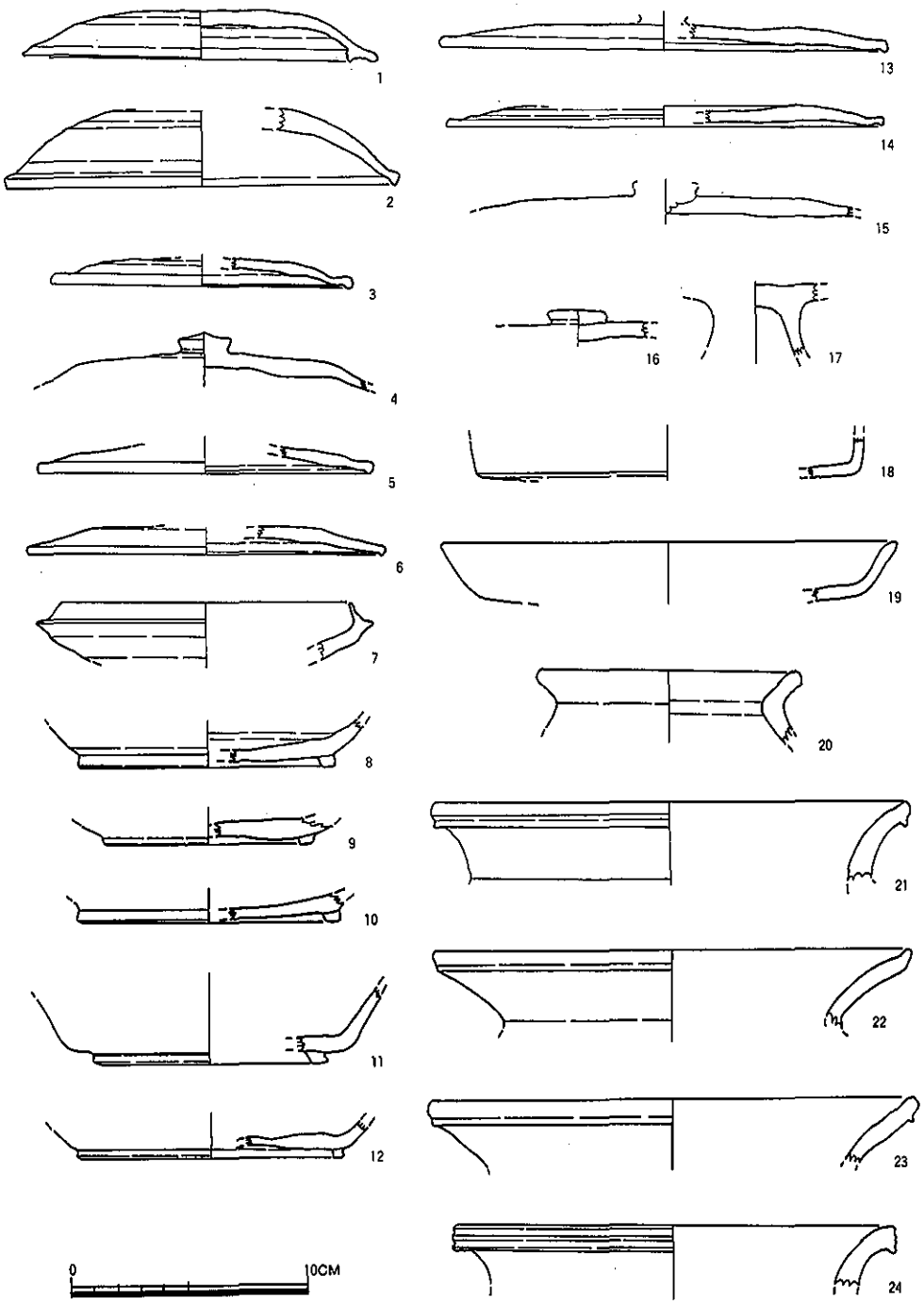


Fig. 35　SD−08 出土遺物実測図Ⅱ

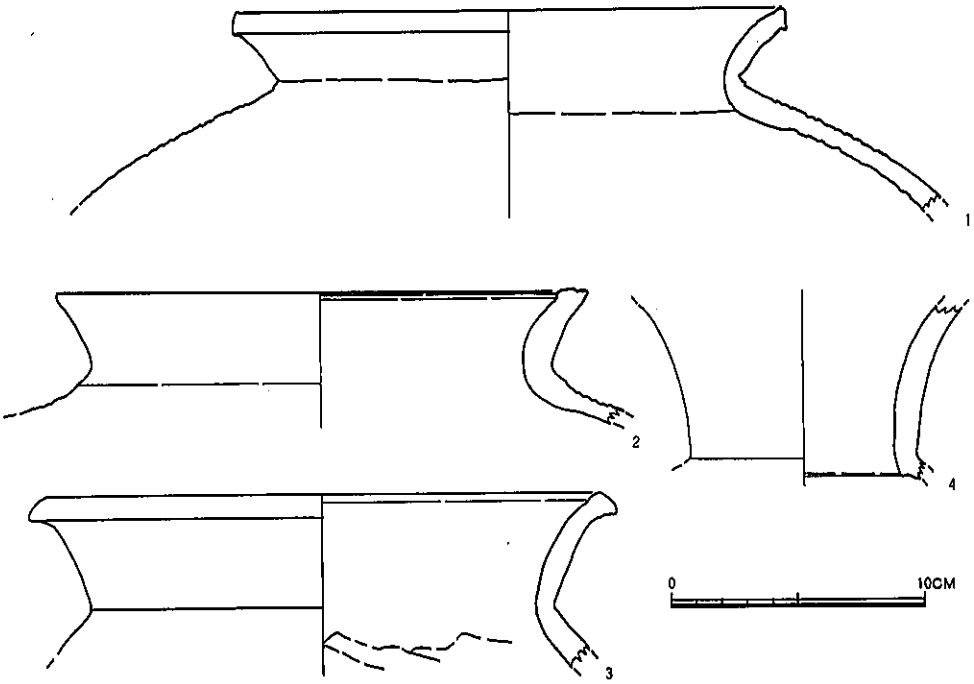


Fig. 36　SD−08 出土遺物実測図Ⅲ

杯（Fig. 35－7～12）

7は蓋受けのたちあがりをもつ。受部は外に張り平坦、蓋受けのたちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に丸くおさめる。体部内外面は横ナデ調整である。口径12.2cm、受部径14.0cm、8～12は貼り付け高台をもつ杯、8～10、12は断面方形の高台、体部は高台から外傾しながらたちあがる。11は底部内側に高台がつき、高台端部はわずかに外にはねる。体部は底部から強く屈曲し、外傾しながら直線的にたちあがる。杯はいずれも口縁部を欠き、口縁部形態は明らかでない。外底部はヘラ削り、体部外面から内面にかけてはナデ調整である。高台径は8が11.0cm、9が8.8cm、10が11.0cm、11が9.8cm、12が11.0cmである。

高杯（Fig. 35－17）

脚部破片、脚部は外反しながら下方にのびるが高いものではない。杯部は欠損するために形態不明。脚部内外面は横ナデ調整である。脚内外には灰かぶりがあるので、伏せ焼きをしたとみられる。

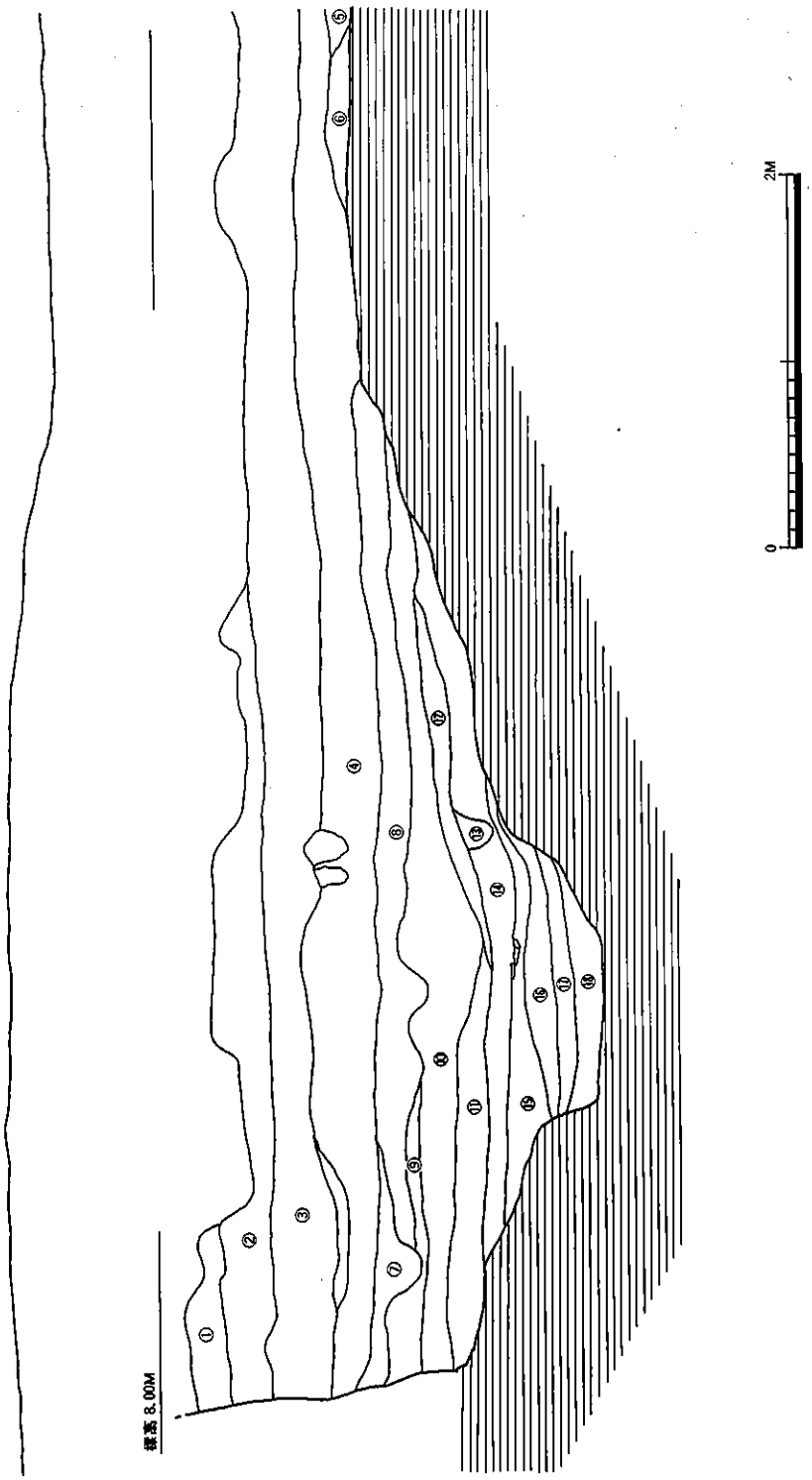


Fig. 37　SD—09 土層断面実測図

盤（Fig. 35－18, 19）

18は盤とするには特異な形態をしている。底部から大きく屈曲し、体部は垂直にたちあがる。口縁部形態不明。底部は回転ヘラ削り調整。底部径16.0cm、19は底部はヘラ削りで、体部は外傾しながら直線的にたちあがり、端部は丸くおさめる。体部内外面は横ナデ調整。口径19.0cmである。

甕（Fig. 35－20～24, Fig. 36－１～３）

１は小型、他は中型の甕口縁部である。20は口縁はくの字形をなし、端部は丸くおさめている。口径11.0cm、21～24、１～３はいずれも頸部から屈曲し、くの字形の口縁で、外反気味にたちあがる。21、22は口縁直下に断面三角形の突線一条をめぐらす。24は口縁端に２条の沈線をめぐらす。１、２は体部外面に平行タタキ、内面は同心半円の当具痕が残る。口径は21が20.0cm、22が20.0cm、23が20.4cm、24が18.5cm、１が21.7cm、２が20.8cm、３が23.0cmである。

壺（Fig. 36－４）

壺の頸部破片、頸は外反しながらたちあがり、高い。内外面は横ナデ調整である。

(10). SD－09

a. 遺構（Fig. 37）

Ⅰ区調査区の中央部に検出した溝状の遺構である。調査区が幅２ｍと狭く、かつ遺構が深いために詳細は明らかでない。現状では溝幅９ｍ以上、南から北に向って階段状に三段にわたって掘り込まれ、深さは最も深い所で２ｍに達している。その性格等については何であるかは明らかでなく、将来の本格調査にゆだねねばならない。

Fig. 37に土層断面を示した。遺構は谷部の整地層に切り込まれたものである。上より、第１層、江戸時代以降の攪乱層、厚さ1.0～1.2m、瓦の小片等を若干含む。第２層、茶褐色砂質土、厚さ20cm、第３層、砂粒を含む茶褐色粘質土層、厚さ10～30cm、第２、３層は江戸時代の整地層とみられる。第４層、褐色粘質土層、厚さ20～40cm、第５層、暗茶褐色砂質土、レンズ状に部分的に堆積する。第６層、茶褐色粘質土層、第７層、明茶褐色粘土層、第８層、白色粘土粒を含む赤褐色粘土層、第９層、第８層と同様である。第７～９層は段落ち際にレンズ状に堆積した土層である。第10層、赤色粘土粒を含む赤褐色土層、第11層、炭化物を含む暗茶褐色土層、第12層、白色粘土粒を含む赤褐色土層、第13層、白色粘土粒を含む赤色粘土層、第14層、赤色粘土層、第15層、炭化物、瓦を含む焼土層、第16層、暗赤褐色粘土層、第17層、茶褐色粘質土層、第18層、明褐色土層、第19層、茶褐色粘質土層、第20層、赤褐色粘質土層、第10層以下は厚さ10～20cm、溝内埋土は流れ込みによる自然堆積土層である。

Fig. 38　SB－11 実測図

ｂ．出土遺物

瓦類等若干あるが、いずれも小破のみである。発掘面積もせまく、今後の調査に期待したいと思う。

(11)．SB－11

ａ．遺構（Fig. 38）

Ⅰ区調査区の最も東側、バックスクリーンのすぐ西側７ｍに検出した遺構である。第三紀頁岩の地山を削り出した基壇状の遺構である。基壇と思われる部分は削平が著しく、また後世の攪乱によるピットが多数存在するが、礎石抜き穴等、明確に建物を示す遺構はない。段落ち部分はほぼ東西に直線的にとうる。調査区内で約６ｍを確認した。この段落ち部分より西側には、軒よりずり落ちたような状態で瓦が３ｍ幅で堆積している。段落ちの最も深い部分は、基壇と考えられる面より約50cmあり、断面Ｕ字形の溝状を呈している。基壇に伴う雨落ち溝と考えることもできるが、瓦が小さく割れているなど、判然としないところもある。

この遺構は断面図でも明らかなように、江戸時代の建物、兵舎（被服庫）の建物と重複関係にある。断面図をもとにその関係を説明する。まず、江戸時代の建物の建築に際して、削平され、後に新たな整地がおこなわれる。第１層、暗褐色の炭混じりの粘質土層、第２層、頁岩風化土のブロックを含んだ褐色粘質土層、第３層、頁岩風化土のブロックを含んだ橙赤色粘質土層は、この整地によって生じた土層である。その後、被服庫は江戸時代の建物を拡張するような状態で建築されている。第４層、炭混じりの暗褐色粘質土層に多量の奈良・平安時代の瓦が堆積している。先の削平で残った部分である。上からの攪乱はあまり見られず、遺物の混入もみられない。先に指摘したような溝状になっている。この第４層より下位は、第５層、暗赤褐色の粘質土層、第６層、地山の頁岩ブロックを含んだ暗橙赤色粘質土層、第７層、炭、地山ブロックを含んだ黄橙色粘質土層、第８層、焼土、炭を含んだ黄褐色粘質土層、第９層、頁岩風化土である地山である。第５層～７層は鴻臚館時代あるいは筑紫館時代の整地層である。若干の遺物が含まれるが、その時代を確定するには遺物量が少なく、他の遺物等との関連性や比較検討が必要である。調査区が狭く、遺構の性格を明確にでないが、ここでは一応建物基壇の一部としてみておきたい。もし基壇であるならば第４次調査で検出したSB－31、32に関連した北を限る基壇である可能性もある。第５次調査で検出した推定南門跡の基壇から北側約100ｍの地点にあたることも注目される。

ｂ．出土遺物

軒からずり落ちたような状態で堆積した多量の瓦類に混じって若干の青磁器、白磁器、陶器、イスラム陶器がある。瓦類は量的にきわめて多いが、奈良・平安時代のものが混じっている。

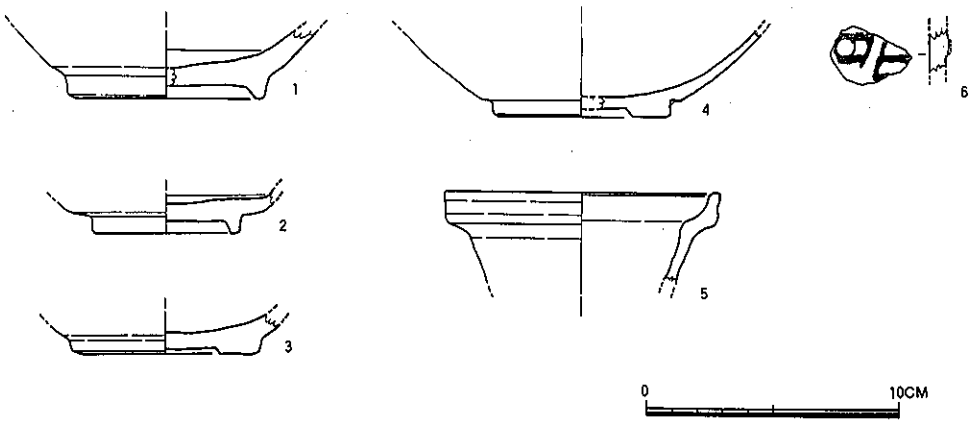


Fig. 39　SB－11 出土遺物実測図

出土遺物は6点を図示した。1、2は青磁器、3、4は白磁器、5は無釉陶器、6はイスラム陶器である。

1は碗、底部は削り出しの輪高台。外面はヘラ削り調整。見込に浅い段がつく。淡オリーブ色の釉を全面施釉する。施釉後、畳付の部分の釉をかきとっている。見込に細長い目跡が残るが数は不明。底径7.8cm。2は皿である。底部は削り出しの細い輪高台。体部は屈曲してたちあがるが大部を欠いている。オリーブ色の釉を全面に施釉し、畳付の部分は削り取る。見込に細長い目跡が4個残っているが数は不明。畳付にも同様の目跡が残る。底径5.9cm。

3、4は小さな玉縁をもつ椀の底部とみられる。蛇ノ目高台を有する。器面は内外共、丁寧な調整である。高台外面からは内面にかけて施釉され、畳付の部分は施釉後、ヘラで不定方向に削られている。3は黄白色釉で、釉下に化粧がけがみられる。底径7.4cm。4はオリーブ色をおびた白色透明釉。底径7.1cm。

5は盤口壺の口縁部とみられる。口縁部は直線的にたちあがる。胎土には多量の砂を含み、焼成は良好、外面は黒褐色、内面は灰褐色をなす。無釉の陶器である。復原は口径10.9cm。

6は3.0cm×2.5cmほどの小破片。大型壺の体部上半部にあたる。円形と粘土紐の貼り付け文様が残っている。胎土は白色、内外面に厚く青釉をかけるが、文様上面は剝離している。

(12)．SB－12

Ⅱ区調査区の中央よりやや東に片寄って、長方形になると考えられる大規模な掘り込み遺構の一角を確認した。埋土は地山である頁岩の風化土の互層で固められた可能性のあることや大規模であること、形状が長方形を類推させること等からして、建物の基礎である地下地業の可

能性があり、建物であるSBのNoを付した。しかし、掘り方内は将来の本調査を期して未調査であり、詳細は不明である。

平面形は東西が約８ｍ確認でき、それより東はSB－13とした掘り込み地業によって確認できない。南北は約６ｍ確認でき、延長は未調査区に延びている。この地下地業の表面には東端に原位置を移動している玄武岩の礎石（長さ1.4ｍ　幅1.1ｍ　厚さ0.3ｍ）１個が存在するが、礎石抜き穴等の古代の遺構は存在しない。他は近世以降の柱穴が10数個重なり、一部が、工事によって破壊されている。

(13)　SB－15

Ⅱ区の調査区の西端、バックスクリーンのすぐ東に検出した。SK－01の北側約2.2ｍに位置する。SB－16と重複関係にあり、SB－16に切られている。地山の頁岩に掘り込まれた幅0.75ｍ、深さ1.2ｍの布掘りの掘立柱遺構である。東側が工事によって破壊され、西側がバックスクリーンの下の未調査区に延びるために確認した長さはわずか4.5ｍである。底面に３ヶ所の柱痕跡が認められる。柱部分は幅1.1ｍにわたって約10cm掘りさげられ、その中央に柱をたてる。柱の大きさはその痕跡から径40cmの円形と考えられる。柱間は心心で2.1ｍ（７尺）である。布掘り掘り方内は、Ⅰ、白色の頁岩混入土、Ⅳ、頁岩混入の赤色～白色土、Ⅴ、頁

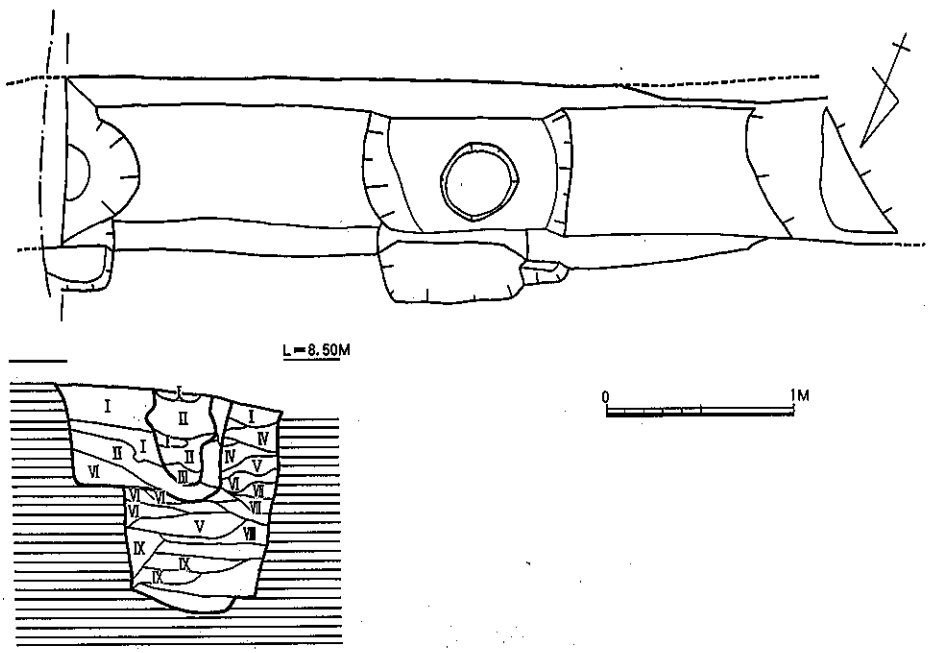


Fig. 40　SB－15・16・土層断面実測図

岩混入の赤色土、Ⅵ、暗赤色土、Ⅵ、頁岩混入の白色～赤色土、Ⅷ、赤白土がブロック状にはいる。Ⅸ、頁岩混入白色土を５～10cmの厚さで交互に版築状につき固めて埋めている。布掘りの主軸方向はＳ－98.5°－Ｅをとっている。

第４～７次調査で確認した柵列と考えられる布掘り遺構と軸線を同じくし、又は直交しており、これらの柵列に対応する北側の柵列と考えることもできる。先の概報では確認部分が短く、かつその延長線上に同様遺構が検出できないこと、規模、柱に差異が大きいことから建物跡とみるのが妥当と考えられるとしたが、改めて訂正しておきたい。布掘り延長部分は明確ではないが、SB－13 とした地業（建物に伴う地下地業と考えたが、この地業は谷部を埋めるものと考えた方が妥当である）にも一部確認できることからも柵列の一部と考えた方が良い。そうすればこの柵列は南北約60ｍ、東西約75ｍの方形区画をとることが推測される。

(14) SB－16

Ⅱ区調査区の西端、バックスクリーンのすぐ東に検出した掘立柱遺構である。SK－01 の北2.0ｍの所に位置する。SB－15 と重複関係にあり、SB－15の布掘り掘り方を切っているのでSB－15 より後出することは明らかである。ただし、布掘りの柱部分と SB－16 の柱掘り方がよく一致し、方向も一致していることから時間幅があまりないと考えられる。

SB－16 は柱穴掘り方２個を確認したにとどまる。これは SB－15 同様に東側が工事により破壊され、西側が未調査区のバックスクリーンの下に延びるためである。柱穴掘り方は一辺80cmの方形プランで、現存の深さは約55cmである。掘り方内には柱痕跡が確認でき、柱の大きさは径30cm前後と考えられる。柱痕内には、Ⅱ、褐色土、Ⅲ、炭化物混入の灰褐色土がつまっている。掘り方は頁岩の風化土で埋められている。柱間は心心で2.1ｍ（７尺）と SB－15 と変わらない。柱穴がどのような構造になるかは調査区がせまいため不明であるが、重複の仕方や、第７次調査の成果からすると布掘りの柵列を改築した柵列になると考えられる。

出土遺物がないため時期決定はできないが布掘り遺構より後出で礎石建物に先行する時期に比定されると考えられる。

第3章　おわりに

平和台野球場外野席スタンド改修工事に伴う試掘調査（第3次調査）は、これまで考古学的調査によって確認できなかった鴻臚館跡の存在を明らかにし、中山説を裏づけると共に、その残存状態が極めて良好であることを確認した。出土遺物もこれまで知られていたものをはるかに越え、重要な遺物が多量に存在することが判明したのである。その意義は大きい。

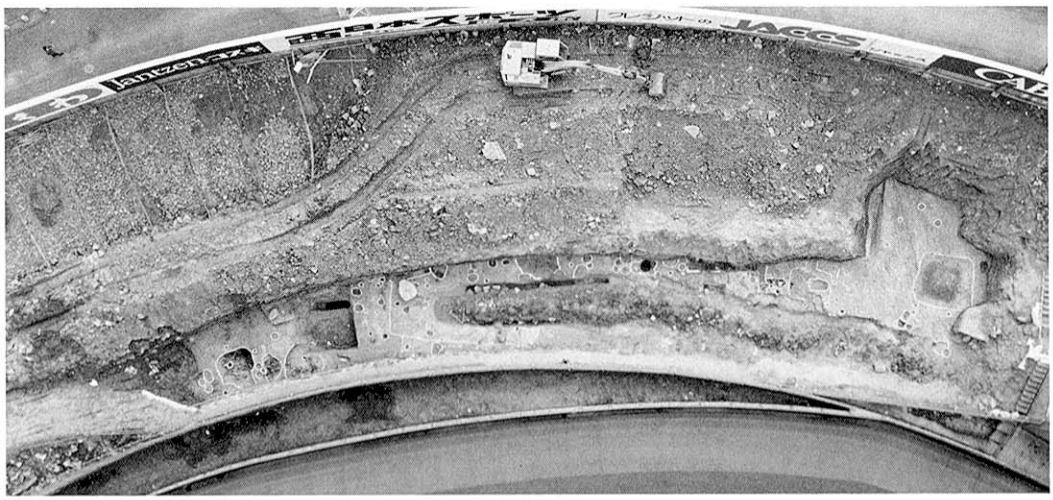
時を同じくして福岡アジア・太平洋博覧会「よかトピア」が開催されることとなり、そのテーマが、鴻臚館の機能と一致していることから、その歴史的原点として、鴻臚館の全容解明のための調査が継続されることになったのも第3次調査の成果からである。

第3次調査は、緊急性のもと時間的制約、予算的制約から、発掘調査を最小限にとどめたため、完掘した遺構は少ない。将来の本調査に精査を期したい。

本報告書では第3次調査で検出した古代の遺構と出土遺物を中心とした。そのために、江戸時代の福岡城関連の遺構、明治以降の陸軍歩兵第24連隊関連の遺構・遺物については割愛した。また、出土遺物についても、各遺構出土ごとに分類し、最後に現在おこなわれている分類との比較を試みるつもりであったが、果せなかった。各遺物の量的問題も含め、さらに、4次以降の調査で出土した遺物も含め、後続の報告書においてまとめたいと考えている。

図　版

PLATES



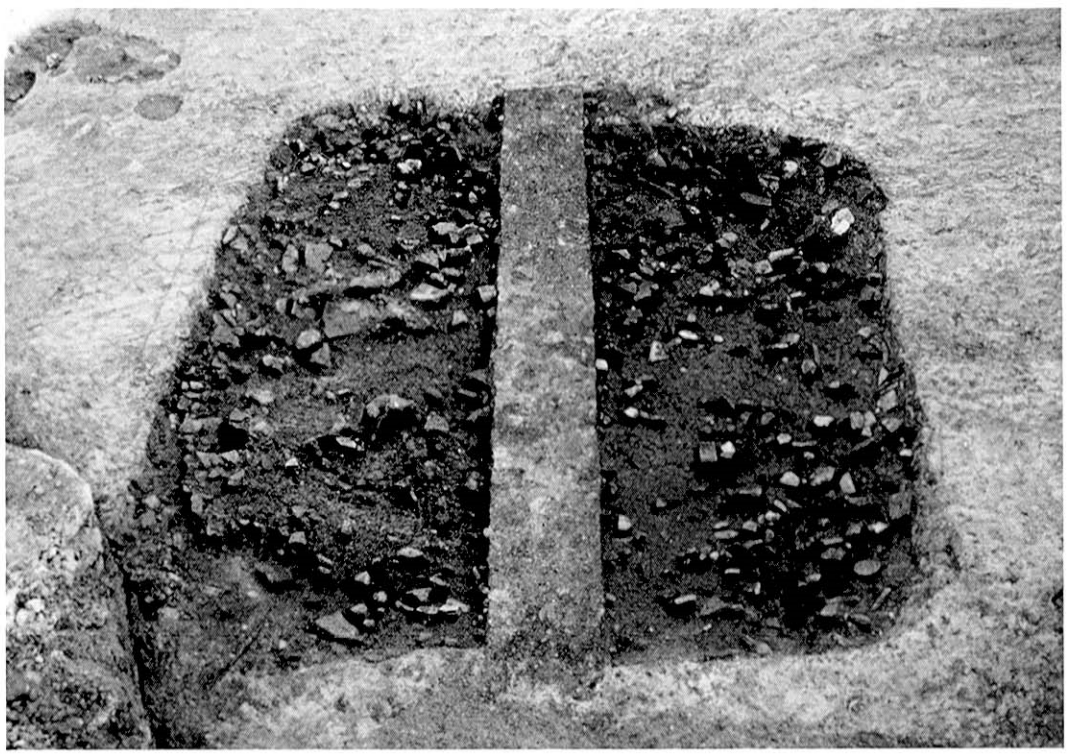
(1)　第３次調査Ⅰ区全景

(2)　SK-01・02（上空より）

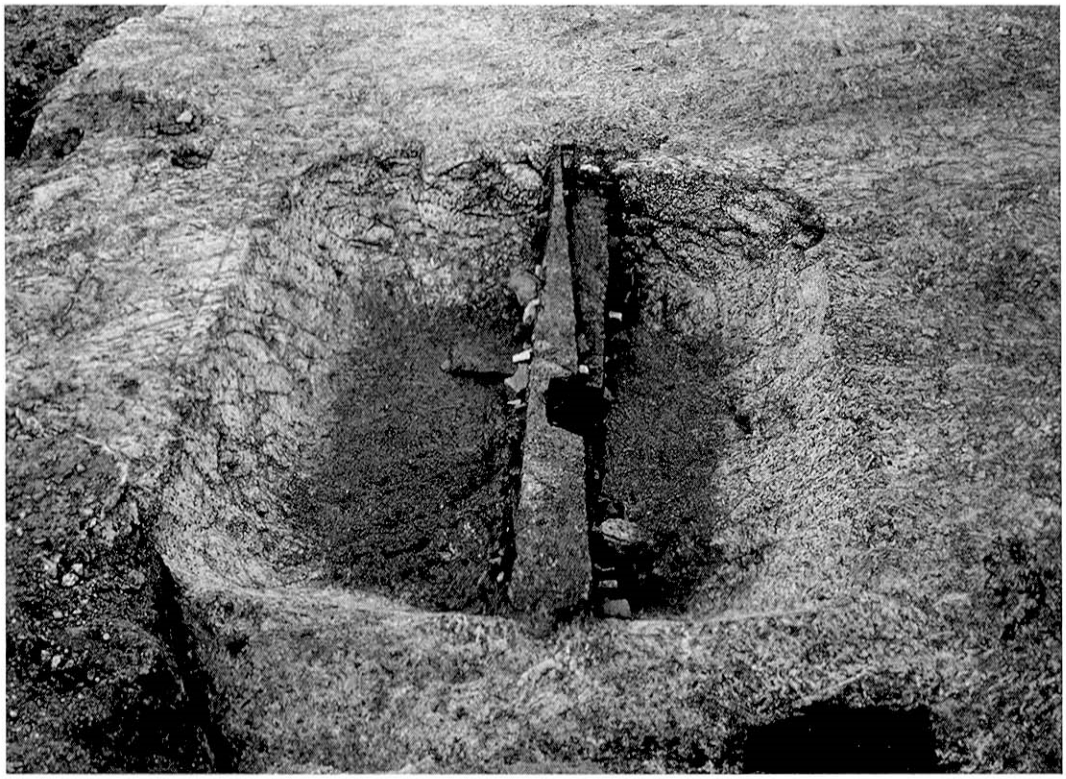
(1)　Ⅰ区東側（上空より）

(2)　Ⅱ区南端部（上空より）

(1)　SK-01 検出状況

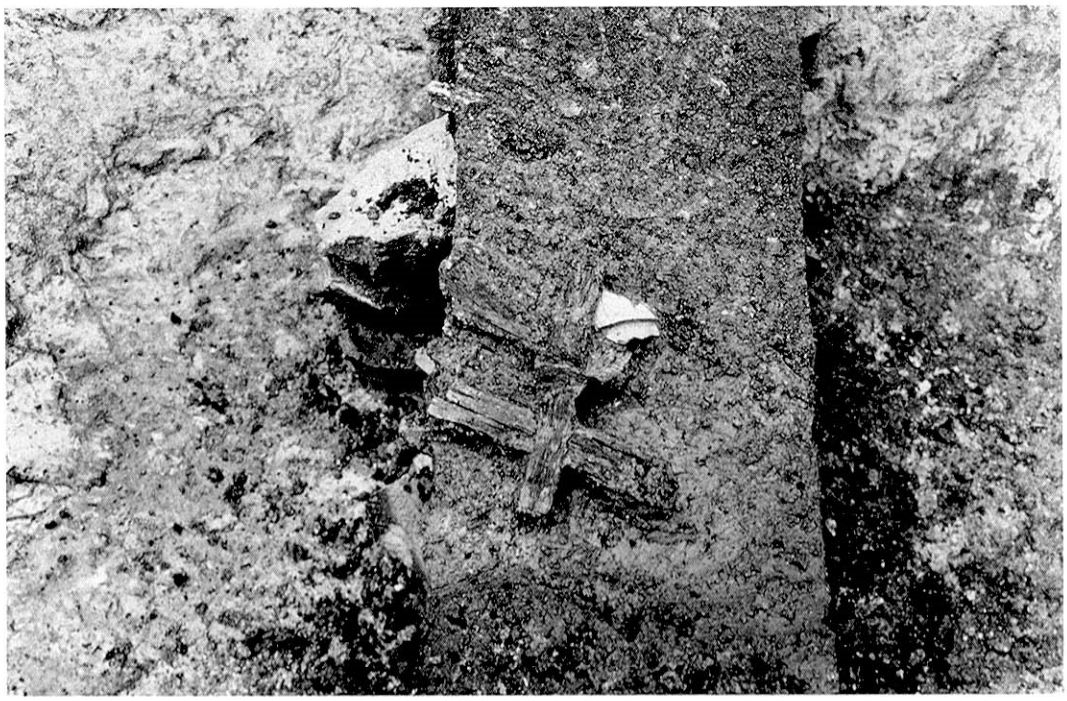


(2)　SK-01 遺物出土状況（上層）



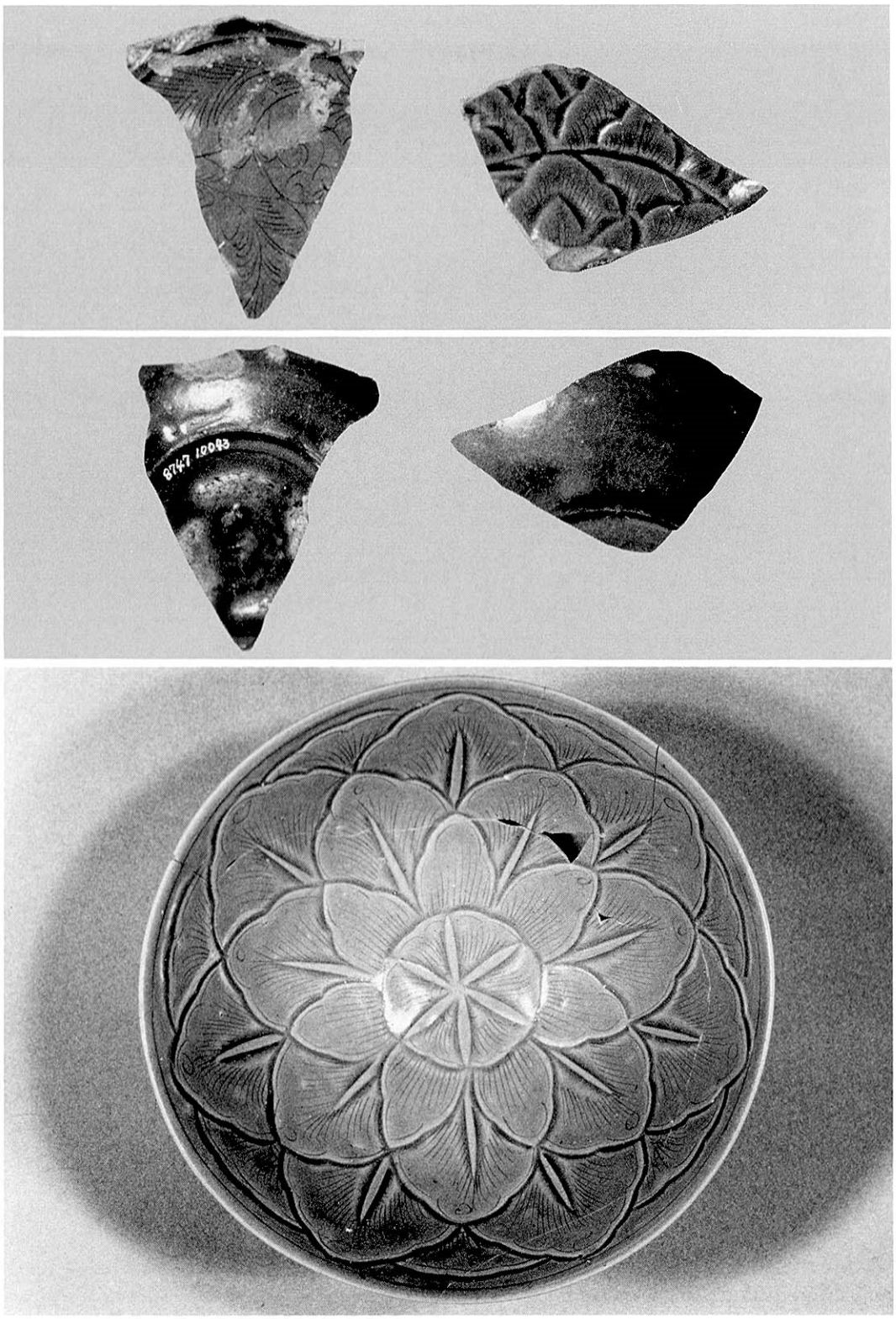
(1)　SK-01 中央セクションベルト

(2)　SK-01 中央断面土層と土坑の関係



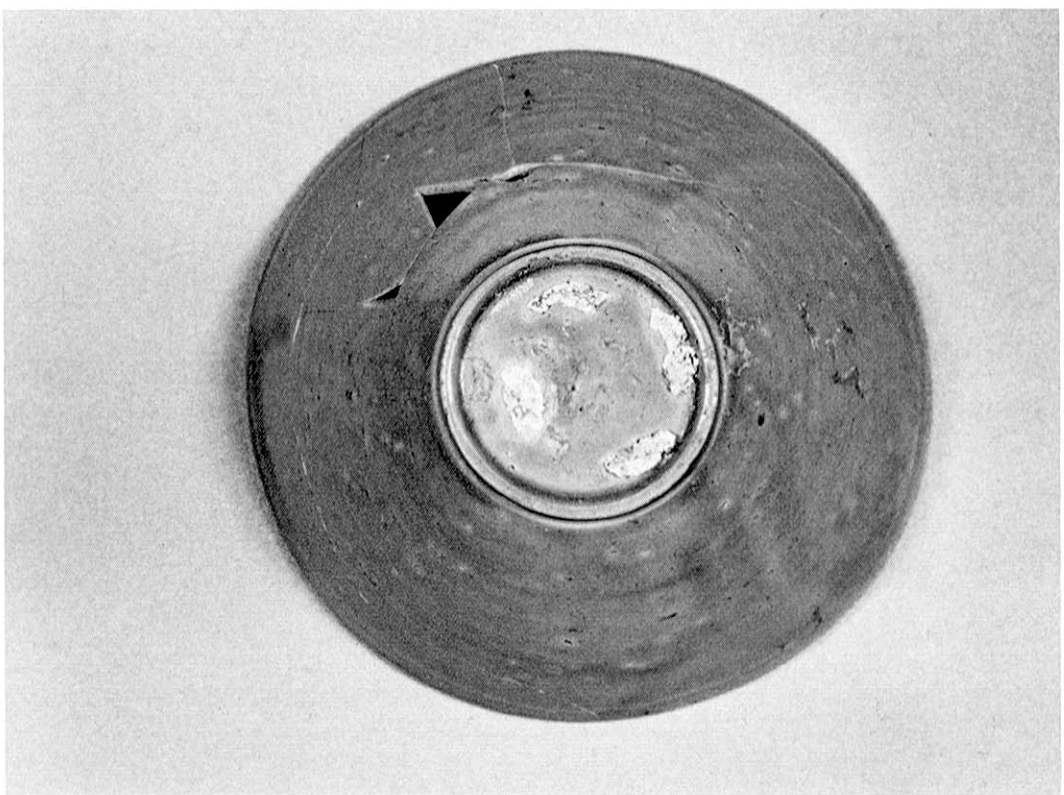
(1)　SK-01 セクションベルト板片出土状況

(2)　SK-01 発掘完了後



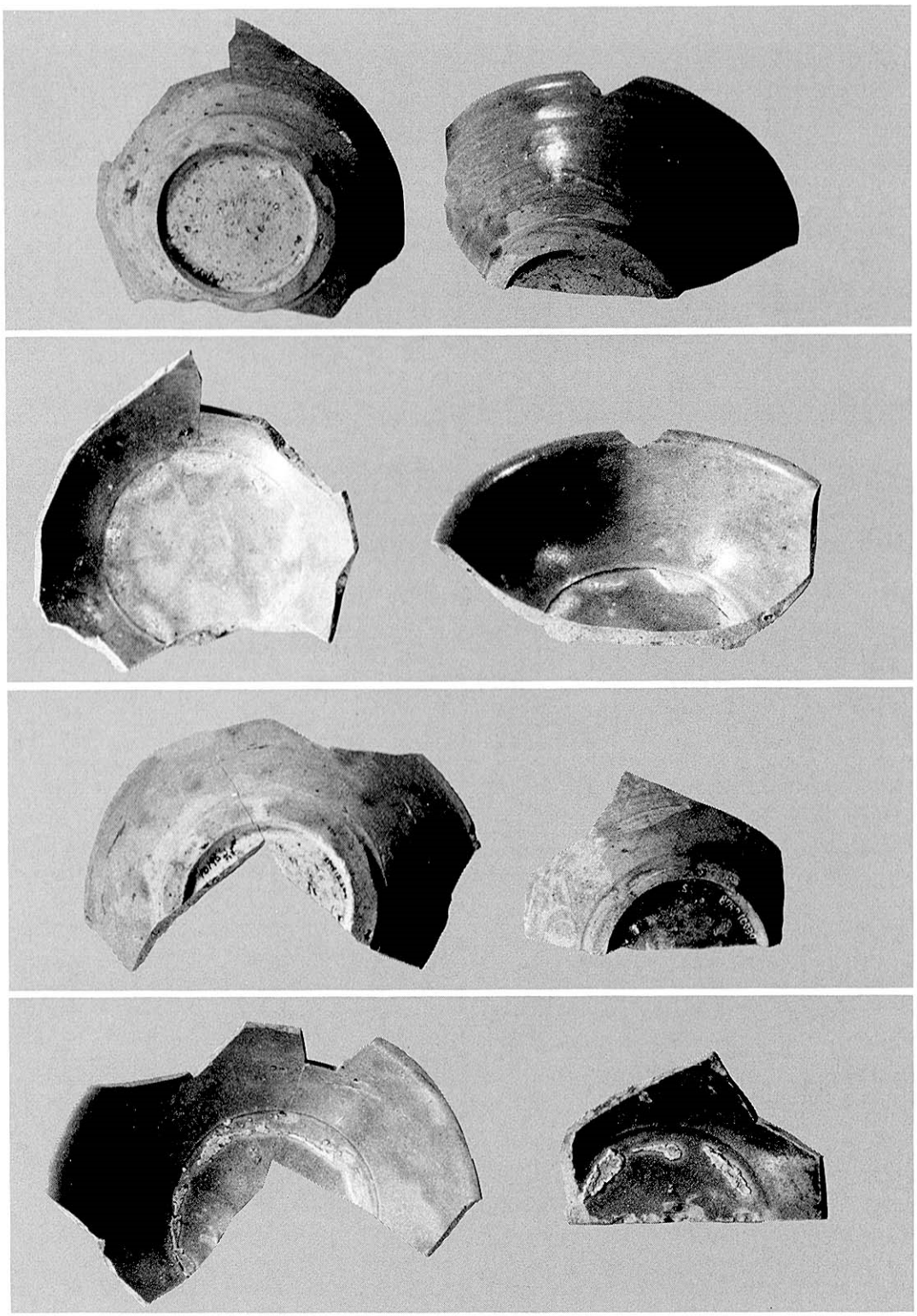
SK-01 出土青磁器Ⅰ

（上は毛彫文様のある皿、下は花文碗）

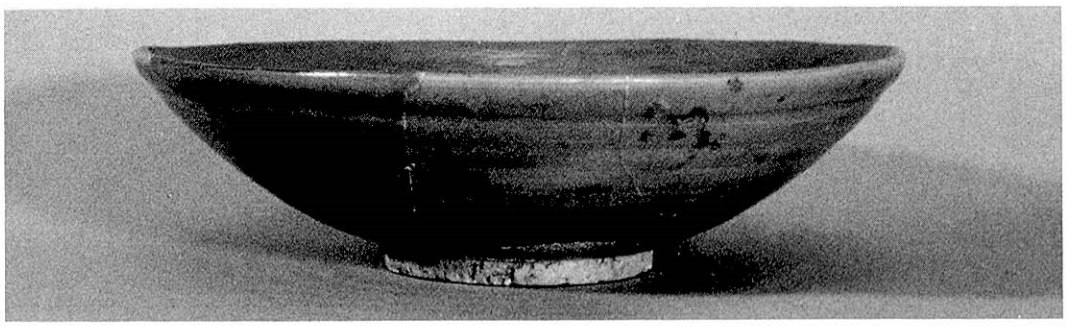


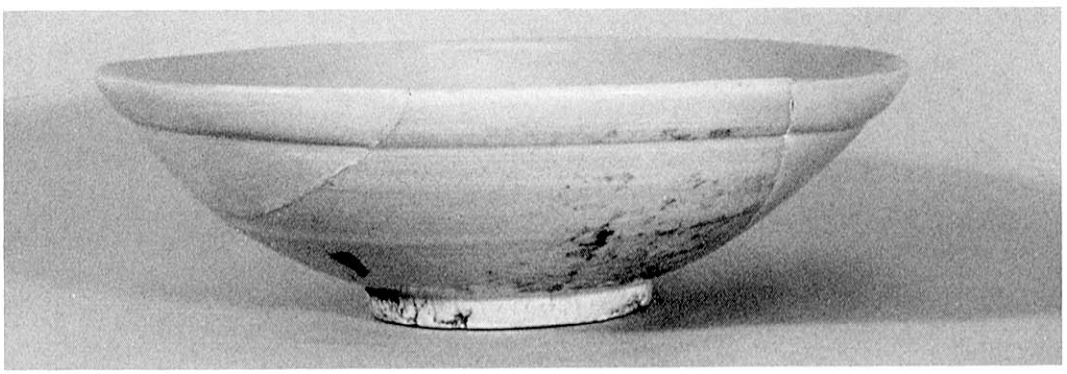
SK-01 出土青磁器Ⅱ

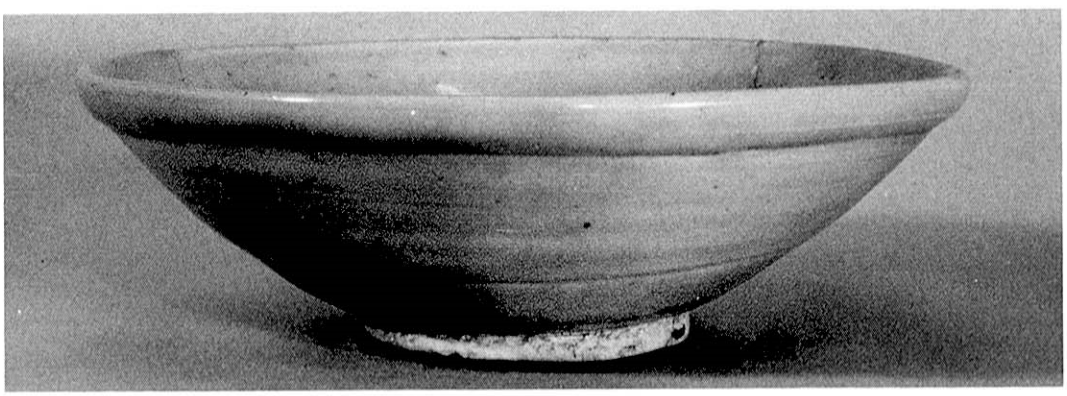
（花文様、横から（上）・底部（下））

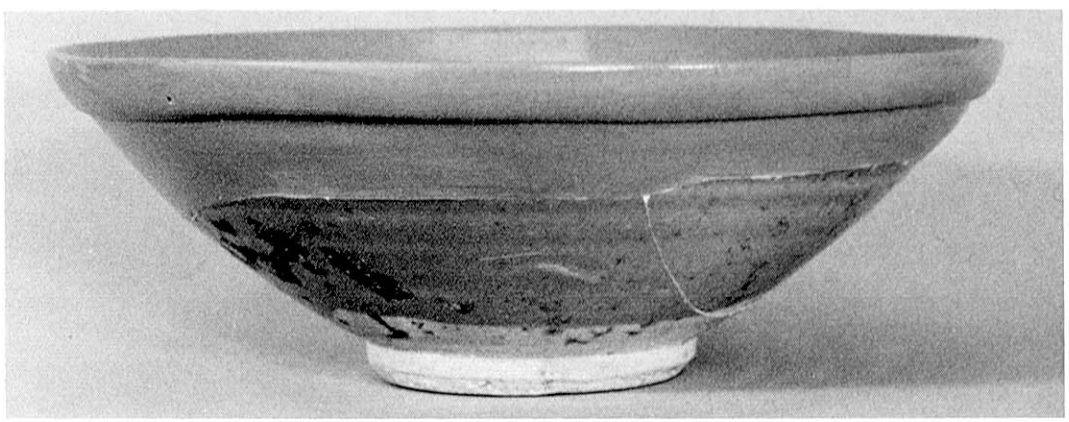


SK-01 出土青磁器Ⅲ

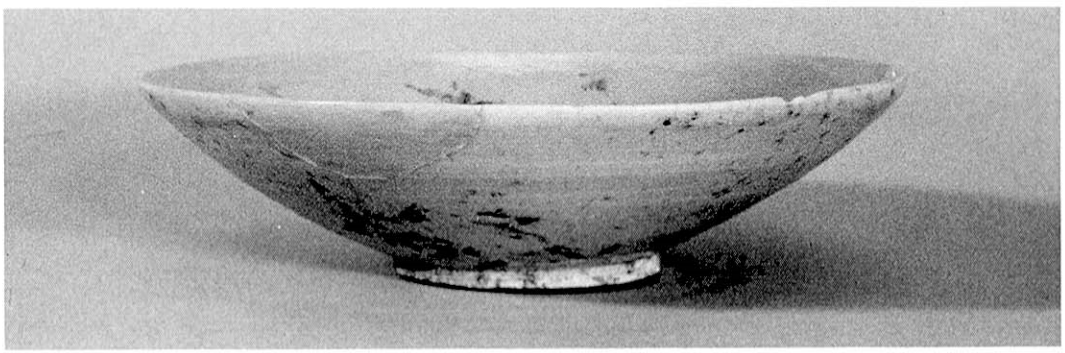


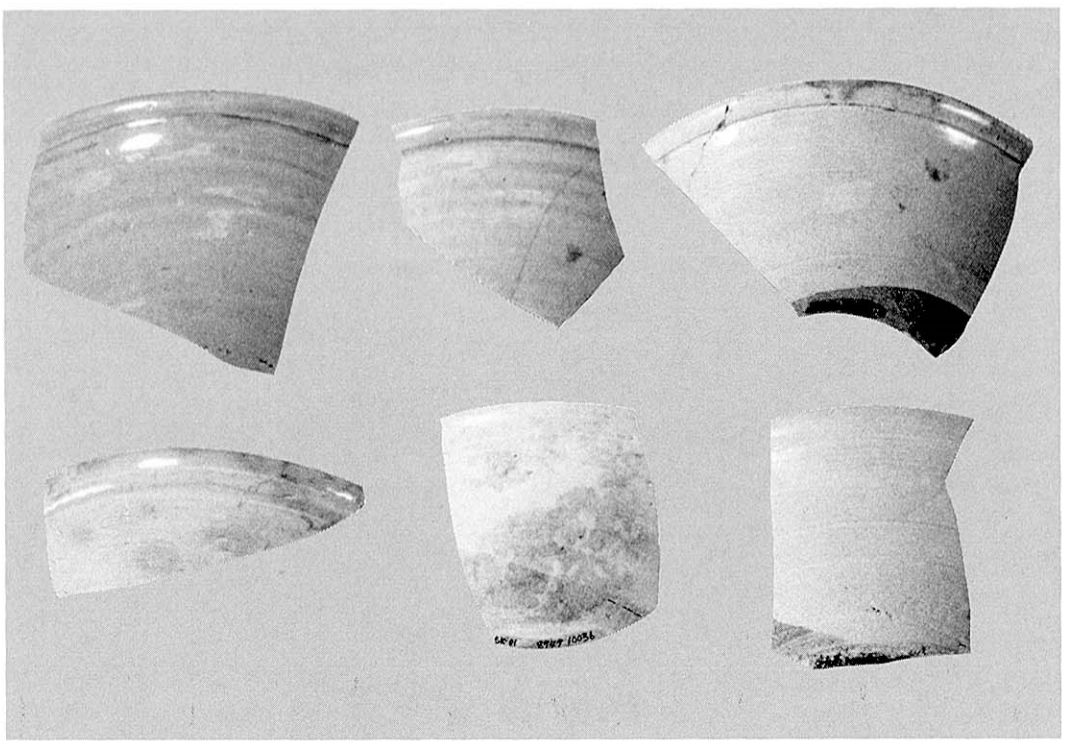




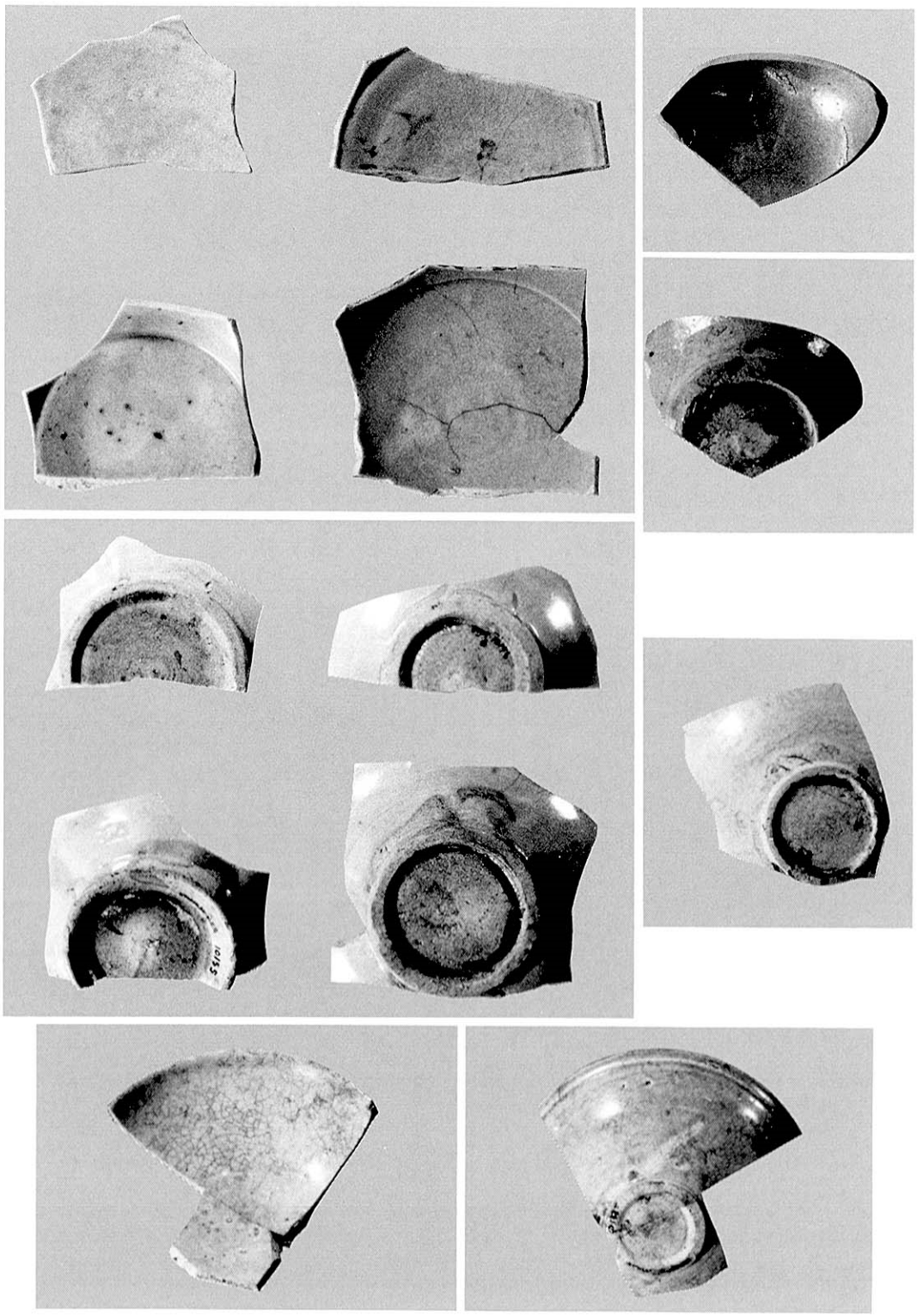


SK-01 出土白磁器 I

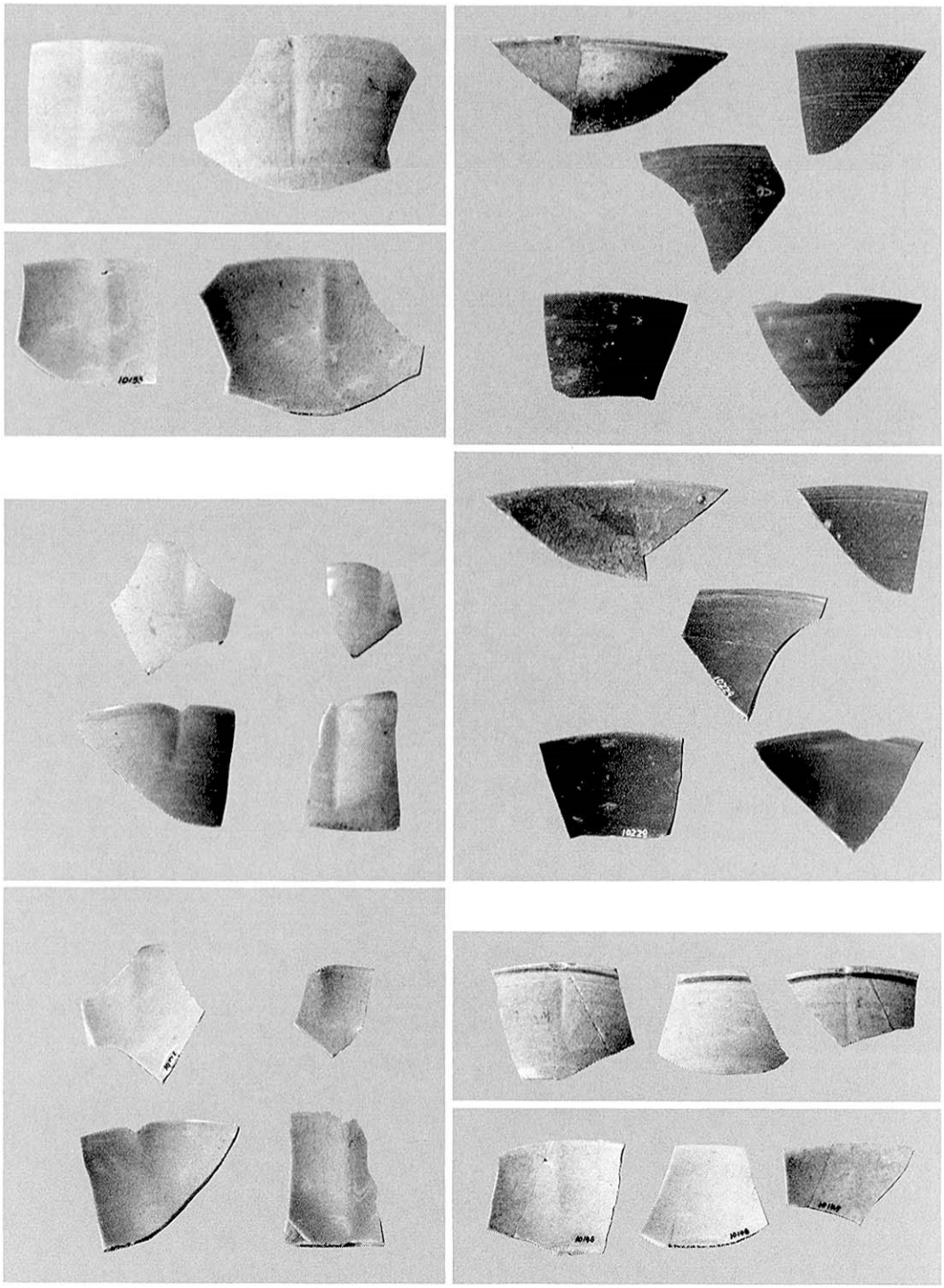




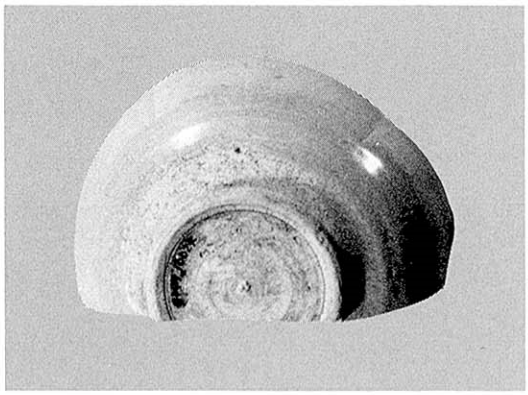
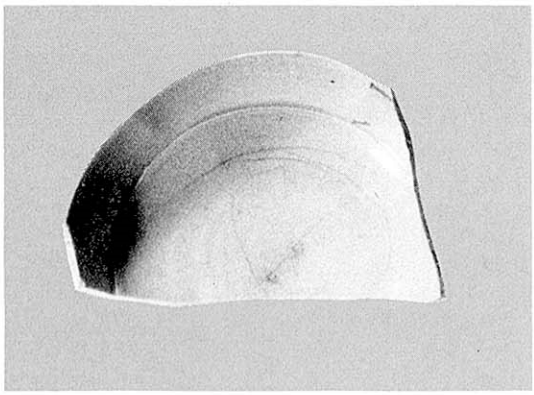
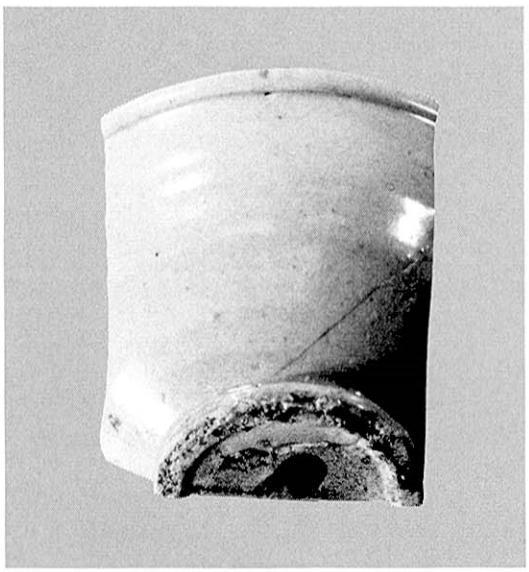
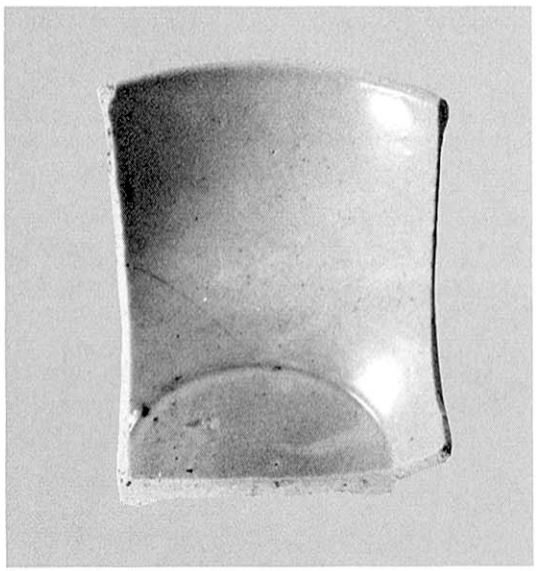
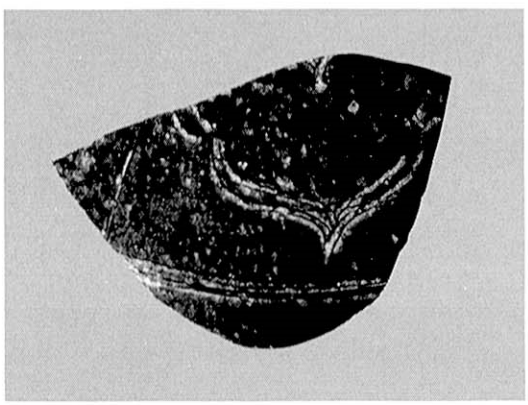
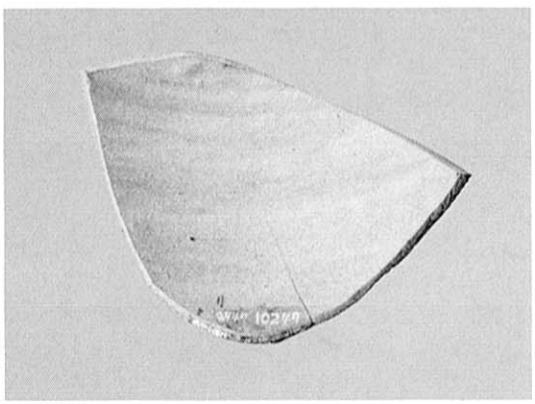
SK-01 出土白磁器Ⅱ



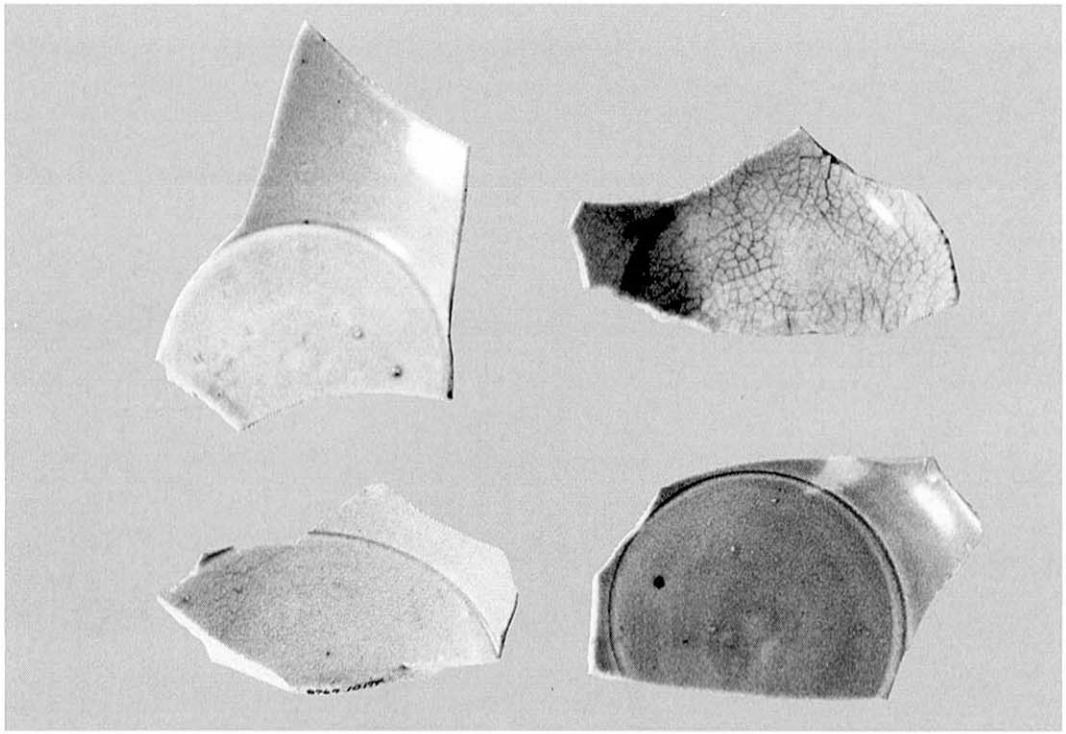
SK-01 出土白磁器と青磁器

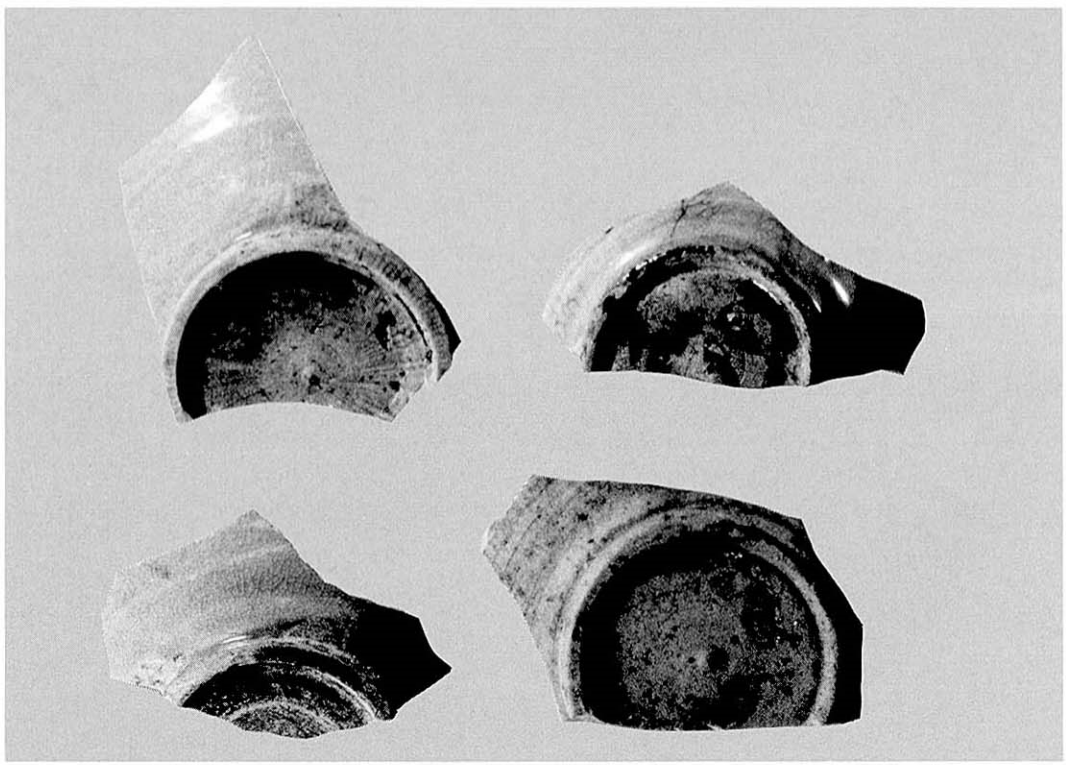


SK-01 出土白磁器と青磁器

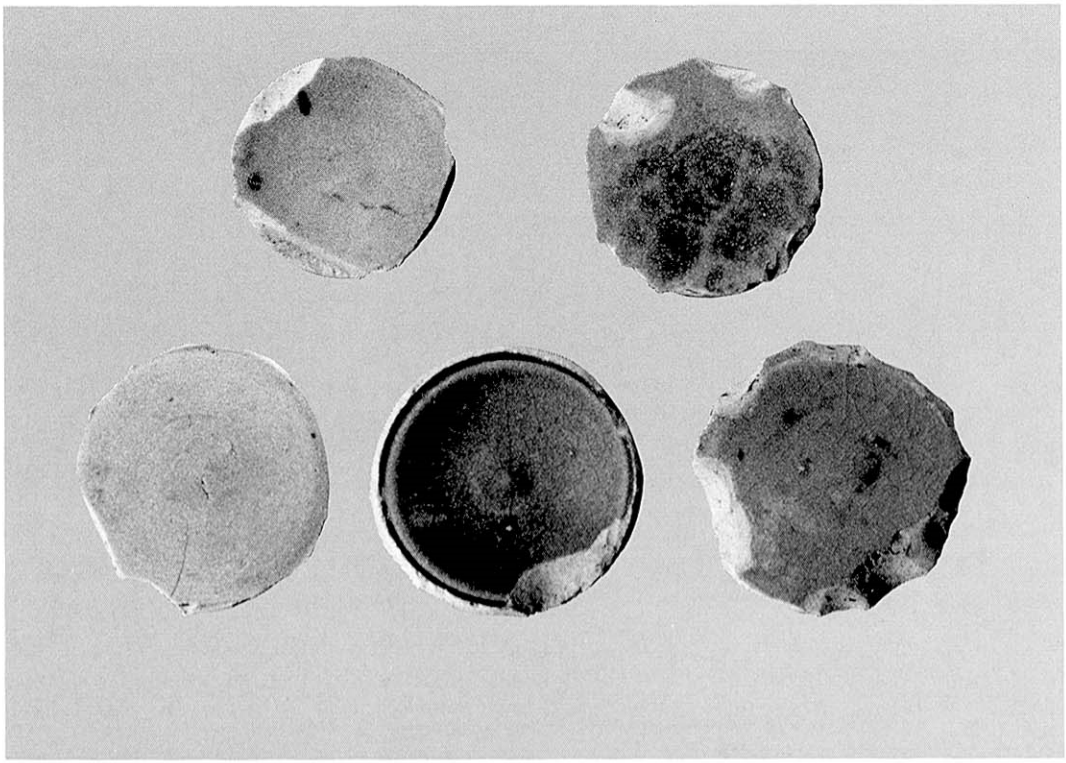







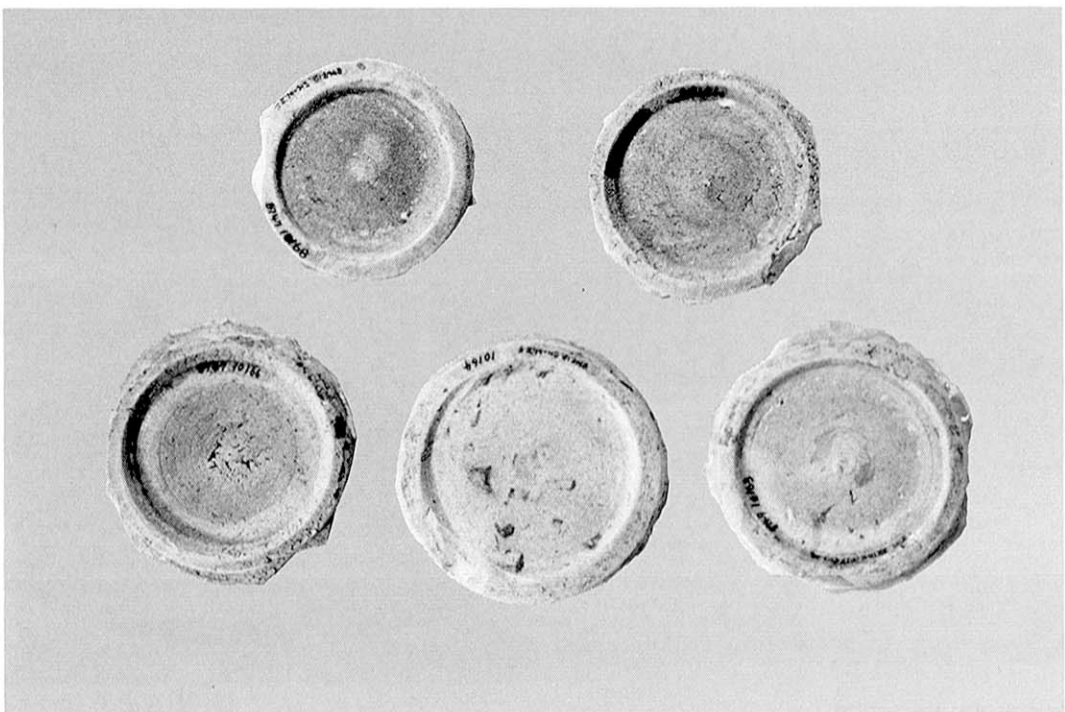
SK-01 出土白磁器と青磁器





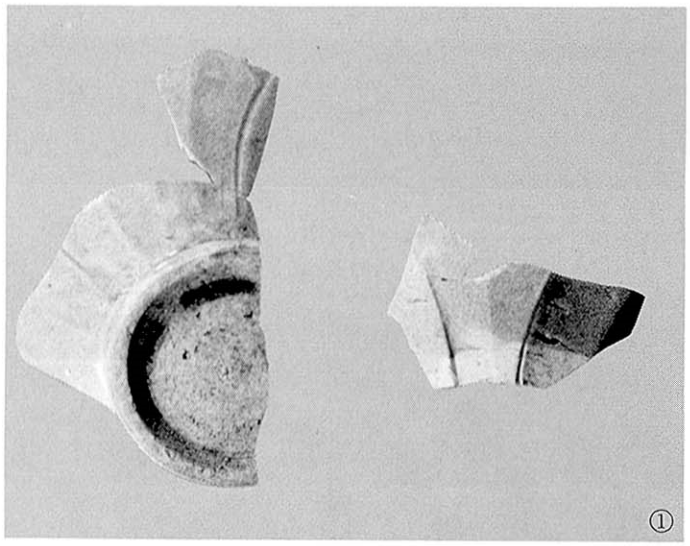
SK-01 出土白磁器

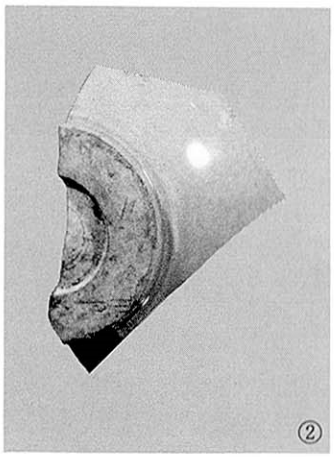


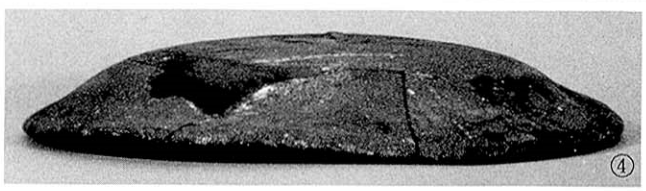


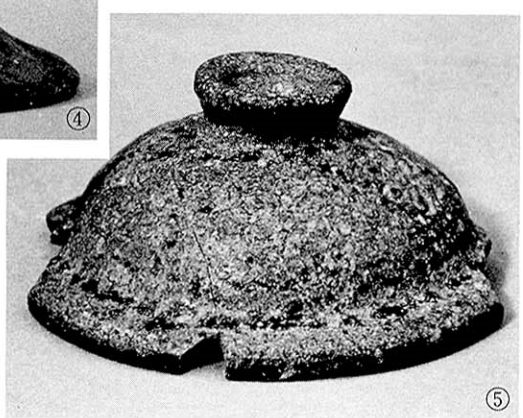
陶磁器利用の円盤

（上、身込部分・下、底部）



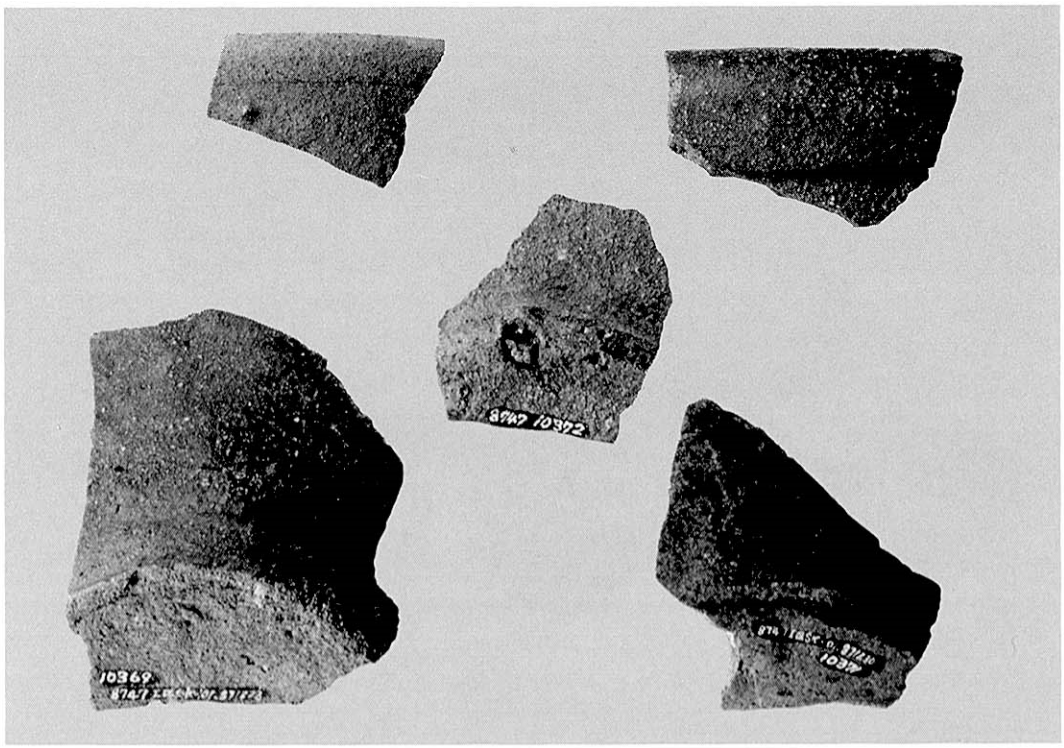


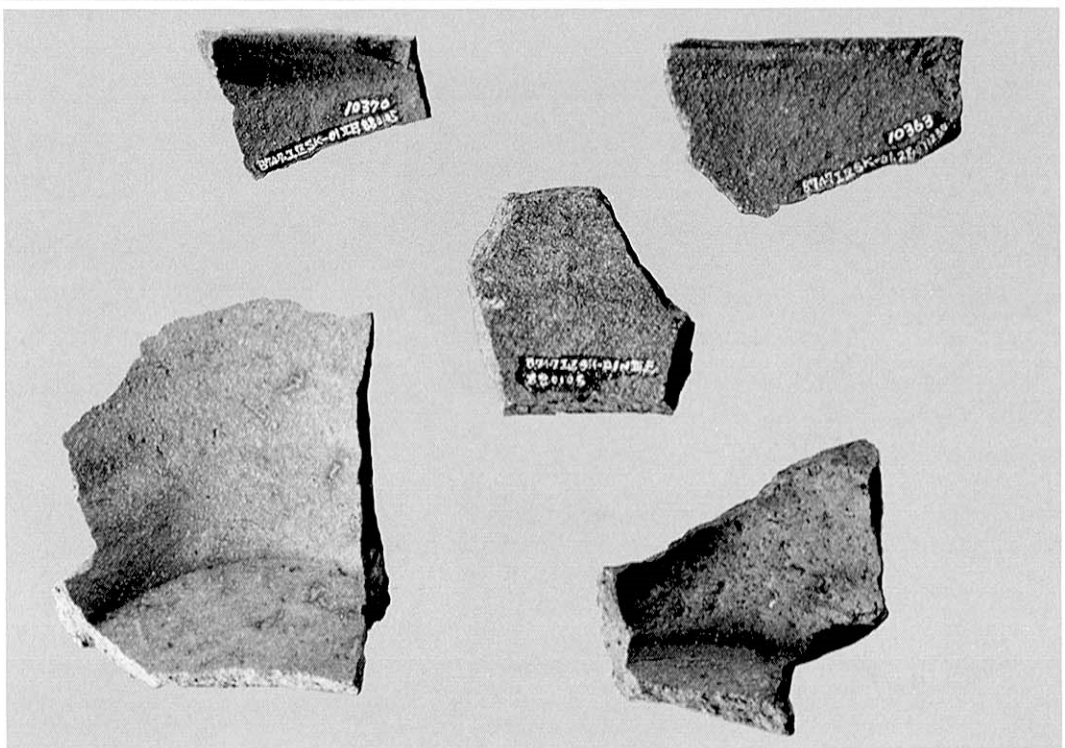




第３次調査出土陶磁器

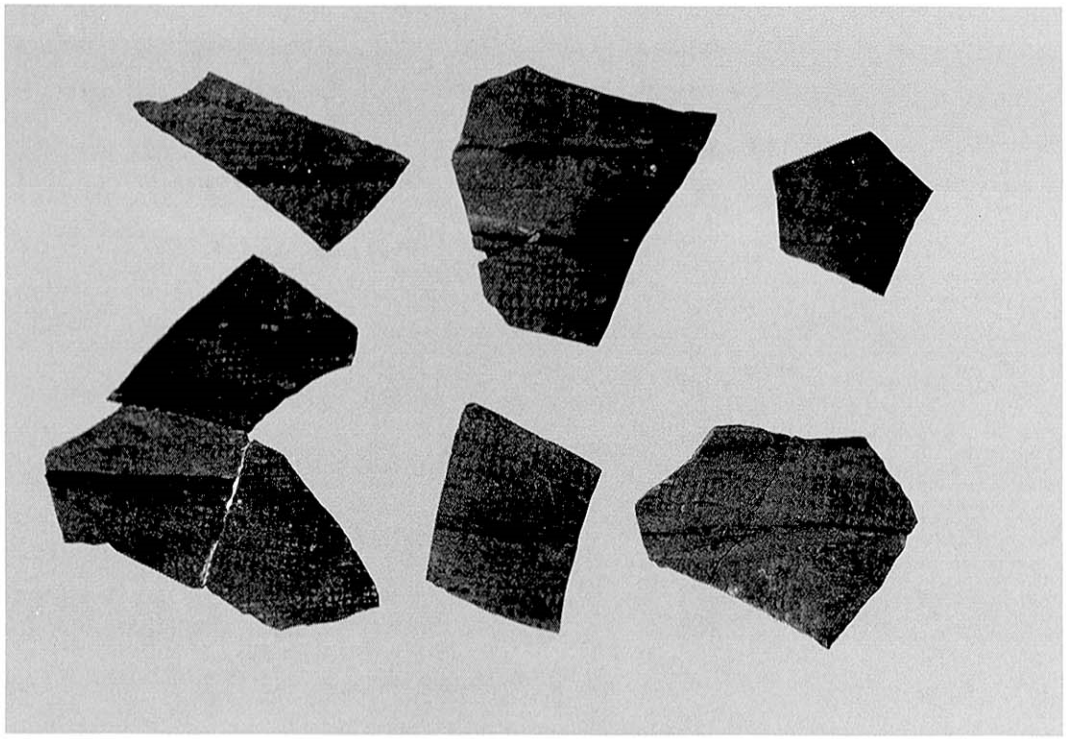
（１、２、SK-01 出土白磁器・３、SD-08 出土白磁器、４、SD-08 出土須恵器、５ SD-08 出土新羅陶器）

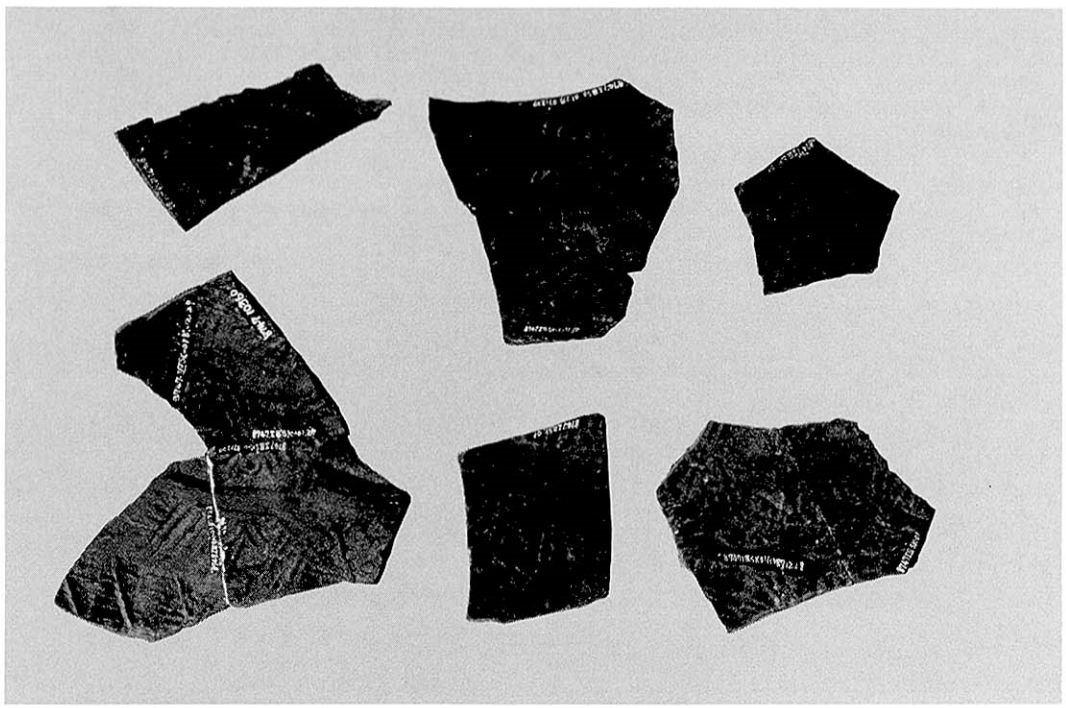




SK-01 出土無釉陶器

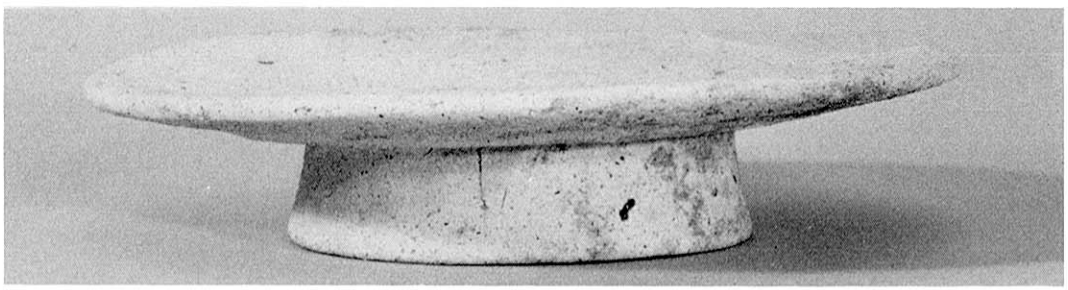
（上、外面・下、内面）

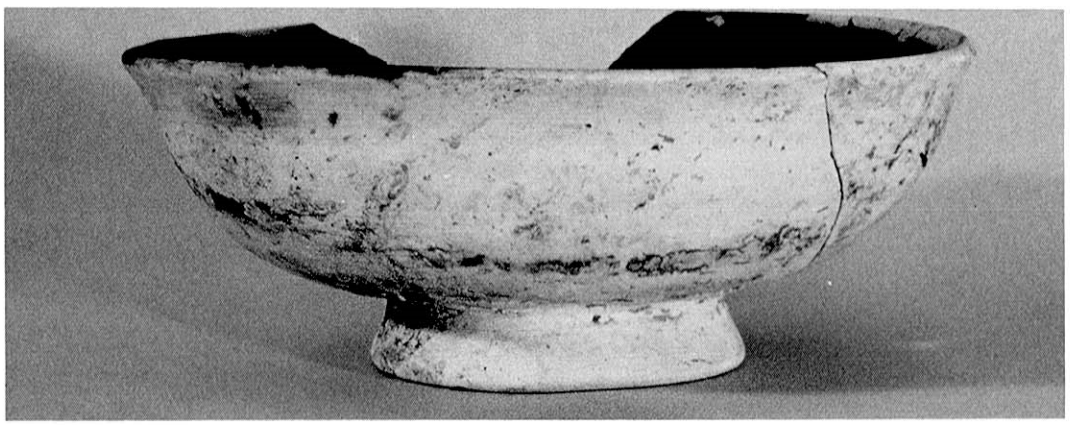


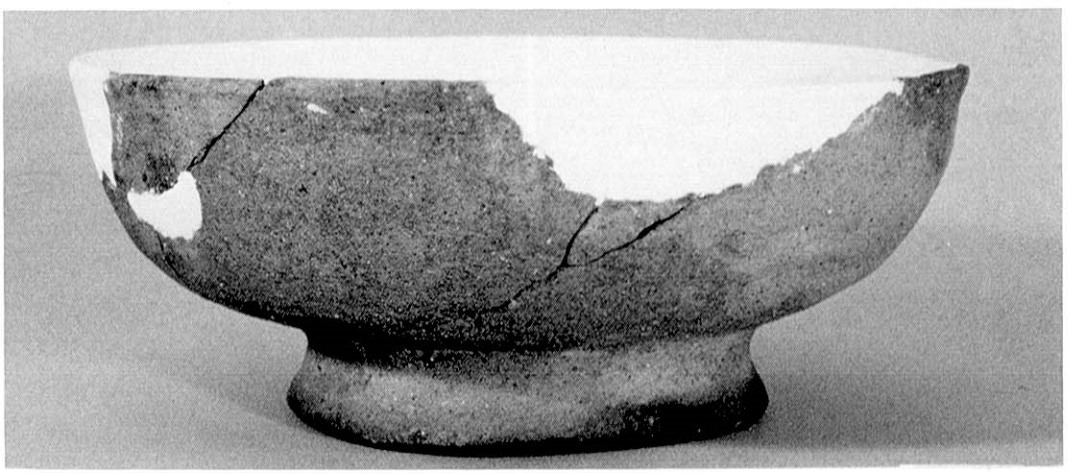


SK-01 出土高麗陶器

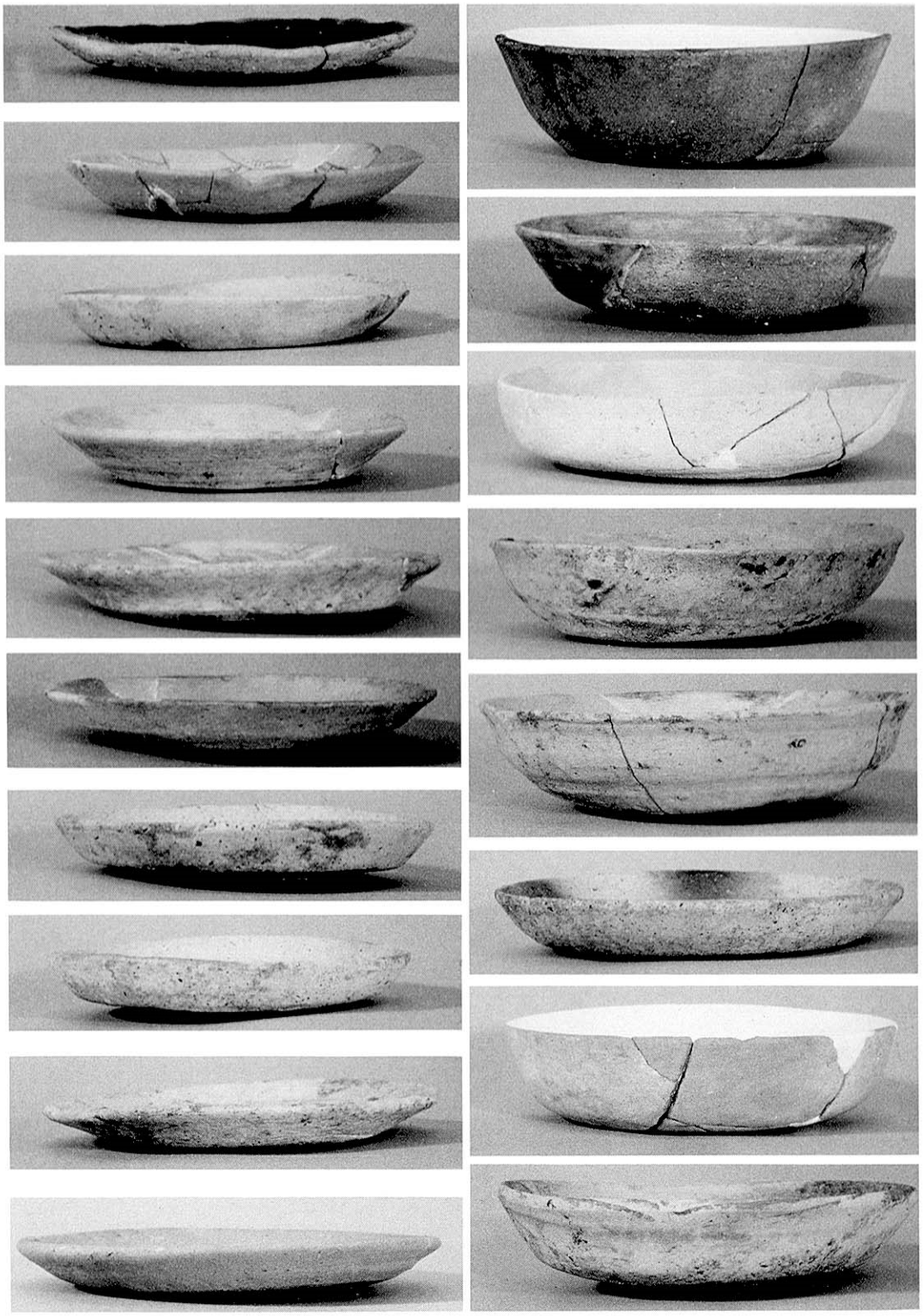
（上、外面・下、内面）



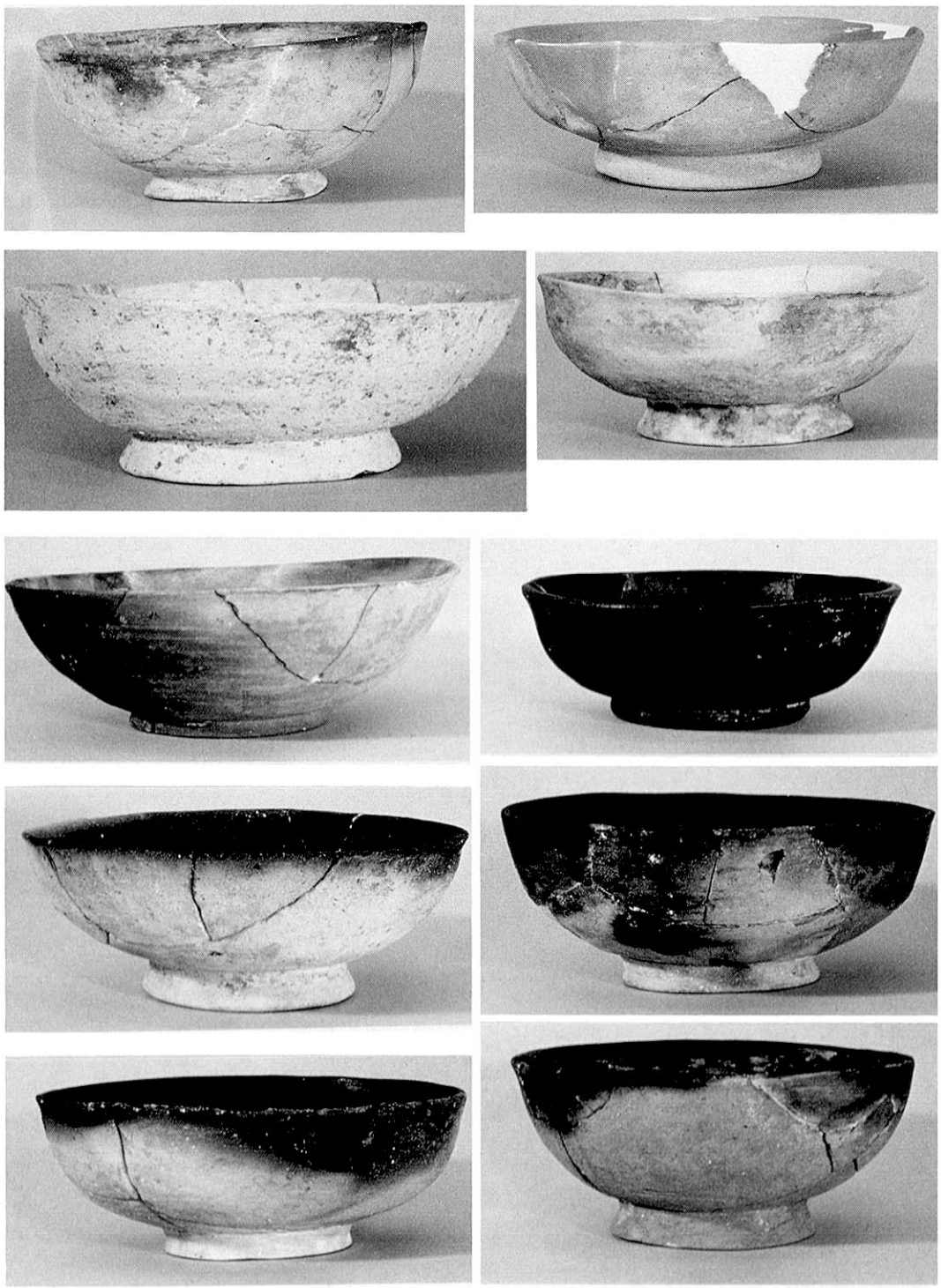




SK-01 出土土師器、黒色土器



SK-01 出土土師器（皿、坏）

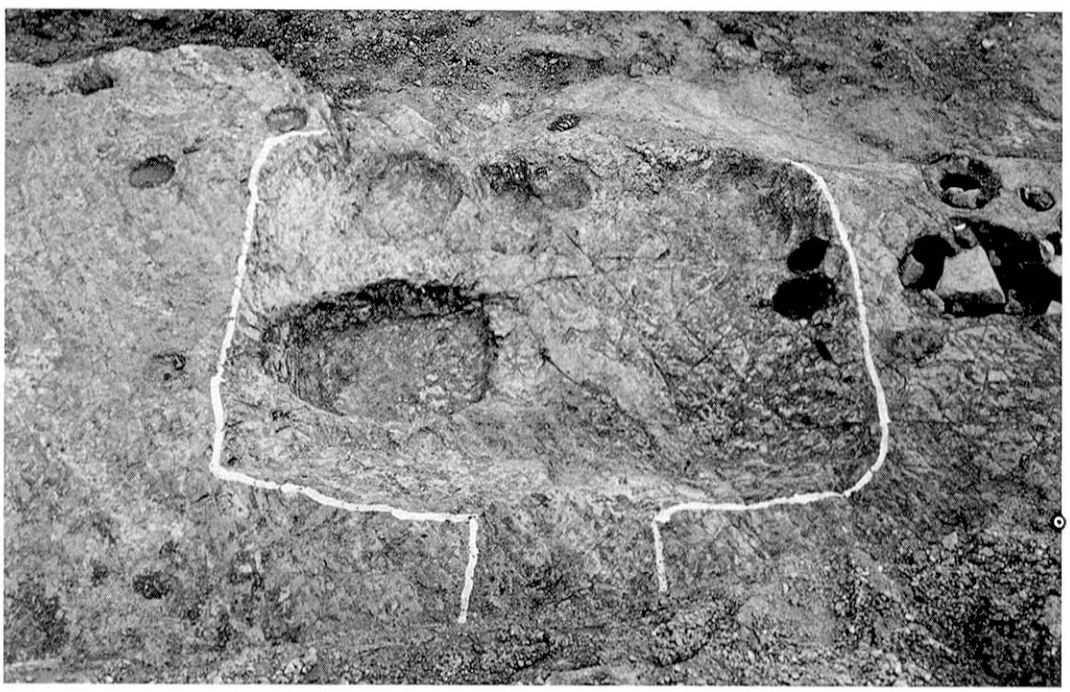


SK-01 出土土師器、黒色土器

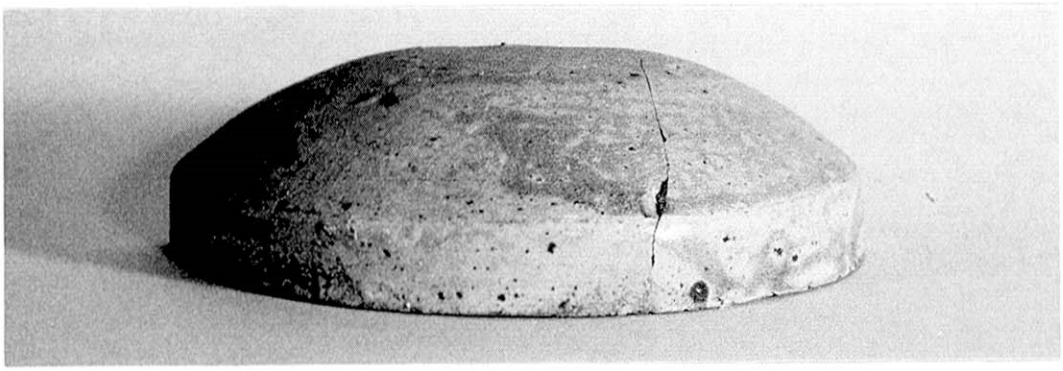
(1)　SK-02（南から）

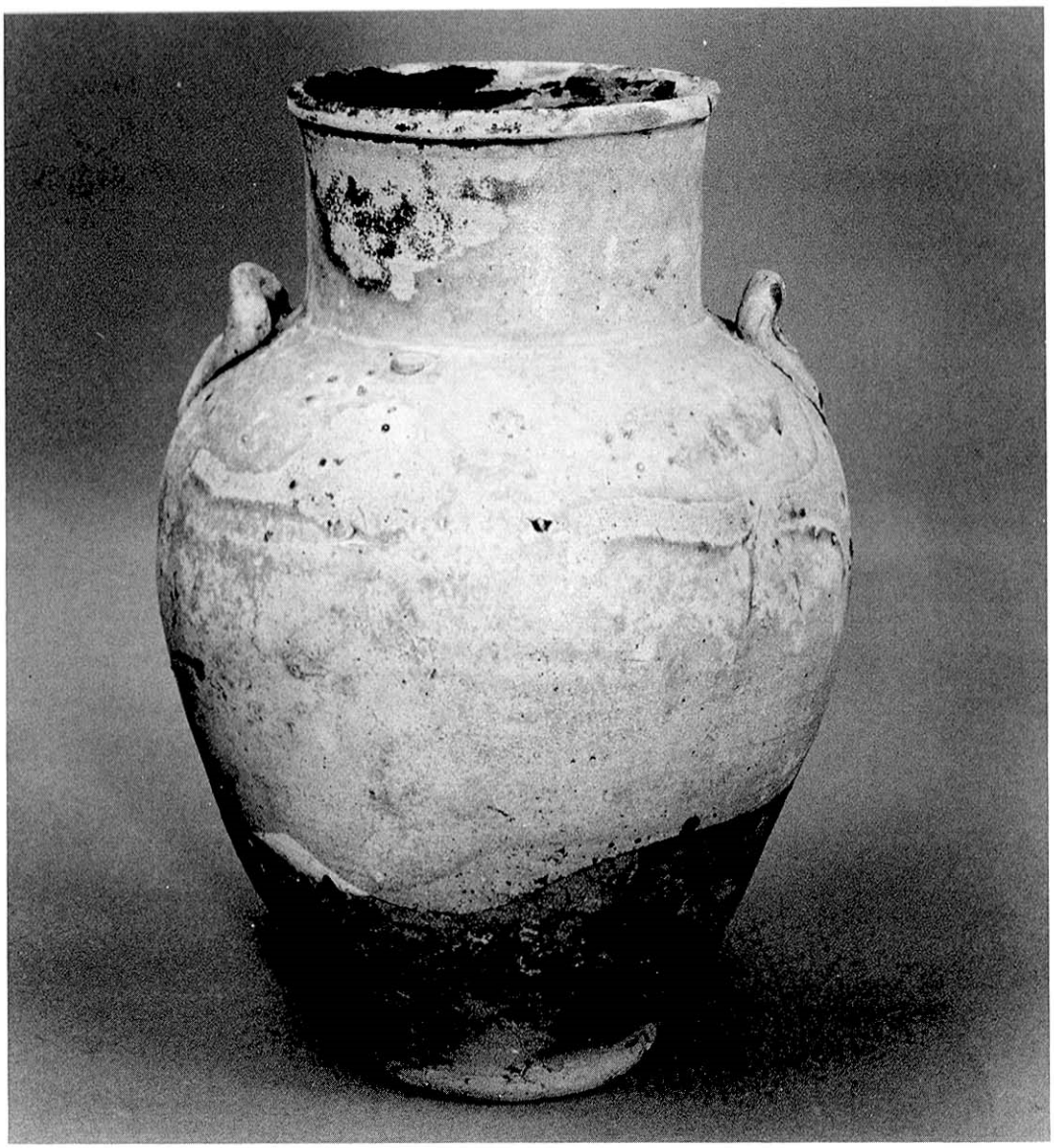
(2)　SK-02（西から）

(1)　SK-02 ガラス出土状況



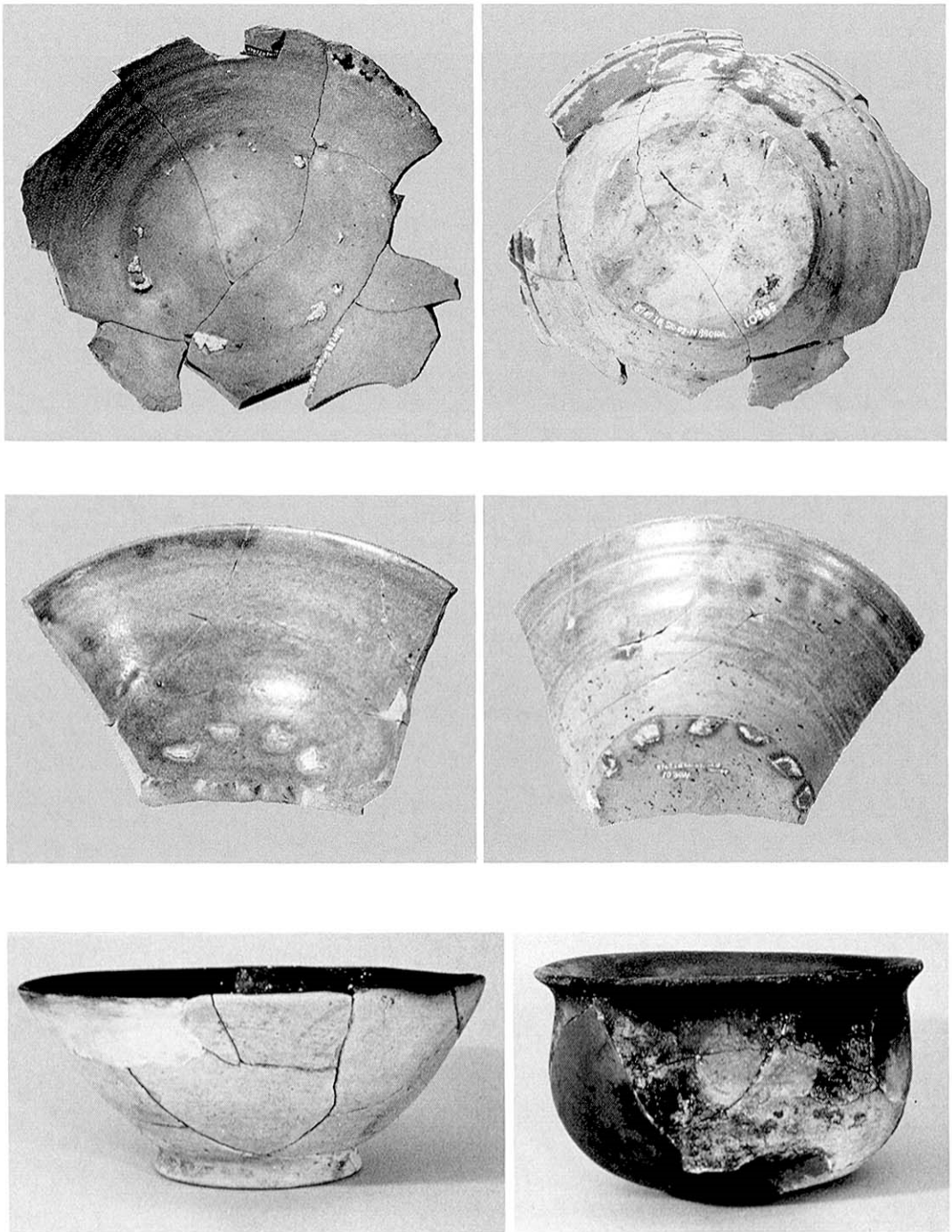
(2)　SK-02 完掘後





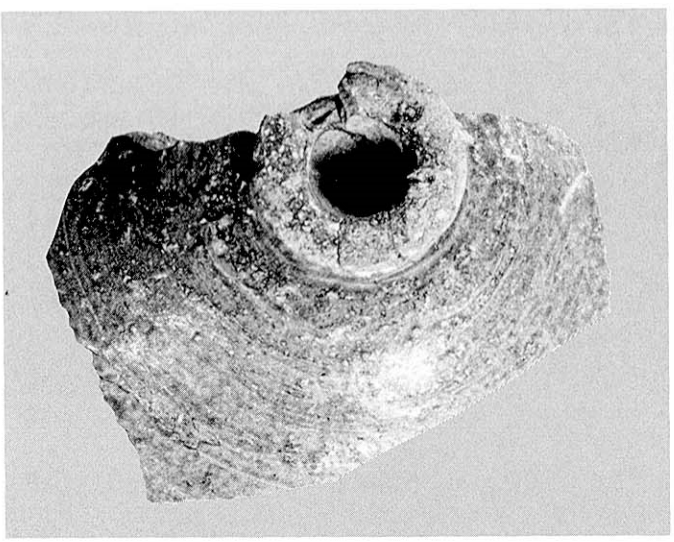
SK-02 出土遺物

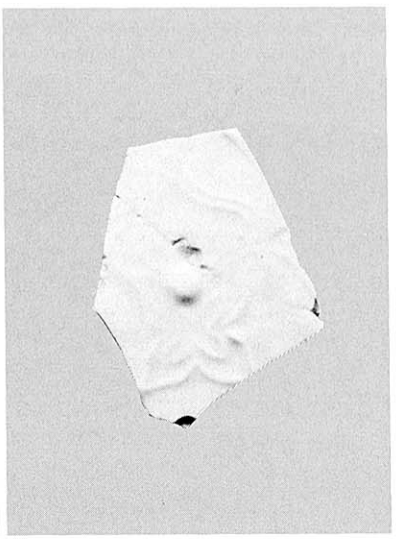
（上、青磁合子蓋・下、青磁褐彩四耳壺）



SK-02 出土遺物

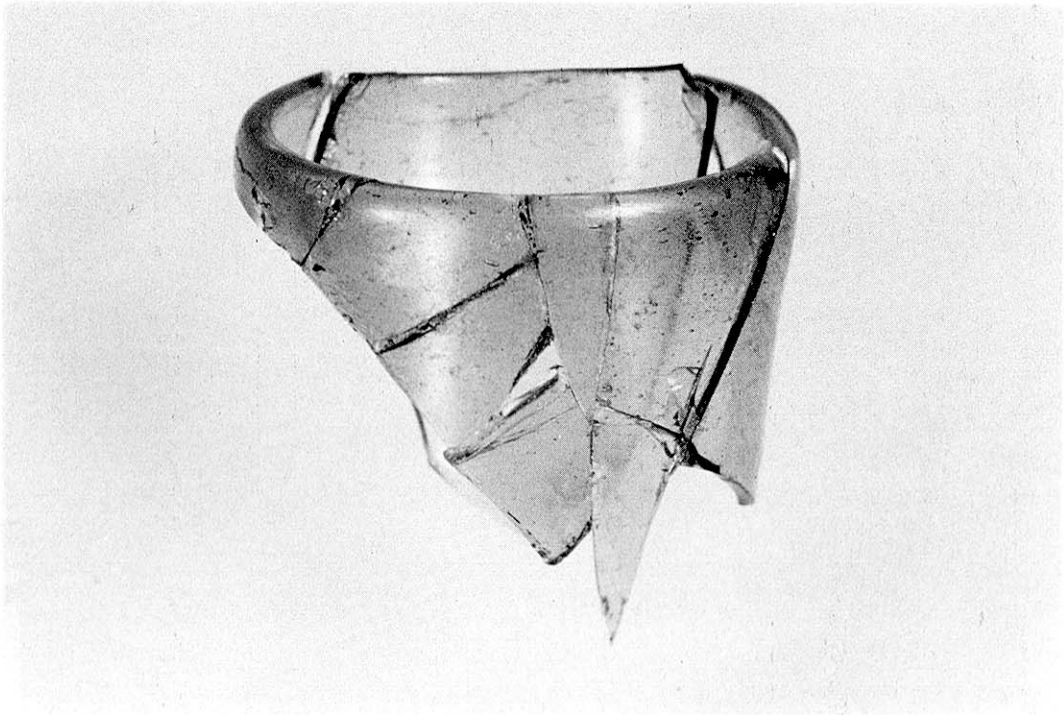
（上二段、青磁器碗・下、黒色土器）

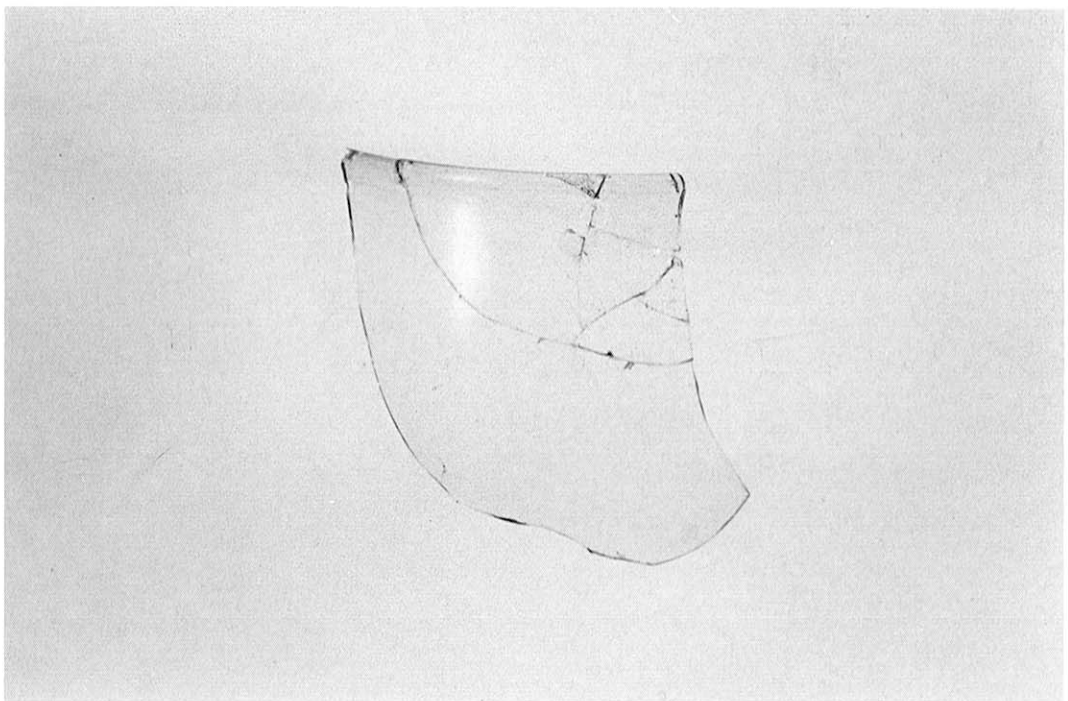




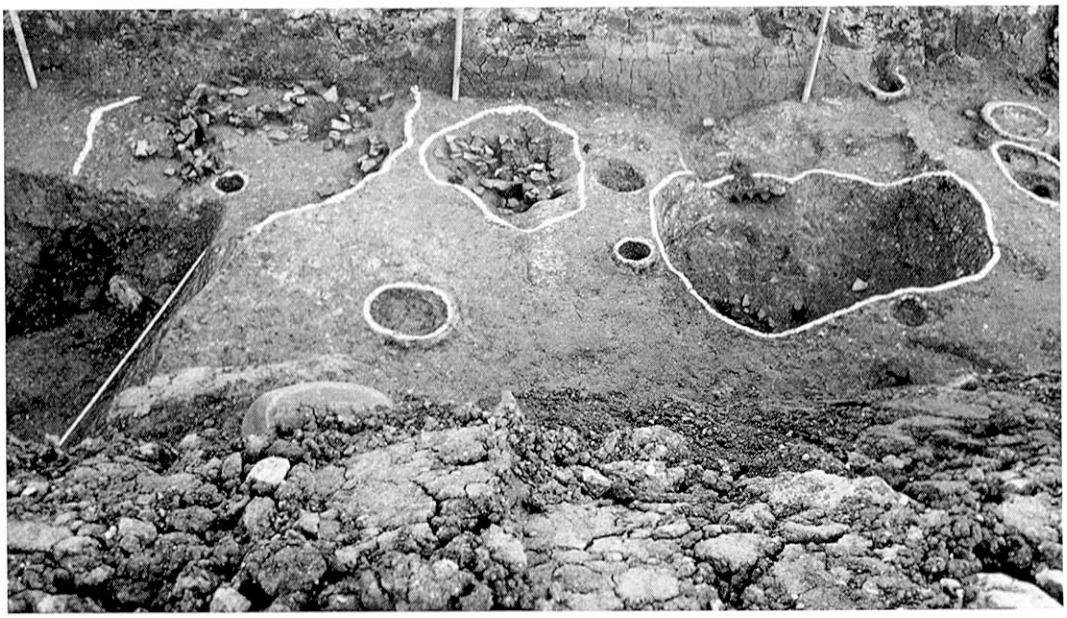
SK-02 出土遺物

（上二段、青磁器碗・下左、青磁器蓋・下右、白磁器）



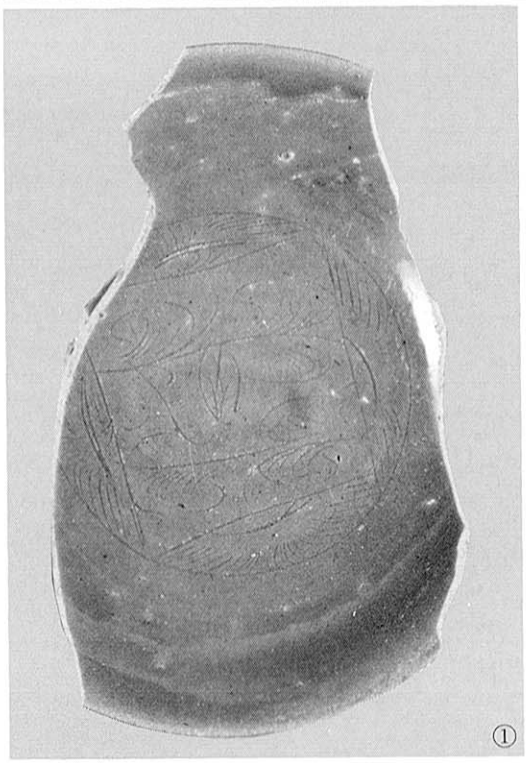


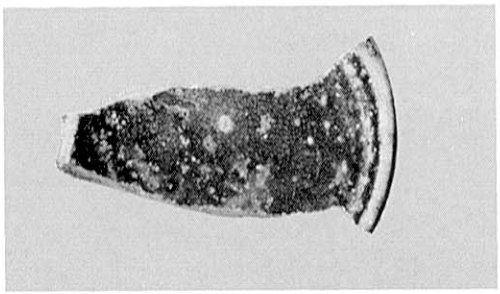
SK-02 出土ガラス容器

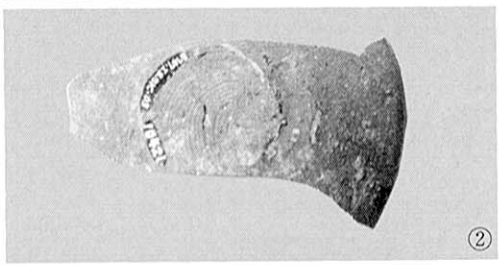


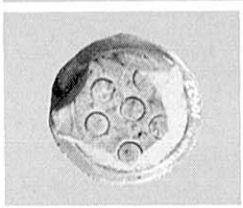
(1)　SK-03～05 検出状況

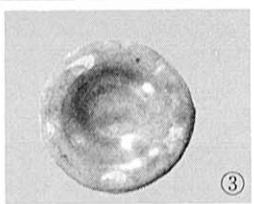
(2)　SK-05 検出状況









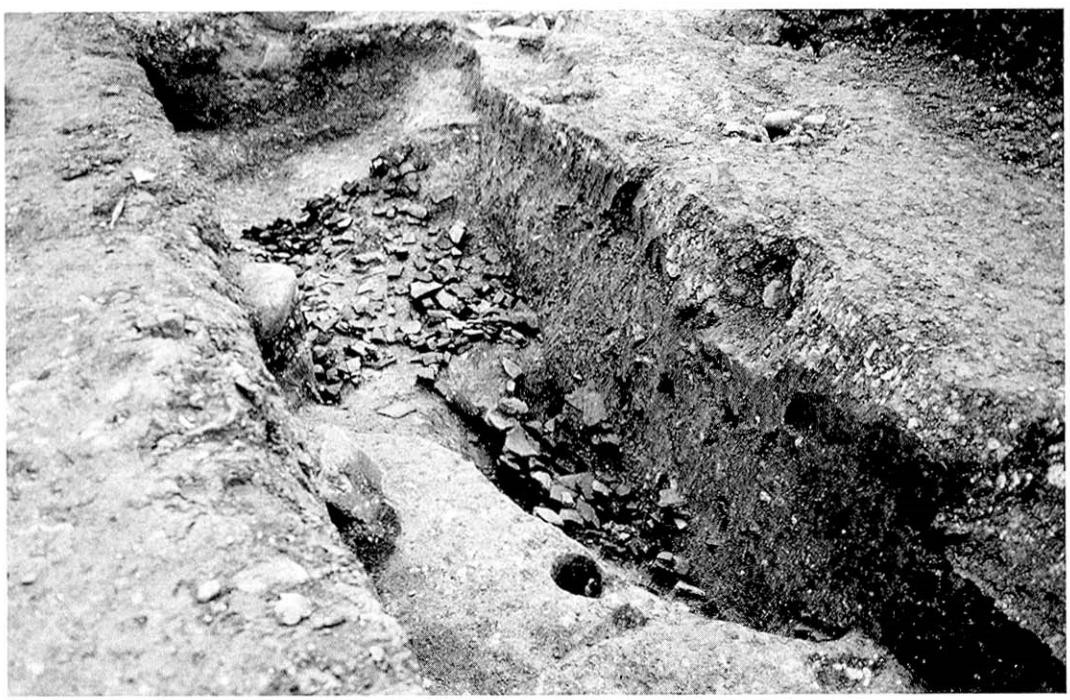


(1)　SK-03 遺物出土状況

(2)　SK-03 出土遺物

（1、青磁器（草花文皿）2、褐釉陶器（灯盞）3、青磁器）

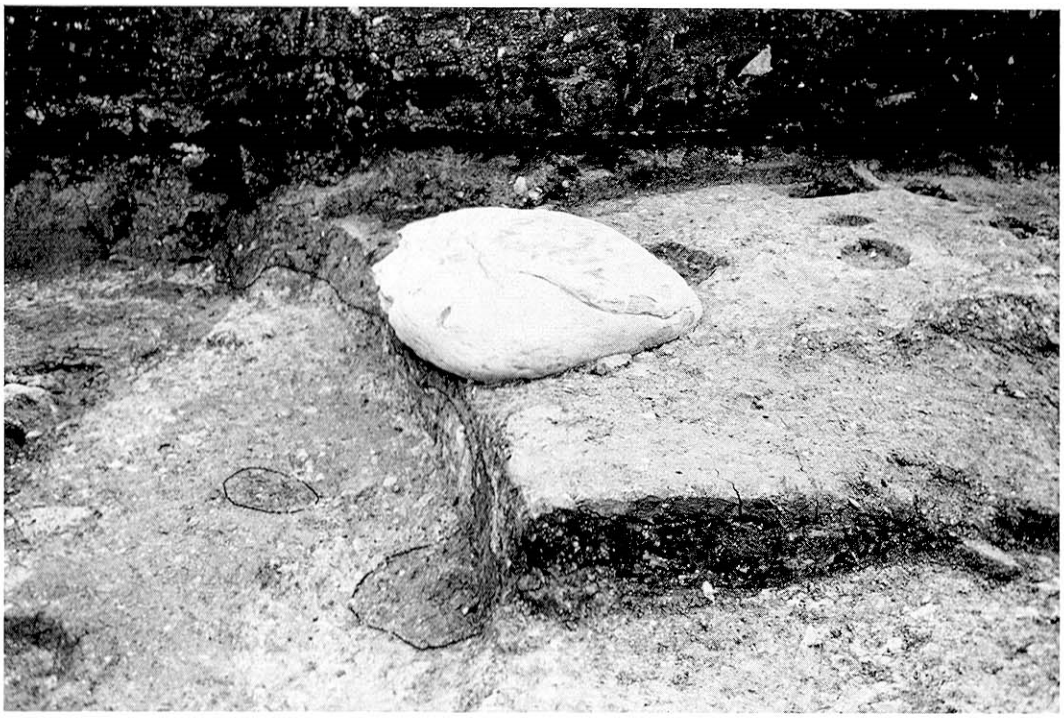
(1)　SD-06（南から）



(2)　SD-06（北から）

(1)　SD-06 硯出土状況

(2)　SD-06 完掘状況



(1)　Ⅰ区　礎石出土状況（原位置より移動）

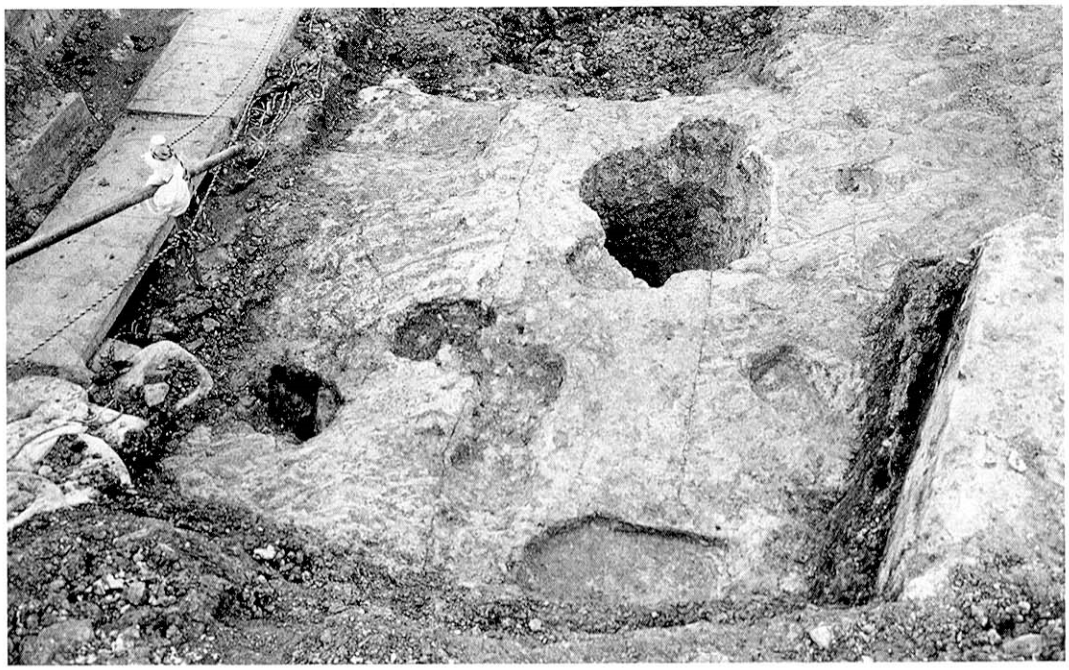
(2)　Ⅰ区　地業土層断面

(1)　SB-11（南から）

(2)　SB-11（東から）

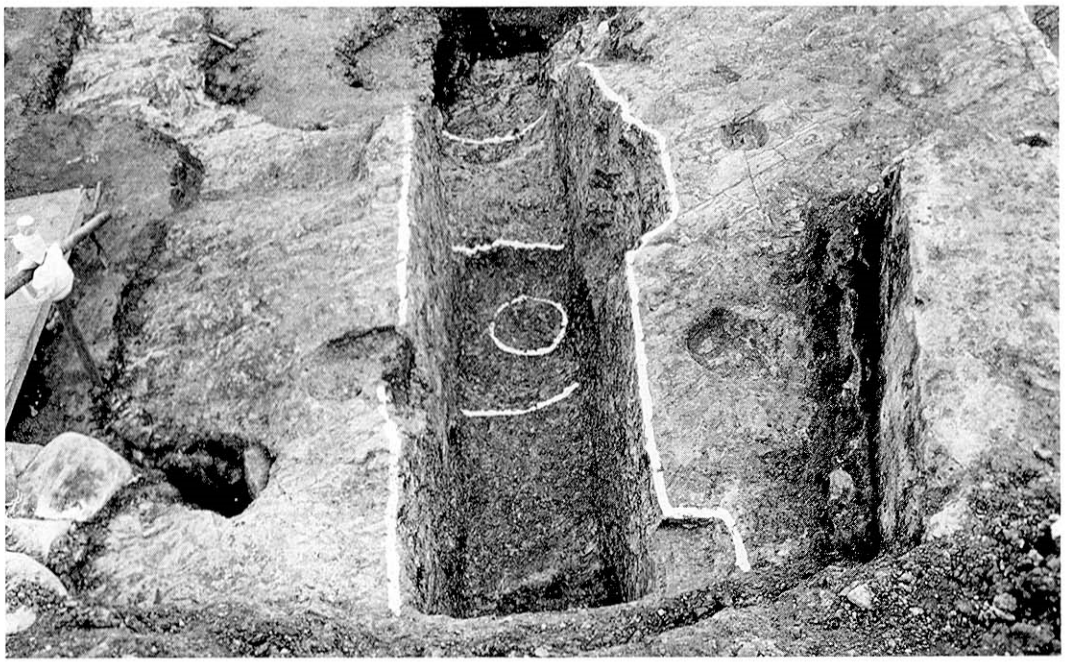
(1)　SB-11 完掘後

(2)　SD-08 瓦出土状況



(1)　SB-15・16 検出状況

(2)　SB-15 完掘状況



(1)　SB-15・SB-16 の切り合い関係

(2)　SB-15 布掘り断面

福 岡 市

鴻 臚 館 跡 Ⅱ

福岡市埋蔵文化財調査報告書
＜第315集＞

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
電話（福岡）711－4666
平成４年３月13日

印　　刷　福岡印刷株式会社
福岡市中央区天神３丁目４－３
電話（092）751－7592